

仙台市文化財調査報告書第25集

仙台市富沢

三神峯遺跡発掘調査報告書

—東北電力送電線鉄塔移設に伴う
北東部C地点緊急発掘調査—

昭和55年12月

仙 台 市 教 育 委 員 会
東 北 電 力 株 式 会 社 宮 城 支 店

仙台市富沢

三神峯遺跡発掘調査報告書

—東北電力送電線鉄塔移設に伴う
北東部C地点緊急発掘調査—

昭和55年12月

仙 台 市 教 育 委 員 会
東北電力株式会社 宮城支店

序 文

最近、都市圏の拡大に伴う新しい都市問題が表面化しつつあって、都市環境の整備、充実を目指すに公共事業等の増大が顕著になってきている。このような状況のなかで、これまで受け継がれてきた種々の文化遺産が漸減や消失しつつあるものも少なくない。これら先祖が銳意きづいてきた文化遺産をいかに保存し、次代に継承していくかということも立派な都市行政問題である。仙台市はこれらの問題を直視し、年々文化財行政体制整備を計りながら、漸次その効果をみるに至っている。

本報告書は、古来仙台の著名な遺跡として知られてきた三神峯遺跡に於て、東北電力株式会社が既設の送電線鉄塔を集中豪雨による崖崩れのため緊急に移設せざるを得なくなり、緊急発掘調査した時のものである。

名取川北岸一帯は、本市のなかでも数多くの遺跡の分布域として知られ、特に四大縄文遺跡（三神峯、山田上ノ台、上野、人米田）もこの地帯に包含されている。なかでも、最近の山田上ノ台遺跡発掘調査の実施に依り、5～6万年以前の生活文化を知る前期旧石器の存在も明らかになり、増え考古学上重要な地域として注目視されつつあるところとなった。

本報告も多くの人々の協力を仰ぎながら、この度発刊のはこびとなりましたが、これがあらゆる文化遺産に対する愛護心高揚の一助となることを願ってやみません。

昭和55年12月

仙台市教育委員会 教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、昭和50年8月11日～9月8日にかけて実施された仙台市富沢の三神峯遺跡の緊急発掘調査の正式報告書である。
2. 本書の内容は、緊急発掘による学術的記録と考察、研究を主とし、当遺跡に関する以前の未報告内容も付加した。
3. 本文の執筆担当は次のとおりである。

岩渕康治……1、2、3、4-(3)III、(4)、(5)、(6)A、5-(1)、(2)、(4)
佐藤則之……4-(1)、(2)、(3)I、II、(6)B、C、D、5-(3)
梶原 洋……6、特別寄稿
4. 本書の編集および図面の作成、浄書には岩渕、佐藤があたり、梶原と柳田俊雄がこれを助けた。また東北大学文学部考古学研究室の全面的な支援を受けた。
- 写真撮影は遺跡、造構関係は岩渕が、遺物関係は佐藤が行なった。
5. 訳訳、引用文献等は各項毎に末尾に掲載している。
6. 三神峯遺跡C地点に関しては、調査時において現地説明会資料を発行したが、本報告の記載をもって優先する。
7. 本調査に関する庶務的業務は東北電力宮城支店が行ない、一部仙台市教育委員会社会教育課が、前者の委任を受けて行なった。

本文目次

序

例 言

1. 遺跡の位置と環境	3
2. 調査に至る経過	5
3. 調査の方法と経過	8
4. 調査内容	11
(1). 基本層序	11
(2). 発見遺構	12
第1号住居跡	12
第2号住居跡	16
第3号住居跡	18
上器埋設遺構	22
(3). 発見遺物	23
I. 繩文土器	23
1. 第1層出土土器	23
2. 第2a層出土土器	27
3. 第2b層出土土器	29
4. 第2層出土土器	29
5. 第3層出土土器	33
II. 石 器	34
A. 剥片石器	34
1. 石 磨	34
2. 石 匙	36
3. 石 簋	42
4. 石 槍	45
5. 石 錐	45
6. スクレーパー	49
B. 石 核	54
C. 磨製石器	56

1. 磨製石斧	56
2. 石 盆	56
3. 磨石、凹石、礫	59
III. その 他	61
(4) 住居跡床面出土の炭の放射性炭素による年代別測定結果	62
(5) 昭和48年度調査成果（B 地点）	63
(6) 過去の未報告遺物	67
A. 土 偶	67
B. 袋状土器	69
C. 磨製石斧	69
D. 石 桿	70
5. まとめと考察	72
(1). 遺跡の形成年代と構成	72
(2). 垂穴住居跡構造様式の比較検討	73
(3). 遺物の考察	75
A. 繩文土器	75
B. 石 器	81
〈引用参考文献〉	84
(4). 仙台市内の原始時代集落跡の分布	99
6. <特別寄稿>	
三神峯遺跡出土石器の使用痕について	103
写 真 図 版	115

挿 図・表 目 次

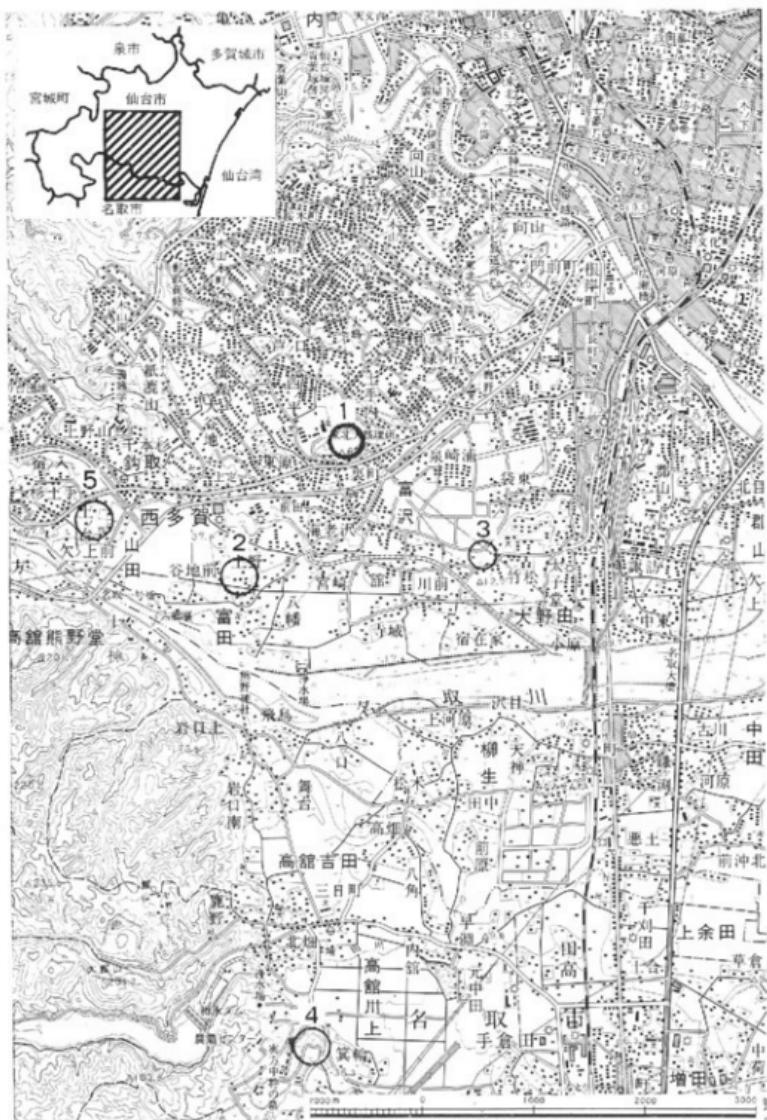
第1図 位置図	1	第8図 第2号住居跡実測図、出土遺物	17
第2図 道路付近地形図	3	第9図 第3号住居跡出土土器実測図	18
第3図 遺跡地形図	9・10	第10図 第3号住居跡実測図	19
第4図 基本層序	11	第11図 第3号住居跡出土石器	20
第5図 第1号住居跡出土土器	12	第12図 第3号住居跡出土土器拓影	21
第6図 調査全図	13・14	第13図 土器埋設遺構	22
第7図 第1号住居跡実測図、出土遺物	15	第14図 第1層出土土器拓影(1)	24

第15図	第1層出土土器拓影(2).....	25	第38図	B地点調査実測図.....	65・66
第16図	第2a層出土土器拓影.....	28	第39図	土偶実測図.....	68
第17図	第2b層出土土器拓影.....	30	第40図	袋状土器実測図.....	69
第18図	繩文土器実測図.....	31・32	第41図	磨製石斧実測図.....	69
第19図	第3層出土土器拓影.....	33	第42図	石核実測図.....	71
第20図	石錐実測図.....	35	第43図	三神峯遺跡竪穴住居跡.....	74
第21図	石匙実測図(1).....	37	第44図	今熊野遺跡竪穴住居跡.....	74
第22図	石匙実測図(2).....	38	第2表	繩文土器文様構成一覧表.....	88
第23図	石匙実測図(3).....	39	第3表	石錐計測表.....	89
第24図	石匙実測図(4).....	40	第4表	石匙、石鏡一覧表.....	90
第25図	石鏡実測図(1).....	43	第5表	石槍、石錐、石斧一覧表.....	91
第26図	石鏡実測図(2).....	44	第6表	石皿一覧表.....	92
第27図	石鏡、石槍実測図.....	46	第7表	凹石、磨石一覧表.....	92・93
第28図	石槍実測図.....	47	第8表	剥片一覧表(1).....	94
第29図	石槍、石錐実測図.....	48	第9表	剥片一覧表(2).....	95
第30図	スクレーパー、フレイク実測図(1) ..	50	第10表	剥片一覧表(3).....	96
第31図	スクレーパー、フレイク実測図(2) ..	51	第11表	剥片一覧表(4).....	97
第32図	スクレーパー、フレイク実測図(3) ..	52	第12表	剥片一覧表(5).....	98
第33図	スクレーパー、フレイク、石核実測図	55	第45図	仙台市内原始時代遺跡分布図101-102	
第34図	磨製石斧実測図.....	57	第13表	石匙使用痕分析結果(1).....	110
第35図	石皿実測図.....	58	第14表	石匙使用痕分析結果(2).....	111
第36図	磨石、凹石実測図.....	60	第46図	実験による使用痕の例(写真) ..	112
第37図	土製円板実測図.....	61	第47図	石匙に見られる使用痕(写真) ..	113
第1表	B地点検出住居跡一覧表.....	64	第48図	石匙に見られる使用痕(写真) ..	114

写 真 図 版 目 次

写真1	航空写真(1).....	116	写真6	調査風景(2).....	119
写真2	航空写真(2).....	117	写真7	調査風景(3).....	119
写真3	遺跡遠景.....	118	写真8	トレンチ南壁セクション.....	120
写真4	調査地点近景.....	118	写真9	中央アゼセクション.....	120
写真5	調査風景(1).....	119	写真10	1号、2号住居跡全景.....	121

写真11	2号住居跡埋土セクション	121	写真29	遺物写真－土器(5).....	131
写真12	2号住居跡細部.....	122	写真30	遺物写真－石器(1)(石鎌).....	132
写真13	遺物出土状況.....	122	写真31	遺物写真－石器(2)(石匙).....	133
写真14	3号住居跡全景.....	123	写真32	遺物写真－石器(3)(石槍).....	134
写真15	3号住居跡南北セクション	123	写真33	遺物写真－石器(4)(石錐、石核).....	135
写真16	3号住居跡東西セクション	123	写真34	遺物写真－石器(5)(石籠).....	136
写真17	3号住居跡全景.....	124	写真35	遺物写真－石器(6)(剥片類－(1)).....	137
写真18	3号住居跡細部(1).....	124	写真36	遺物写真－石器(7)(剥片類－(2)).....	138
写真19	3号住居跡細部(2).....	125	写真37	遺物写真－石器(8)(磨製石斧).....	139
写真20	土器埋設構検出写真.....	125	写真38	遺物写真－石器(9)(磨製石斧、石核).....	140
写真21	土器埋設掘り下げ状況.....	125	写真39	遺物写真－石器(10)(石皿).....	141
写真22	昭和48年度(B地点)遠景	126	写真40	遺物写真－石器(11)(凹石).....	142
写真23	昭和48年度調査区全景.....	126	写真41	遺物写真－石器(12)(凹石、磨石).....	143
写真24	昭和48年度住居跡埋土断面	126	写真42	遺物写真－石器(13)(磨石).....	144
写真25	遺物写真－土器(1).....	127	写真43	遺物写真－その他.....	145
写真26	遺物写真－土器(2).....	128	写真44	遺物写真－1、2、3号住居跡出土遺物	146
写真27	遺物写真－土器(3).....	129	写真45	土偶、袋状土器.....	147
写真28	遺物写真－土器(4).....	130			



1. 三神峯遺跡 2. 上野遺跡 3. 六反田遺跡 4. 今熊野遺跡 5. 上ノ台遺跡

第一圖位 置圖

1. 遺跡の位置と環境

三神峯遺跡は、仙台市富沢字金山1番地(現在地名変更=仙台市三神峯一丁目)に所在する。仙台駅の西南方約4キロ付近に位置する。ちょうど仙台市南部市街地を形成する長町から西へ国道286号線(秋保街道)が通るが、長町から2.5キロほど西へ向かって国道の右側にある、最高点標高が69mの小高く東西に長い丘陵部全体が遺跡の在地である。

この国道286号線の北側には、奥羽山系から分岐して東方向へのびる八木山-佐保山丘陵の枝尾根が東南方向にのびているが、三神峯丘陵は、その中でもさらに沖積地に向かって突出したような位置を占める。ために眺望優れ、また市内でも屈指の桜の名所で、古くから市民にもなじみの深い土地柄となっている。現在は市が管理する国有地で、キジも闊歩する數少ない自



第2図 遺跡付近地形図 (○印調査地点)

然公園の一つである。地形的には、名取川が形成した上部河岸段丘（青葉山段丘）となっている。中位段丘（中町段丘）面との比高は約40m、現在の西多賀平野である低位段丘（下町段丘）面との比高は約55mとなっていて、丘陵の南斜面は比較的急傾斜をなして段丘崖の様相を呈している。

地質的には、丘陵下層部は凝灰質泥岩ないし浮石細粒凝灰岩層（八木山層および大年寺層＝第三紀後期鮮新世、B.P. 100～200万年以上）を基盤とし、上部には段丘礫層（青葉山層）が位置し、黄色粘質シルト層がこれを覆う。遺跡のほとんどはこの黄色粘質シルト層間に形成されている。遺跡には、第二次大戦以前南東部付近に幼年学校の施設があったり、戦後公園化されてから、休憩所、便所、駐車場建設、水道敷設などの工事のため部分的な破壊はなされたが、概して保存は良好のようである。遺跡の推定総面積は約75,000m²に及ぶ。

次に遺跡をめぐる歴史的環境について概観してみたい。

三神峯遺跡は、古くから縄文時代前期の遺跡として、すなわち仙台市内では最古の最大規模の原始時代遺跡として識者の間で知られてきた。確かに、この点は三神峯遺跡の最も大きな特色であり、周辺の遺跡群の配置を見ても、三神峯を基準として考えた場合にその地域的位置づけを決めるのに都合のよいものが多い。

しかし、三神峯遺跡は決して縄文前期だけの遺跡ではなく、縄文中期の土器や平安時代の土師器、須恵器なども出土し、丘陵西側には2基の古墳があり、また丘陵北斜面の基盤岩層面には横穴古墳の形成が認められ、南斜面には瓦の出土や埴輪の痕跡が発見されており、そういう面から見ると、まさに仙台の原始、古代史研究史上において、その中心的位置づけを与えられるべき大複合遺跡なのである。（なお、昭和43年発見の石核について、昭和48年度調査の「裏町古墳発掘調査報告書」の中で『旧石器』と断定したが出土状況についての吟味が不十分でありこれを取り消しておきたい。）

この三神峯周辺に所在する縄文時代遺跡で著名なのは、三神峯の西南1.6キロ、標高30mほどの中位段丘上に位置する富川の上野遺跡で、これは縄文時代中期後半～後期前半の遺跡で遺跡推定総面積は300,000m²にも及ぶと考えられている。昭和51年11月に仙台市教委によってその一部が調査され、竪穴住居跡などが確認されたが、時期的な先後関係などから三神峯→上野といった集落移動なども推測されている。

古代の遺跡群として関連が深いのは、三神峯南斜面で昭和49年4月に古窯跡研究会によって調査確認され、東北初の発見例として注目された埴輪窯跡である。これは三神峯丘陵裾部および西多賀平野でも最近確認されつつある埴輪を有する古墳群との関連が想定され、埴輪の需給をめぐる古墳時代の社会構成を考える上では、やはり中心的位置づけが与えられねばならないだろう。

こうした中で、懸念されねばならないのは、やはり昨今の急激な開発といったものが、平野部のみならず丘陵南斜面部にもはいあがってきており、一方、金洗沢の浸食によって急激な崖面を形成している北斜面に昨今、集中豪雨などの影響による崖崩れがおき始め、遺跡の保存上問題が生じていることであり、その対策について真剣に考慮しなければならない時期にはいつている。

2. 調査に至る経過

戦前から市内の代表的縄文遺跡といわれながら、三神峯遺跡は正式な発掘調査は一度もされたことがなく、一方比較的良好な形での保存状況を保ち続けてきた。しかしながら、昭和42年に仙台市公園課により三神峯公園整備計画が打ち出され、それに伴う諸施設の建設による遺跡の破壊が懸念された折りに宮城教育大学日本史研究会（顧問、平重道教授）により最初の発掘調査が実施され（A地点中心）遺跡範囲がほぼ台地全般に及ぶこと、縄文前期初頭の良好な包含層を有すること、従ってまた大規模な縄文前期初頭の集落遺跡である可能性が強いことなどが成果として打ち出された。（なお、この公園整備計画における駐車場等の建設計画はこの調査成果に基づき、昭和43年に仙台市文化財保護委員会が仙台市長へあてて「三神峯公園設計変更に関する意見書」を提出したため計画を縮少して実施されることになった。）その後、昭和48年5月には台地北東端付近（B地点）で仙台市公園課により民有地との境界柵の設置工事が実施された折り、焼土帯や土器、石器などが出土したため、仙台市教育委員会が緊急調査を実施した結果、縄文前期初頭の竪穴住居跡と思われる遺構かいずれも部分的ながら3軒確認された。この住居跡の発見は、昭和42年の宮城教育大の調査における大集落遺跡との推定を現実に裏づけたものであり、また、その発見は発掘調査によるものとしては仙台市内では最初の住居跡の発見例であること、さらに又その内容において、昭和47年に発掘調査され、当時縄文前期のものとしては日本最大の遺跡として全国的な注目を浴びた名取市今熊野遺跡の住居跡ときわめて共通した特色を有しており、立地上、編年上の類似性などからも注目を浴びるに至ったのである。

昭和49年4月には、古窯跡研究会により台地西南斜面（富沢窯跡）における発掘調査が実施され、埴輪窯跡1基が確認された。この発見は埴輪窯としては東北最初の発見という点で大きな注目を浴びたが、その他付近に群在する埴輪を有する古墳群との関係という面からも新たな問題点を提起した。

一方、昭和49年9月に宮城県地方を集中豪雨が襲った際、三神峯北東部崖面（B地点付近）

において、かってなかった崖崩れが発生、北麓部にあった民家にも被害が及び、死者の発生という事態が生じていたが、昭和50年1月18日に東北電力株式会社宮城支店より、崖崩れ地点付近にあった送電線鉄塔（土槌線No22）移設に関連しての三神峯遺跡発掘届が仙台市教育委員会に提出された。この発掘届に關し仙台市教育委員会では、宮城県教育委員会の指導のもとに、東北電力と再三現地踏査も含めて鉄塔倒壊の危険性などについて協議を重ねた。この間、宮城教育大増田助教授による『七橋線No22地点地質調査報告書』が提出され「現在の鉄塔付近は近い将来崩壊する危険性大」との鑑定があり、また仙台市開発局開発指導課からも「崖崩れにより鉄塔倒壊の危険あるため鉄塔は現位置から移設するのが望ましい」との協議文書の提出があった。昭和50年7月3日に東北電力より仙台市教育委員会あて三神峯遺跡事前調査依頼があつたが、仙台市教育委員会では、以上のような状況と他に危険防止の余地がない点などから鉄塔移設をやむをえざるものと認め、発掘範囲を当初計画より縮少し破壊面積を最低限に留めること（ $171\text{m}^2 \rightarrow 121\text{m}^2$ ）を条件としてこれを受諾した。

調査体制は以下の通りである。調査の実施ならびにその整理、報告書の作成にあたっては、東北大学文学部考古学研究室よりほぼ全面的な支援を受けた。

▽調査期間：昭和50年8月11日～9月8日（延23日）

▽調査主体：仙台市教育委員会

東北電力株式会社宮城支店

▽調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

（課長）東海林恒英

（文化財係長）佐藤 悠

（主事）鈴木高文、岩淵康治、朝倉秀之、門間美郎、田中則和

（嘱託）大泉重治

▽調査指導：藤沼邦彦（東北歴史資料館技師）

▽調査参加者：東北大学文学部考古学研究室

（助手）岡村道雄（学生）剣持みどり、後藤秀一、阿部朝衛、佐藤則之、吉岡恭平、藤原妃敏、松井 章

山田しょう、半沢正（仙台第二高等学校学生） 池田俊也（西多賀中学校生徒）

▽調査協力：東北電気工事株式会社

仙台市公園課

今野由太郎、芦井伝蔵

松井建設株式会社

▽遺物整理：柳田俊雄、樋原洋、佐藤則之（東北大学文学部考古学研究室）

（※所属は発掘調査当時のもの）

▽調査総面積：128 m²

3. 調査の方法と経過

調査は8月11日に開始された。起工式および下刈伐採終了後、現状写真撮影、地区設定を実施。調査区は11m×11mの正方形の範囲で、その中を縦横4つずつに分割し、合計16グリッドに分けて遺物探集、土層観察、遺構確認等に努めた。表土排除と同時に遺物が多数出土するため、8月12日から発掘と併行して洗浄、注記も実施した。表土排除は手掘りで慎重に進めたが8月13日ではほぼ完了、第2層面(黒色土層)を検出した。第2層に入り一段と出土量も多く、また焼土、炭なども出土するため慎重に掘り進め、遺構輪郭の確認に努めるがつかめず。8月15日には第3層(灰黄色土層)の排除を開始し、けん命に遺構検出に努める。この過程で中央の十字アゼを残し、他のアゼなどはとりはずす。8月18日に発掘区西北部で3ヶ所の遺構を確認。ただし、まだ明確な輪郭がつかめない。8月21日にはほぼ第3層の排除完了。第4層(黄褐色土)上面を検出。ここに至って3軒の竪穴住居跡と思われる輪郭を確認した。いずれもトレンチの端の方にかかったため2ヶ所でトレンチを拡張し住居跡の全容をつかむ。8月25日には各住居跡等の精査を開始。また中央に十字に残されたアゼも、断面実測、写真撮影後とりはずす。8月27日には最終実測用造り方の設定を行う。座標の基準点は三神峯公園南端にある三角点(BMレベル=67.2m)で、これを中心点とし、磁北の線を南北基準線とした。9月1日には住居跡精査をほぼ終え、同時にローリングタワーからの全景写真撮影も行った。9月2日から最終実測を実施した。実測は平面実測、断面実測、レベリング、土層断面実測および補足細部実測などの順に実施した。9月6日にはほぼ実測を完了した。9月7日～8日に住居跡床面などの補足調査を実施した後、調査を完了した。なお調査成果の発表は、9月5日に報道関係者に対して行ない、翌9月6日に現地で地元の人たちを中心として説明を行なった。参加者数は60名程度であった。調査後の出土品整理等は東北大学文学部考古学研究室にて、佐藤則之、柳田俊雄らが中心になって行なった。



第3図　遺跡地形図

4. 調査内容

(1). 基本層序

発掘区内の堆積層は基本的には4層に分けられ、部分的な擾乱を除いては、ほぼ一定した堆積状態を示している（第4図）。

第1層・暗褐色シルト

表土である。上部は草木根による擾乱が著しい。きめが荒く、粘性に乏しくサラサラした感じのする層である。発掘区域全域にわたって20~40cmの厚さで堆積している。第2層とともに土器、石器等の出土が多い。縄文時代前中期から中期の土器片や、土師器、須恵器等の古代の土器片を含む。

第2層・黒褐色シルト

焼土、炭化物粒の含有量や色調によって二つに分けられる（註1）。

第2a層：焼土、炭化物粒が比較的少なく、しまっているがきめが荒く、粘性はほとんどない層である。発掘区域全域に広がり、部分的に厚い場所はあっても、ほぼ20~40cmの厚さをもつ。この層まで草木根による擾乱が部分的に及んでいる。

第2b層：焼土、炭化物粒を多量に含み、きめ細かくかたくしまっている。10~20cmほどの厚さをもつが、発掘区域の南西コーナー付近ではみられない。

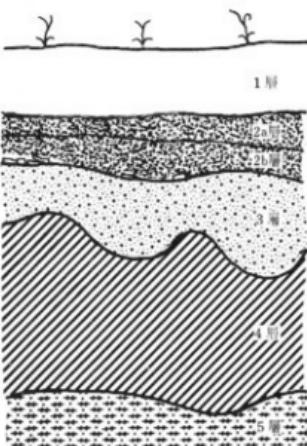
第2層は良好な遺物包含層であり、一括土器をはじめとして遺物の出土量が最も多い層である。特に第2b層の最下面には土器片が横に並んだように出土する状態が発掘中に観察され、生活面の存在を示している。また第2a層と第2b層の間には、濃密な焼土層がレンズ状に入る部分が見られるが、そうした部分の下からは、住居跡が発見されたケースが多い。

第3層・灰褐色粘質シルト

きめ細かく、かたくしまっている。焼土、炭化物粒を含まず、粘性に富み、中小の砂礫を若干含む。遺物はほとんど含まず、竪穴住居跡はこの層の上面で検出された。厚さは30cmほどに一定している。

第4層・黄褐色粘質シルト

地山である。粘性に富み、中小の砂礫を含む。固くしまっていて、この層の上面では凹凸が激しい。遺物、焼土、炭化物粒等を含まない。厚さは30cmほどである。



第4図 基本層序

第5層・淡黄褐色砂礫層

泥岩質の礫を主体とする砂礫層（青葉山段丘礫層）で、堅固である。遺物、焼土、炭化物粒等を一切含まない。

註1 第2層を二つに分けたのはセクション検討の結果であり、その時点では第2層をほとんど掘り上げてしまっていた。そのため一部第2層が残っていた部分は第2b層として遺物をとりあげているが、他は第2層として遺物をとりあげている。なお、括弧内は、第2a層、第2b層として遺物をとりあげている。

(2). 発見遺構

今調査で発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、土器埋設遺構1基及び多数のピットである。いずれも縄文時代前期初頭に属するものである。

第1号住居跡（第7図）

〈住居構造〉

平面形は隅丸の長方形であり、長辺はほぼ東西方向を示している。地山である第4層上面で確認された。地山にはそれほど深く掘り込まれておらず、北壁・南壁の立ち上りは不明確である。東壁・西壁は約60°の角度で10cm前後立ち上る。北壁・西壁に沿って壁柱穴と思われる小ピットが並んで検出されたが、東壁・南壁では少ない。床面中央で深さ28cmを計る主柱穴と思われるピットが検出された。またこのピットの周辺は地山であるロームに炭化物が混じり汚れている。東西約5.4m、南北約4.3mであり、東壁は擾乱をうけており掘りすぎている。

〈埋土〉

第1層は炭化物、焼土粒を含むやわらかな黒褐色土であり、基本層序の第2b層に類似する。第2層はやや粘質の強い小礫を含む灰褐色土である。第3層は炭化物を含む、粘質の強い固くしまった黒褐色土である。

〈出土遺物〉

遺物は埋土第1層と第2層、第3層より土器・石器が若干出土したが、床面からの出土はない。土器は岡示したものの他に撚糸文が5点、竹管文が1点出土している。また、第5図の土器は、埋土第1層出土のもので、黄褐色を呈する、焼成、保存状態ともに良好なもので無文である。器形は円筒形を呈すると思われ、底付近くに段を作り出している。胎土には纖維を若干含んでいる。第7図8は埋土第3層より出土した剝片である。表側の先端と右側に二次加工が施されている。また加熱面は自然面である。

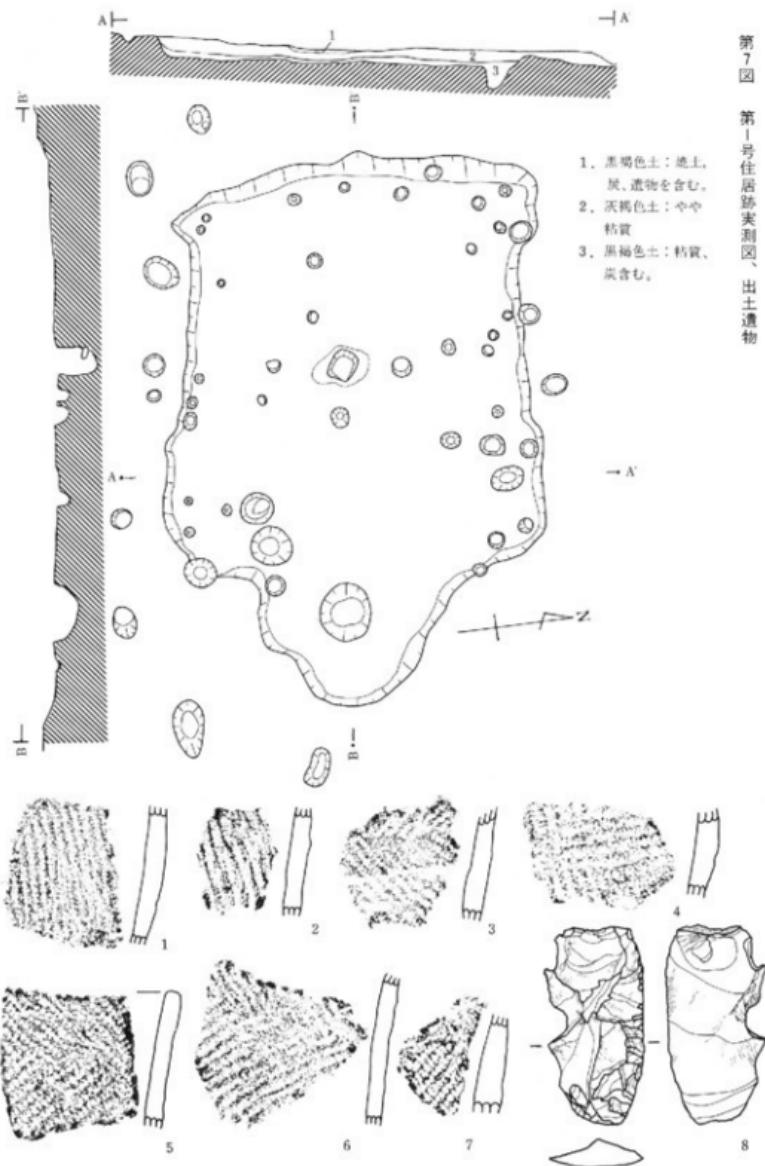


第5図 第1号住居跡出土土器

(縮尺1/2)



第6図 調査全図



〈時 期〉

床面からの遺物の出土がなかったため、明確にはし得ないが、埋土中より出土した土器は撚糸文、竹管文が施された土器を含み、大木2a式に属するのである。したがって本住居跡は大木2a式期のものであろう。

第2号住居跡（第8図）

〈住居構造〉

東南のコーナーを検出しただけで完掘していないため、詳細は不明である。確認面は第3層上面である。南壁・西壁はほぼ垂直に立ち上り、深さは50cm以上に達しており、礫層をも掘り込んでいる。南壁・西壁に沿って壁柱穴と思われる小ビットが並んでいる。また、南壁・西壁の外側にも壁に沿って小ビットが検出されている。南壁に接して直径約1m、深さ約80cmのビットがあり、その中より炭化物（堅果類）が検出された。

〈埋 土〉

第1層は焼土・炭化物粒を含む粘性のある黒褐色土である。基本層序第2b層に類似する。第2層は粘性のあるきめの荒い灰褐色土である。第3層は粘性のあるもので、地山であるロームに類似した黄色土である。第4層は床面直上の炭化物を主体とする黒褐色土であり、粘性等の土質は第3層に類似する。

〈出土遺物〉

埋土第1層と第2層より若干の土器・石器が出土している。土器は斜行繩文・羽状繩文の他に撚糸文、竹管文のものが出土している。第8図1は葺瓦状撚糸文が施されたものである。2は縦長の剥片である。3は上、下端が欠損しているが、右側辺裏側に刃こぼれ状の剝離痕が残されているものである。

〈時 期〉

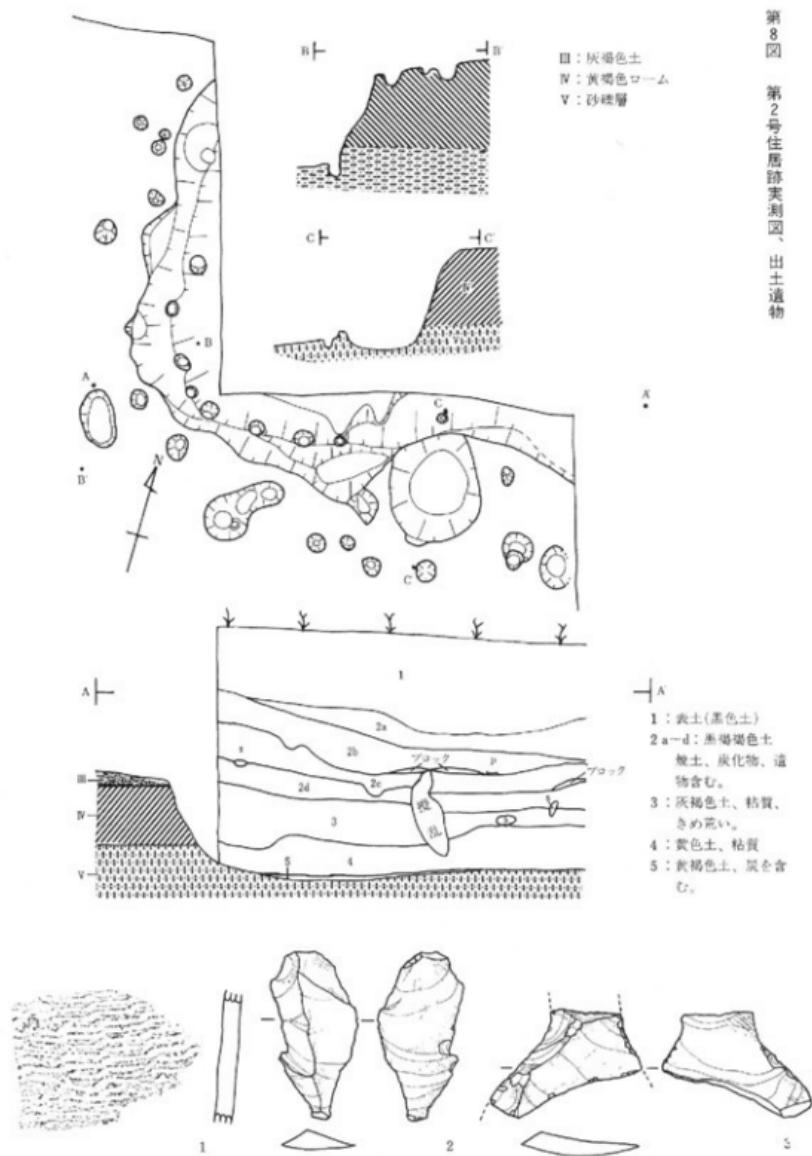
埋土の上部からは大木2a式に属する土器片が出土しているが、床面からの遺物の出土はない。第1号住居跡の場合と同様、ほぼ大木2a式期のものと思われる。

第5号住居跡（第6図）

掘り込みを検出できず、後に住居跡とされたものである。そのため、住居構造、埋土、出土遺物、時期等は明らかにし得ない。

第4号住居跡（第6図）

発掘時に確認面である第2b層を掘りすぎてしまったため、明確な形態を確認しきれなかつたが、セクション図や最終平面図を検討した結果住居跡と考えられるものである。埋土上部には焼土ブロックが存在し、黒色土のなだらかな落ち込みがある。他は明らかにし得ない。



第3号住居跡（第10図）

〈住居構造〉

今調査で最も明瞭に検出された住居跡である。平面形は隅丸の長方形であり、長辺は北西方向を示している。地山である第4層上面で確認された。地山であるロームに深く掘り込まれており、壁はほぼ垂直に立ち上る。壁高は確認面から20~30cmである。各壁に沿って壁柱穴と思われる小ビットが並んでいる。これらは斜めに掘られているものが多く、いずれも住居跡に内側に傾いている。また、住居跡の外周にも小ビットが連続して認められ、壁外柱穴の存在を思わせる。床面の中央部やや東寄に直径25cm、深さ80cmの主柱穴と思われるビットがある。床面の中央部には厚さ1cm程の炭化物の層がみられる。東西6.8m、南北4.7mを計る。

〈埋土〉

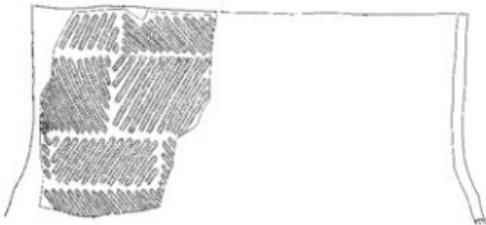
第1層は遺物・炭化物を含む焼土層である。第2層はきめ細かな、炭化物を含む黒褐色土で、焼土をブロックで含む。基本層序の第2b層に類似する層である。第3層は粘性の強い、風化した礫を含む黄褐色土である。第4層は地山であるロームに類似する層で、ローム起源の再堆積層と考えられる。第5層は第4層より黒味を帯びた層で、礫・遺物・焼土を含まない。第4層類似の黄褐色土が斑状に入る（第5a層）部分や、炭化物が多く含まれている（第5b層）部分がある。第6層は床面直上に薄く堆積している黒色炭化物層である。

〈出土遺物〉

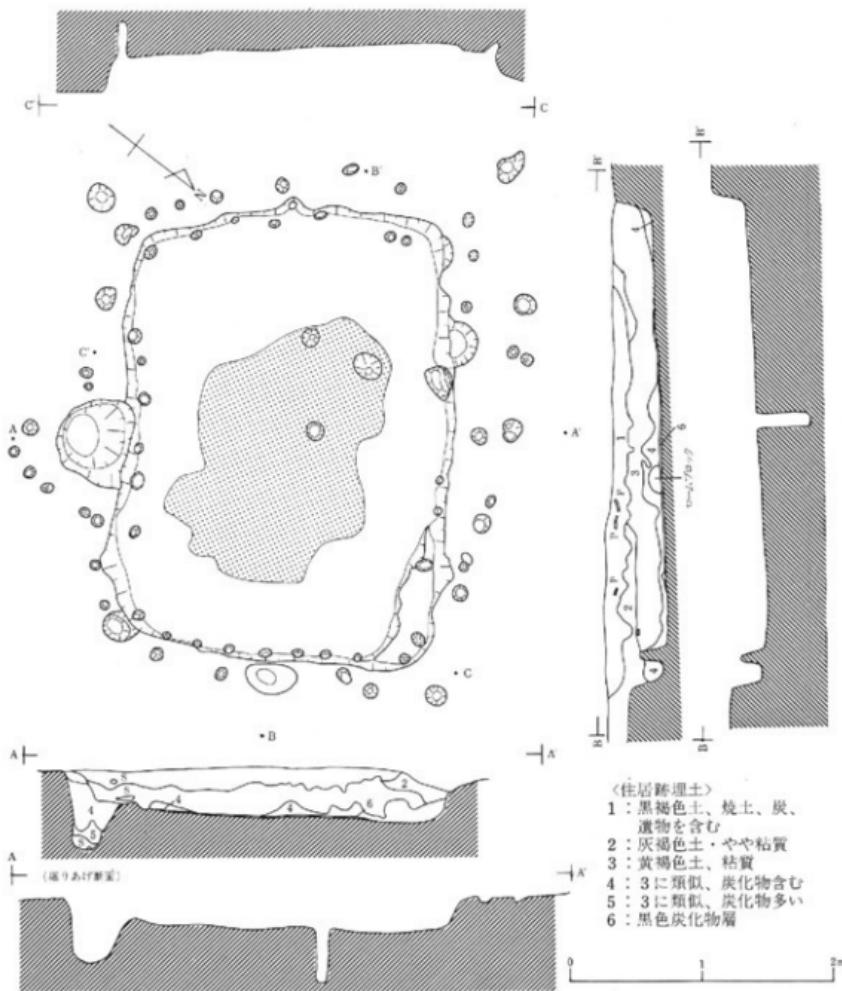
遺物は埋土第1層より第3層まで多量に出土したが、埋土第4層以下からはほとんど出土していない。第12図16は原体の小さなループ文が体部下半にまで施されているものである。18は太い燃糸が押圧されているものである。19、23は口縁に平行に燃糸が押圧されているものである。20は底部の破片で、底面に半截竹管による刺突が施されている。第9図は羽状繩文が施されているもので、同じ段でLRとRLの原体を交互に回転させているため菱形の文様となっている。体部で膨らみを持つ深鉢型土器である。石器は石匙が4点（第11図1~4）、石鎌（第11図5）、石槍（第11図6）、石窓（第11図9）が各1点ずつ出土している。他に剣片が出土している。第11図12は床面直上より出土したもので、縦長の薄い剣片の表面に二次加工が施されているものである。

〈時期〉

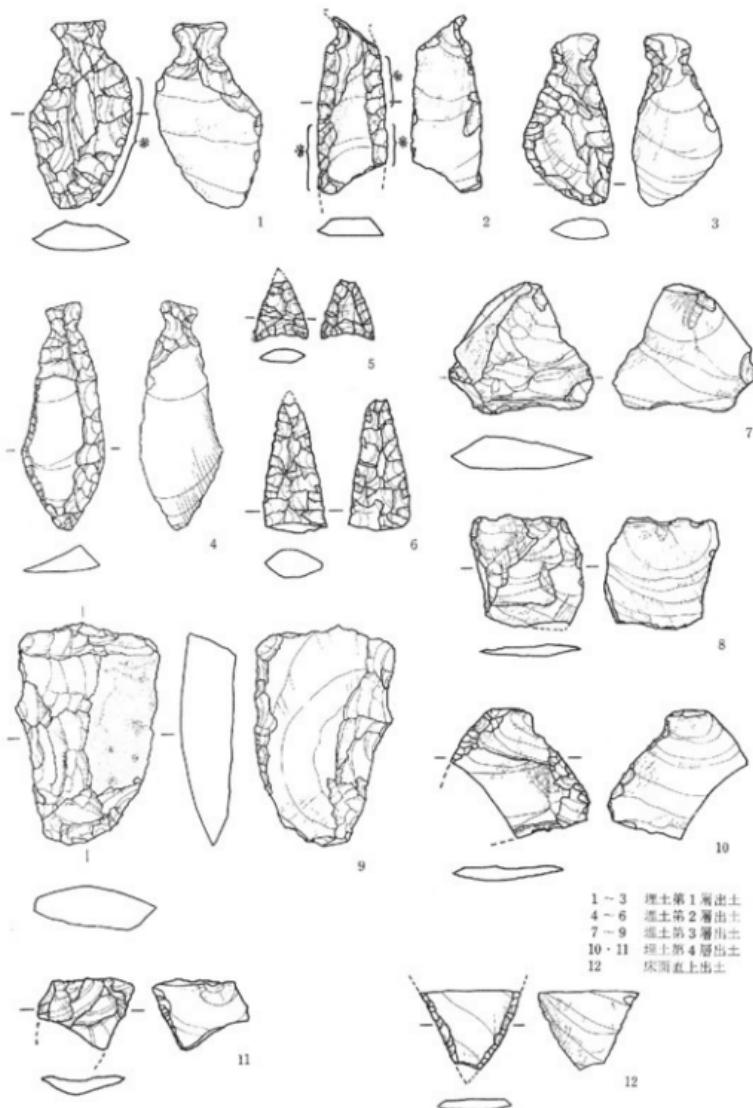
埋土中より出土した土器は、基本層序第3層出土の土器に類似しており、この時期以前の土器が出土していないことから、ほぼ当該時期と考えられる。



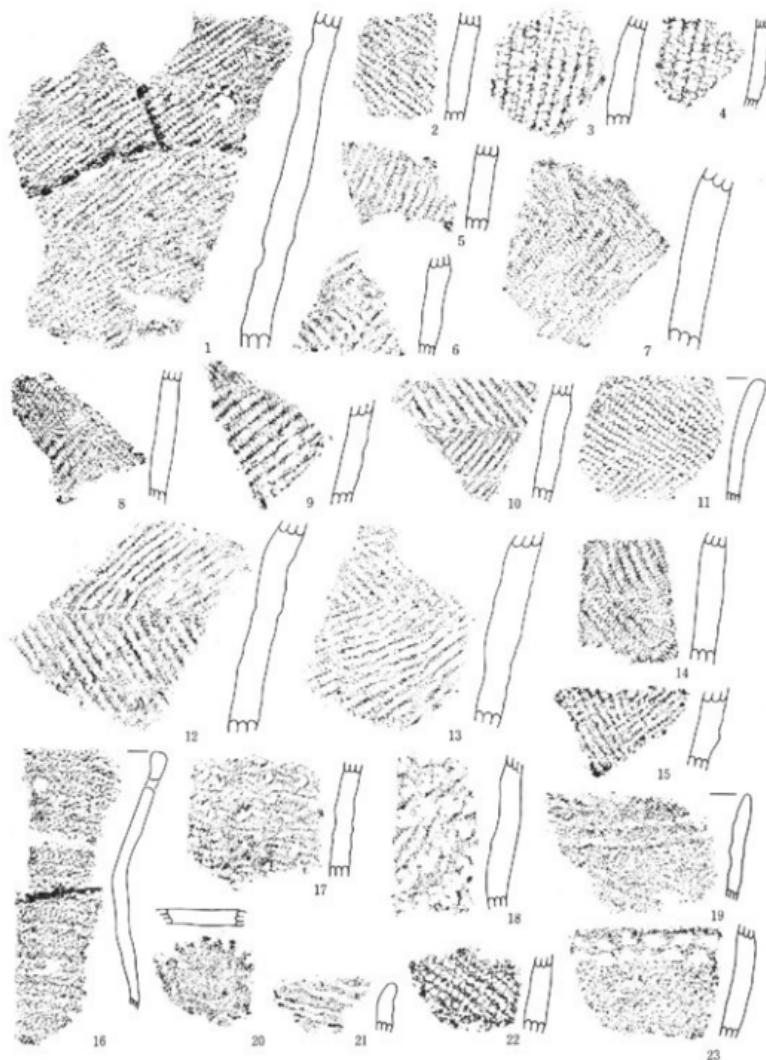
第9図 第3号住居跡出土土器実測図
(縮尺2/5)



第10図 第3号住居跡実測図



第II図 第3号住居跡出土石器 (縮尺2/3)



1~10 埋土第1層出土

11~21 埋土第2層出土

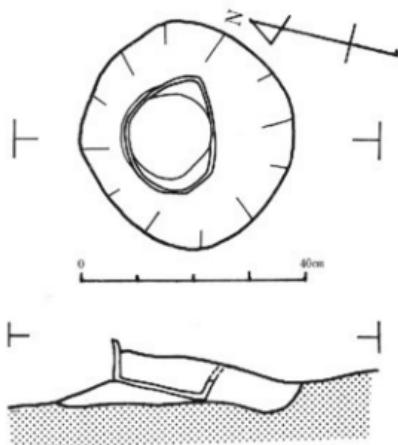
22~23 埋土第3層出土

第12図 第3号住居跡出土土器拓影 (縮尺1/2)

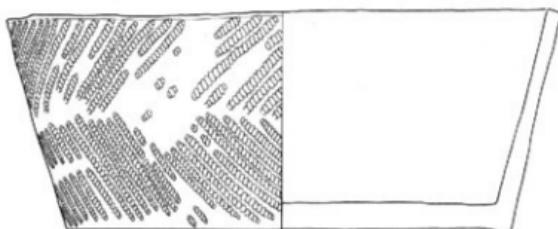
土器埋設遺構（第13図A）

ほぼ完形の土器（第13図B）が、口縁を上にしてやや傾いて出土したもので、掘り方は直径約40cmの円形を呈する。また、掘り方は第1号住居跡の埋土を掘り込んでいる。埋土は焼土・炭化物粒が比較的少なく、粘性の弱い黒褐色土である。

出土した土器は体部に羽状繩文が施された浅鉢型の土器である。底面にも繩文が施されている。焼成・保存状態とも良好であるが、ゆがみの大きい土器である。掘り方の埋土は第2a層のものに類似し、第2b層上面で確認されているため、大木2a式期の所産であると思われる。



第13図A 土器埋設遺構



第13図B 埋設土器実測図 (縮尺1/2)

(3). 発見遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器と石器がある。土器はその大部分が縄文土器であり、他に若干の須恵器と土師器がある。石器には石核・剝片をはじめ様々な器種が認められる。縄文土器と石器は第1層から第3層まで各層位より出土するが、須恵器と土師器は第1層からのみ出土した。また、縄文土器と石器は住居跡の堆上や床面からも出土している。ここでは、これらの出土遺物を、縄文土器、石器、その他の遺物に分け、それぞれ層位ごとに説明を加えることにする。また、遺構から出土した遺物は、遺構の章でふれたのでここではふれないことにする。

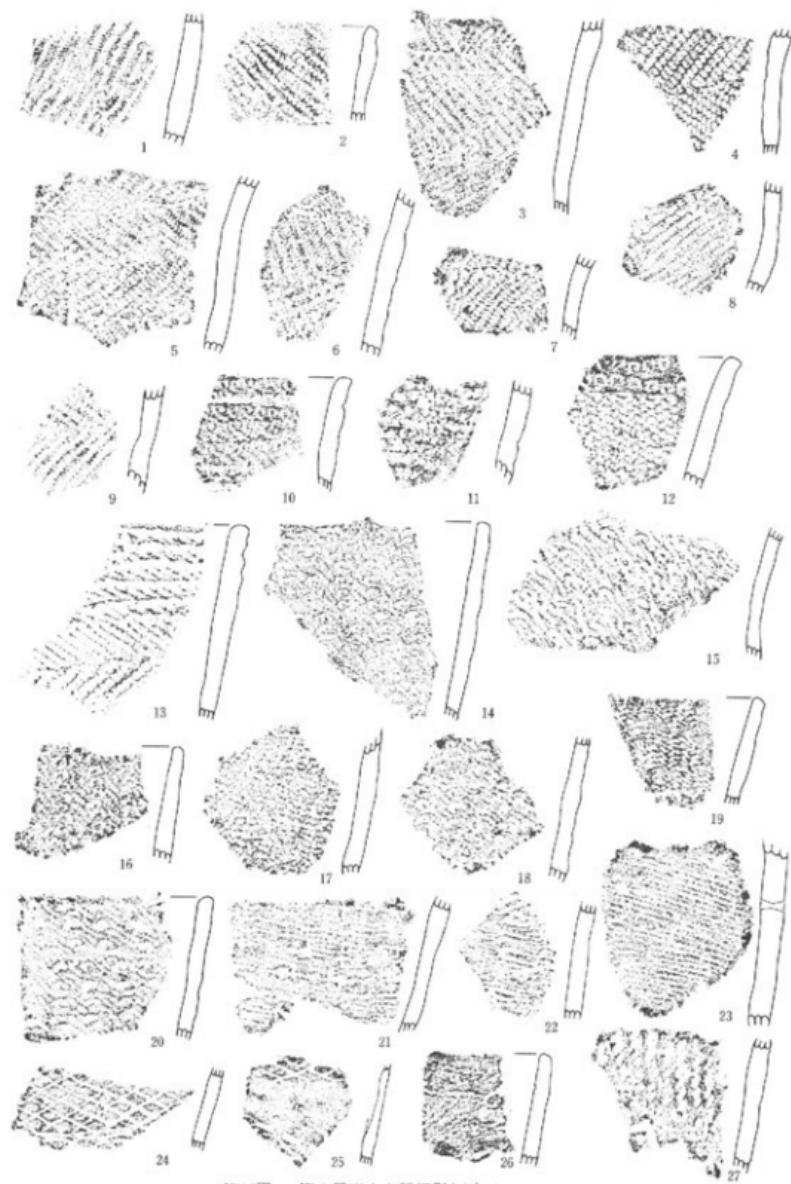
I. 縄文土器

出土した縄文土器は大部分が小破片で、全体の器形がわかるものは少ない。また遺存状態がよくなく、施文された文様が不明のものが多い。したがって、比較的遺存状態のよいものを中心に図示した。出土した縄文土器の純破片数は7435点である。また、施文された文様は、斜行縄文、羽状縄文、撚糸文、竹管文、組紐文、貼付文、ループ文、無文等に分類できるが、これらのうち、斜行縄文、羽状縄文、撚糸文、組紐文は同一個体に他の文様と組み合わされて施文されることがあり、その場合は他の文様の方に分類した。例えば、口縁部にループ文が施され、体部には羽状縄文が施されている場合にはループ文に分類した。それらの分類結果は第2表に示した。

1. 第1層出土土器（第14・15図）

第1層出土の縄文土器は、口縁部が349点、体部が2,586点、底部が202点である。施文された文様は斜行縄文、撚糸文、羽状縄文が多い。底部はすべて平底で、約15%ほどに縄文が施されている。口縁部ではループ文は約10%、竹管文は約15%を占めるのに対し、体部ではループ文は約1%、竹管文は約2%を占めているのにすぎない。撚糸文も同様な傾向がみられる。一方、斜行縄文は口縁部、体部ともに約20%ほどを占めている。

第14図1・2は単節の斜行縄文が施されているものである。斜行縄文にはLRのものとRLのものがあり、複節のものは少なく、無節のものは存在しない。3～9は単節の羽状縄文で、LRとRLを交互に施文しており、結束のあるものは少ない。3の内面は纖維の束のようなもので調整されている。10～13は口縁部にループ文が施されているもので、いずれもRLのものである。ループ文は同一の原体で2～5段重ねて施される例が多く、撚りの異なる原体を交互に施す例が若干存在する。また、LRのものは非常に少ない。地文は斜行縄文・羽状縄文が多く他のものは組紐文のもの（第14図12）を除いて存在しない。12は口縁部にRLのループ文を2段施し、地文には組紐文が施されているもので、胎土の色調は灰黃白色を呈し他の土器とは明らかに異っている。また内面には丹塗りの痕跡と思われるものが認められるが判然としない。



第14図 第1層出土土器拓影(1) (縮尺2/5)



第15図 第1層出土土器拓影(2) (縮尺2/5)

14~20は変形ループ文と名づけた文様の土器である(註1)。原体は撚糸を撚りあわせるときに、一本の撚糸のみを環にしたものである。この類の土器は從来報告例が少ない。14は口縁部の破片で、平縁であると思われるが小突起がつけられている。21~26は撚糸文が施されているもので、21・22は葵瓦状撚糸文、23は斜行撚糸文、24・25は網目状撚糸文、26は木目状撚糸文である。第18図1は木目状撚糸文のもので、原体はRの撚糸を2本1組にし、軸の中心で結びそれぞれ軸に右巻き、左巻きに巻きつけ端を別の撚糸で結んだものと思われる。軸の長さは7cm程度である。実測図右半部は二次火熱をうけており、剥落が著しい。また右下にはタール状の付着物が認められる。内面はヘラ状工具で縦に磨かれている。第14図27、第15図1~12は竹管文が施されているものである。円形竹管や半截竹管、櫛齒状工具によって様々な文様が施されている。第15図3は櫛齒状工具による刺突が放射状に施されているもので大木3式に属するものである。4は胎土に纖維を含まず色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で堅緻なものである。縄文時代中期に属するものであろうか。10は異条縄文の地文の上に半截竹管による曲線文が描かれている。11は口縁部がほぼ直角に外に折れ曲り、口縁に平行な6条の沈線文と垂直に下る点線状の沈線文が施されている。10・11は大木6式に属するものである。12は底部付近に2条の半截竹管の刺突文が巡り、林によれば(林 1960)桂島式に特徴的にみられるものであるとされている。13~18は粘土紐が貼りつけられた貼付文の土器である。13は網目状撚糸文に太めの粘土紐が円形に貼りつけられているものである。14は半截竹管による曲線文とその中をうめる刺突文、円形の貼付文が施されたもので大木3式に属するものである。15は「x」字状の粘土紐が波状口縁の波頂部に貼りつけられたものであり、細い半截竹管が施されている。16は貼りつけが口縁上と内側にも施されているもので、二次加熱をうけて赤変している。17・18は大きな原体による斜行縄文を施した上に細い粘土紐が貼りつけられ、いずれも折りたたまれず曲線的である。16・17・18は大木4式に属するものである。19は異条縄文が施されたものである。20・21は組紐文が施されている。

これらの土器の大部分には胎土中に纖維が混入されている。(第14図27、第15図3・4・9~11、14、16~19を除く)。これは第1層出土の縄文土器の大部分が前期前半に属するためと思われる。またすでに興野によって指摘されている(興野 1968)ように、大木3式以降には胎土に纖維が混入されなくなるということを裏づけている。

註1 原体に関して刺持みどり氏より御教示をうけた。また、山内(山内1979)は、これを『開創環付』としており、氏もループ文の一様としていることからここでは変形ループ文としておく。筆者はこれを組紐文の一種として分類してしまっており、この文様の占める量的な割合は不明であるが、通常の組紐文よりは多いようである。

2. 第2a層出土土器（第16図、第18図3・4）

既に述べたような理由で、第2a層出土としてとりあげた遺物は第1号住居跡拡張区と、第3号住居跡拡張区出土のものに限られるが、両地区とも他地区と同様な出土状況を示しているので、発掘区全体を代表しているものと考えても差しつかえないと思われる。以下第2b層出土の遺物についても同様である。

第2a層からは口縁部65点、体部506点、底部44点が出土した。底部はすべて平底で、繩文の施されているものが5点ある。撚糸文の施されたものは口縁部では約20%、体部では約11%であり、撚糸文は口縁部に施されるものが多い。一方、斜行繩文と羽状繩文を合わせると口縁部、体部とともに約50%を占めている。

第16図1・3は斜行繩文が施されているもので、いずれも単節である。2・4・5は羽状繩文が施されている。6～8はループ文が施されているもので、いずれも口縁部かその近くの破片である。7は網目状撚糸文を地文とし、RLのループ文が施されているものである。第18図3は大破片から模式的に復元した例で、ループ文と撚糸文が施されている土器で、胎土は灰白色であり、明確に性の土器と区別できる。器形は直立する口縁部とやや膨らむ体部からなり、その境界は半截竹管による平行沈線文で区切られている。口縁は波状を呈し波頂部は4個と思われる。波頂部には逆『コ』字形の貼付がなされている。施文方法は口縁部では、ループ文を4段施し、次に綾格文を施し、その下にLRとRLの撚糸を軸にまいたものを交互に回転し、また綾格文を施すというように上から下に施文している。体部では撚糸文の原体が一部変るが、基本的には変わりない。口縁部の内側にも浅い沈線が巡っている。第18図4は結束のある羽状繩文を全面に施しているものである。器形は屈曲の少ない深鉢型土器で、口縁は4個の波頂部をもつ波状になると思われる。底部は掲げ底ではなく、繩文の施文もない。内側はヘラ状工具で縦・横に粗く調整している。口径は約18cm、高さは約22cmである。第16図9・12・13は変形ループ文が施されているもので、9は口縁には小突起があり波状を呈している。10・11・14・15は撚糸文が施された土器で、10は葺瓦状撚糸文、11は2本1組の撚糸による木目状撚糸文、14は斜行撚糸文が施された底部破片、15は網目状撚糸文である。16～18は竹管文が施されたものである。16は4本を1組として、直線と波線を交互に施している。17は半截竹管を用い、一方を中心としての回転を交互に行ったものである。18は半截竹管による平行沈線が施されているものである。19・20は貼付文で、これらは粘土紐を貼りつけた後、指でつまむようにして土器面に接着したため一見するとつまみ出しのようにみえる。19は6本1組の櫛齒状工具で直線と波線を交互に施している。口縁は波状を呈し、貼りつけは波頂部になされている。

第2a層出土の土器には、量の多少はあるがすべてに纖維が含まれている。



第16図 第2a層出土土器拓影 (縮尺2/5)

3. 第2b層出土土器（第17図、第18図6・7・10）

第2b層からは口縁部が82点、体部662点、底部50点が出土した。底部はすべて平底であるが、第2a層出土のものよりも揚底気味のものが多い。また、繩文が施文されたものは17点があり、無文のものよりも多くなっている。口縁部の文様は斜行繩文・羽状繩文が約70%を占め、ループ文が約17%であり、他の文様はほとんどない。体部では斜行繩文・羽状繩文が約62%を占め、他の文様はほとんどない。

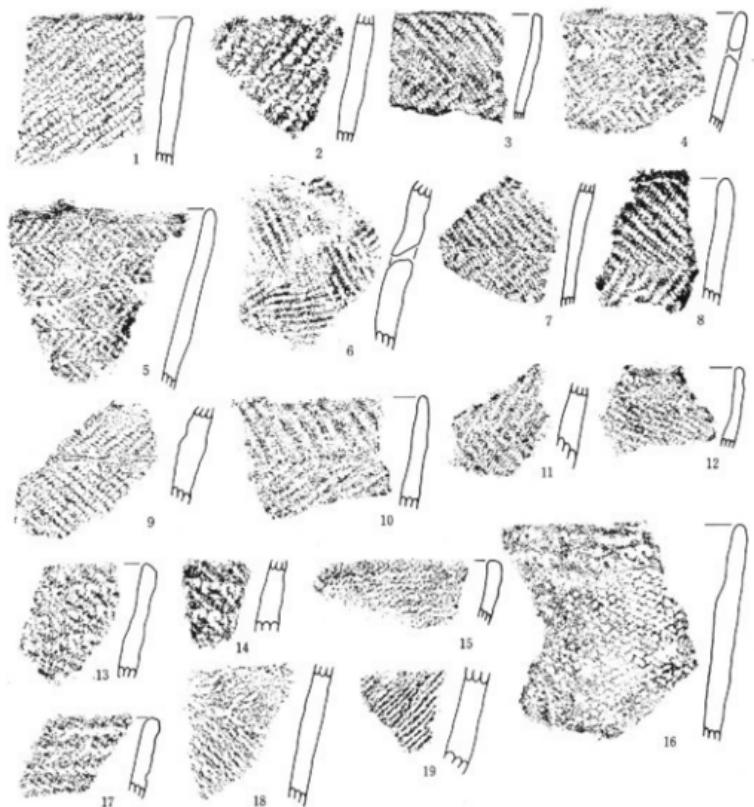
第17図1・2は斜行繩文が施されているものでいずれも单節のものである。3~11は羽状繩文が施されているものである。羽状繩文には結束のあるものとないものとがあり、ないものが多い。4・5は原体の短かい羽状繩文である。第18図7はほぼ完形の深鉢型土器で、明るい褐色の、焼成、遺存状態ともに良好なものである。底部は揚底であり、体部と同一原体の繩文が施文されている。文様は口縁部から順に下に向って施文されており、底部付近では撚りかほどけている。圧痕の度合はやや弱い。口縁は内側から削いたようになっている。内面は繊維の束のようなもので横・斜にこすって調整している。口径約11.5cm、高さ16cmをはかる。第18図10は深鉢型土器の底部で、底面は無文である。体部にはLRとRLの原体を交互に施文し菱形を作り出している。胎土には小砂粒がたくさん混入されており、二次加熱のため赤褐色になっている。第17図12~16はループ文が施されているものである。15は原形の小さなものによるループ文が施されており、この類の中では出土数は非常に少ないものである。16は組紐文の地文に口縁部にループ文が2段施されたものである。第18図6は底部を欠く一括土器で、保存状態が非常に悪く、図は模式的に表現したものである。器形は4個の波頂部のある波状口縁を有し、体部下半でやや膨らむものである。二次加熱のため赤褐色を呈し、表面の剥落が著しい。内面は体部では縦・口縁付近では横にヘラ状工具で調整されている。口径18.5cm。第17図17~19は撚糸文の施されたものであり、例外的なものである。17は口縁に平行に4本、縄が押圧されているもので、類例は少ない。18は2本1組の撚糸文が施されているものである。19は斜行撚糸文が施されている。

第2b層出土の土器にはすべてに胎土中に繊維が混入されている。

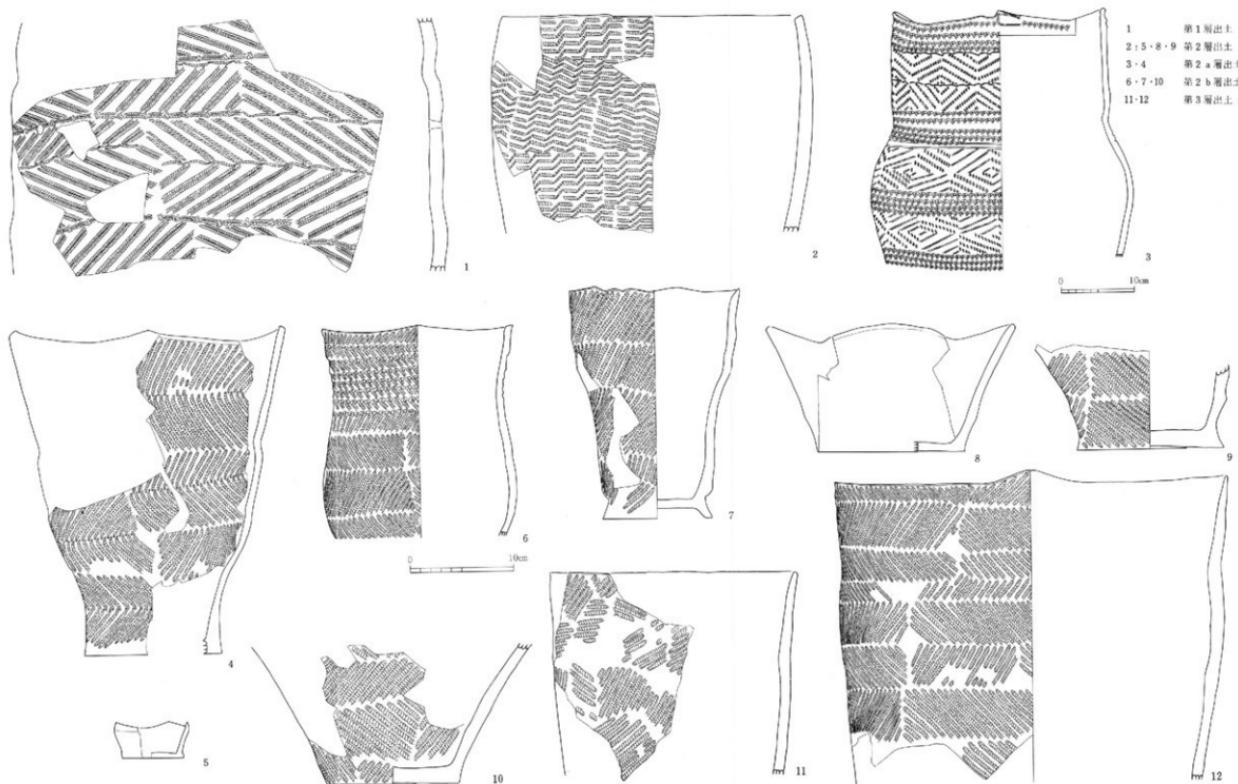
4. 第2層出土土器（第18図2・5・8・9）

第18図2は体部下半以下を欠く深鉢型土器で、口縁が内側にやや湾曲している。焼成は良好であり、黒褐色を呈する。葺瓦状撚糸文が口縁から順に施されている。施文は雜であり、斜めになっている部分がある。内面は口縁部付近が横、縦部が斜・縦にヘラ状工具で調整されている。5は波状口縁（波頂部は3個と思われる）を有する小型の土器である。内外面ともに指頭あるいはヘラ状工具で横・斜に調整されている。底部は不整な円形を呈し、外側にいくぶんはみ出している。これは底部と体部を別々に作り、後に貼りあわせたためと思われ、外側の底

部付近では縦に調整がなされている。8は遺存状態が非常に悪く、剥落の著しいものである。文様は組紐文かとも思われるが判然としない。口縁は4個の波頂部を有するゆるやかな波状口縁である。口径約17cm、高さ8.8cmであり、口縁の大きく開いた鉢型土器である。底面にも施文されているようであるが不明である。9は羽状繩文が施された深鉢型土器の底部で、底面にも放射状に繩文が施されている。焼成・遺存状況ともに良好で、堅緻である。内面は横にヘラ状工具で調整されている。



第17図 第2b層出土土器拓影 (縮尺2/5)

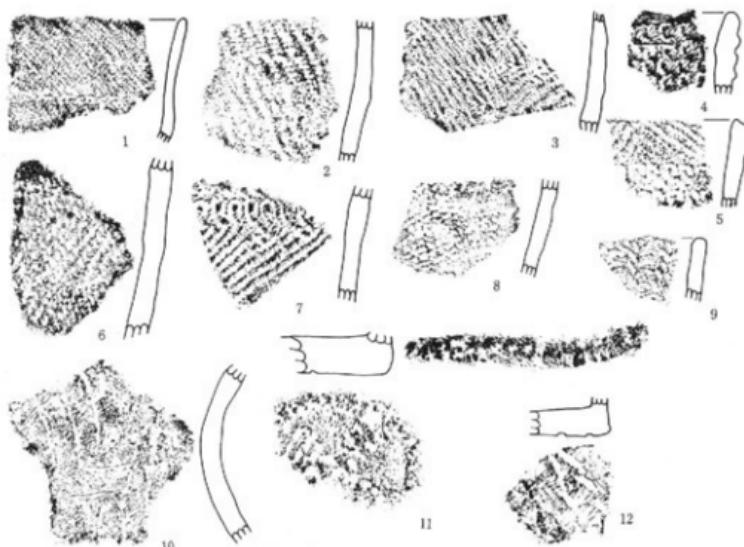


第18図 漢文土器実測図 (Nekoma 2/5)

5. 第3層出土土器（第19図、第18図11・12）

第3層からは口縁部が79点、体部662点、底部55点が出土している。底部はすべて平底であるが、底縁が外に張出するものや揚底氣味ものが多い。口縁部の文様は、斜行繩文・羽状繩文が約40%、ループ文が約18%を占めている。体部では斜行繩文・羽状繩文が約67%を占めている。これらの土器にはすべてに、繊維が比較的多く混入されている。

第19図1・2は斜行繩文、3・6は羽状繩文が施されているものである。第18図11は体部下半以下を欠く屈曲のない深鉢型土器で平縁である。文様は雑然としており、LRを主体的に一部RLを施し羽状になっている部分がある。内面は幅7～8mmの繊維の束で横・斜に調整されている。口径約18cm。第18図のものも体部下半以下を欠く屈曲のない深鉢型土器で、波頂部を2個有する波状口縁を呈する。焼成・遺存状況ともに良好である。口径約27cm。第19図4・5・7はループ文が施されたものである。8は組紐文、9は変形ループ文が施されているものである。10は大きく外反する口縁部に粗い撚糸文が施されたものである。11は底部に、半截竹管による刺突が巡り、底面にも2列の刺突が施されているものである。12は竹管による文様と思われるが、小破片のため詳細は不明である。



第19図 第3層出土土器拓影 (縮尺2/5)

II. 石 器

出土した石器の総数は1406点で、内訳は、石鏃37点、石匙76点、石鎧26点、石槍15点、石錐12点、剥片（二次加工あるものを含む）1163点、石核3点、磨製石斧8点、石皿23点、磨石36点、凹石25点、硬43点である。その他、珪化木、軽石が数点出土している。

石器は基本的には表裏両面と横断面を図示してある。文中石器の裏・表とある場合は主要剥離面側を裏としている。また、右・左とある場合は表側を基準としている。図中の※は微細な剥離痕が認められることを示している。

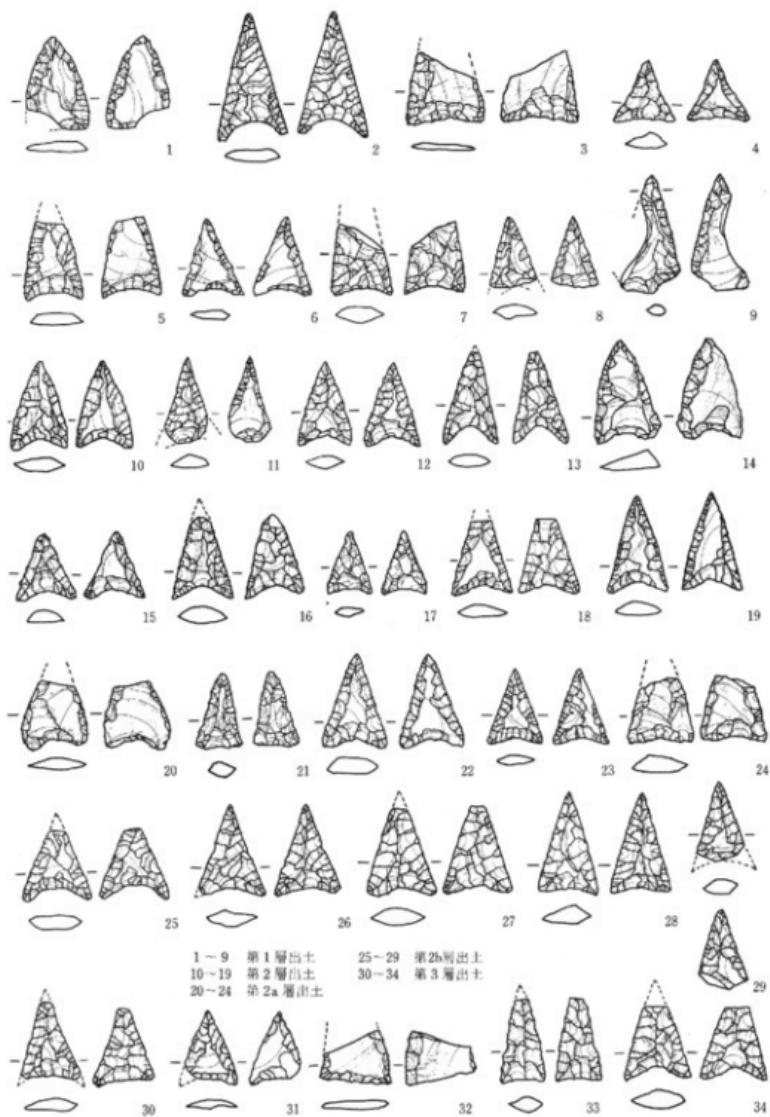
A. 剥 片 石 器

I. 石 鏃 (第20図)

出土した石鏃は37点であり、うち完形品は13点である。第1層からは9点、第2層から10点、第2a層から7点、第2b層から5点、第3層から4点、第3号住居跡等より1点が出土した。他に出土地不明のものが1点ある。石質はすべて頁岩である。

石鏃は、側辺の形態でA：外側にゆるく張出し曲線的なもの、B：直線的なもの、C：基部付近で急激に内側に折れ曲るものとに分類し、基部の形態で、a：直線的なもの、b：やや内側に彎曲するもの、c：大きく内側に彎曲するが曲線的なもの、d：大きく内側に彎曲するが折れ曲る感じのものとに分類した。

1は横長の剥片を素材にし、表裏両面に二次加工を施し整形したもので、Aa型である。2は表裏両面に丁寧に二次加工を施しているもので、Be型である。4はほぼ正三角形を呈し、裏面は簡単な二次加工が施されているもので、Bb型である。6は表裏両面ともに簡単な二次加工のみで整形しているもので、Bb型である。9は縦長の剥片を素材とし左側刃を欠失している。右側刃は基部付近で急激に内側に折れ曲っており、茎を作り出そうとしているかのようであるが、基部の加工がしっかりとしていないので、茎かどうかは判然としない。Cb型である。10は横長の剥片を素材としたAc型のものである。13はほぼ完形の、表裏両面とともに丁寧な二次加工で整形されているものでBe型である。14はやや厚めの縦長剥片を素材とし、簡単な二次加工のみで整形されているもので、Bc型である。18は表側に自然面の残る剥片を素材としており、裏側は丁寧な二次加工で整形されているもので、Bd型である。20は側辺・基部ともに簡単な二次加工のみで整形されているもので、Ab型である。21は厚めの剥片を素材としたもので、Ba型である。28は完形で、表裏両面ともに丁寧な二次加工で整形されたもので、Bb型である。33は基部の狭い細身のもので、Bb型である。



第20図 石 鎌 実 测 図 (縮尺2/3)

2. 石匙（第21・22・23・24図）

出土した石匙は76点であり、うちほぼ完形のものが38点ある。石質はほとんどが頁岩である。

第1層より24点、第2層より21点、第2a層より2点、第2b層より15点、第3層より3点、第2号住居跡より1点、第3号住居跡より3点が出土した。他に出土地不明のものが7点ある。ここで石匙と分類したものは、①つまみを有し、②二次加工が表側のみに施されるものであり、同じつまみを有するものでも両面加工のものは、平面形がより大きく、かつ槍先形に限られることから明らかに別の器種として区別できるものである。

石匙はつまみを上にしたときの平面的形態、特に機能部と考えられる側辺部の形態とつまみの位置関係によって9類に分類した。

1類（第21図1～3、5・6、第22図9～11、第23図12、第24図8）

両側邊がゆるく外側に張り出し、先端は鋭く尖るものである。19点出土。つまみを作り出す抉りは深くはっきりしたものが多い。つまみから先端にかけての縱断面は扁平かつ直線的なものが多く、刺突具としても十分機能し得る形態を有している。第21図2は押圧剝離によって丁寧に作られている。素材となった剥片が大きく裏側に彎曲しているため、全体はスプーン状になっている。なお、左側辺下部のへこみは機能部を再生したために生じたものと考えられ、本来は左右対称形をしていたと思われる。第21図6は素材となった剥片の末端につまみをつけ、加擊点のある方を先端にしている。側辺部から先端にかけて細かな刃こぼれ状の痕跡が観察される。第22図11は自然面を残す剥片を素材としたもので、先端が欠失している。両側辺に細かな刃こぼれ状の痕跡が観察される。第23図12は素材となった剥片が裏側に彎曲しているため、全体はスプーン状を呈する。

2類（第21図9、第24図1）

両側辺が先端付近で左側に曲がるものである。2点出土。第21図9は丁寧に整形されており先端と側辺の裏側にはね飛んだような剝離痕が認められる。第24図1は大きく曲った剥片を素材としたもので、押圧剝離によって整形されている。二次加工の剝離面のはんどには加撃点が残されている。

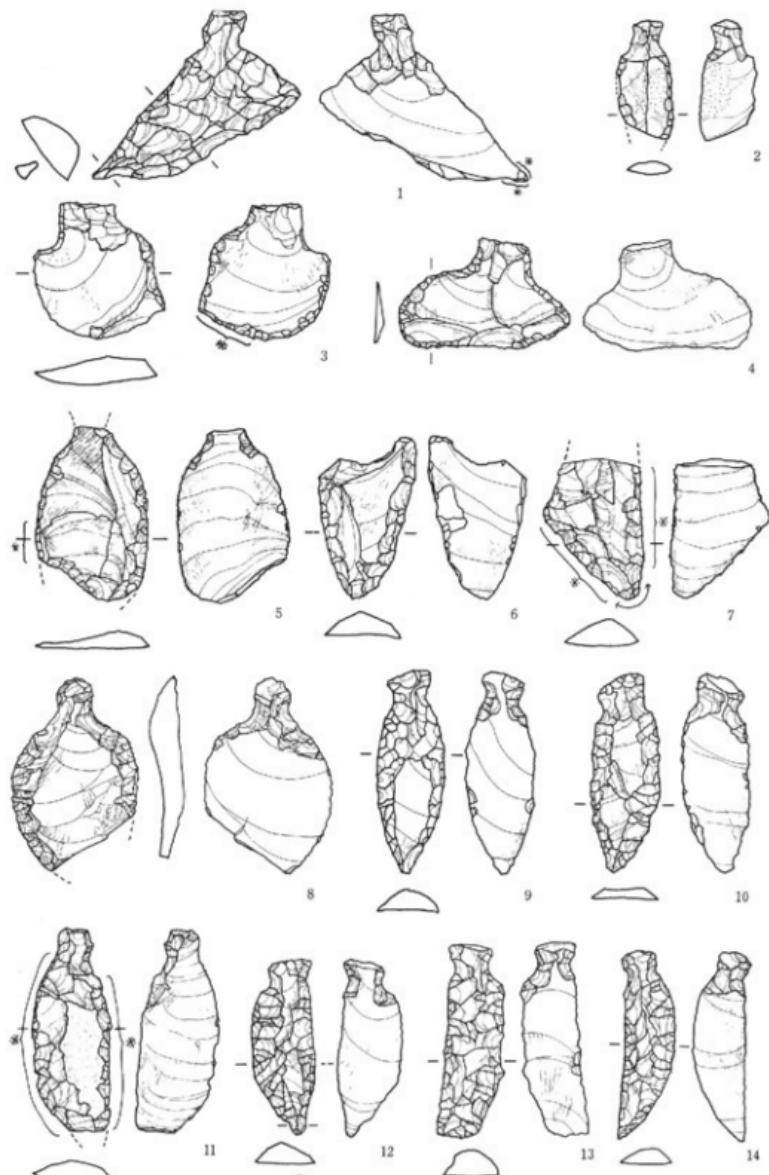
3類（第21図10、第22図7・12、第23図4、第24図2・3・13）

左右どちらかの側辺が直線的であり、もう一方の側辺が角張って外側に張り出るものである。したがってこの類では側辺部は大きく3つに分かれることになる。14点出土。第21図10は比較的大形のもので、両側辺が外側へ張り出しているが本類に含めた。剥片の末端につまみをつけ、粗い二次加工で機能部を調整している。第23図4は表側全面に丁寧な押圧剝離が施されているもので、先端がわずかに欠失している。第22図12は丁寧な二次加工で整形されており、先端は石錐のそれに類似する。第24図2はつまみだけを作り出し、側辺部には細かな刃こぼれ状の剝



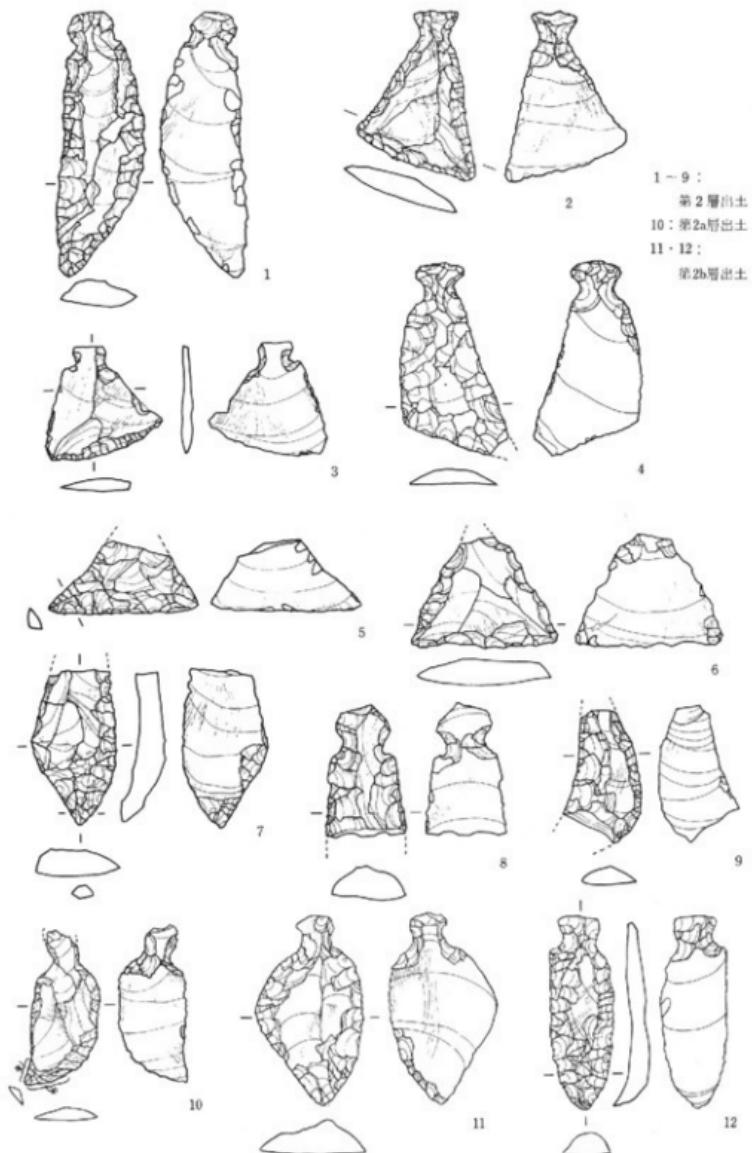
第21图 石器实测图(1)
(标尺2/3)

1—4：第1层出土
8—13：“
5—7：不明

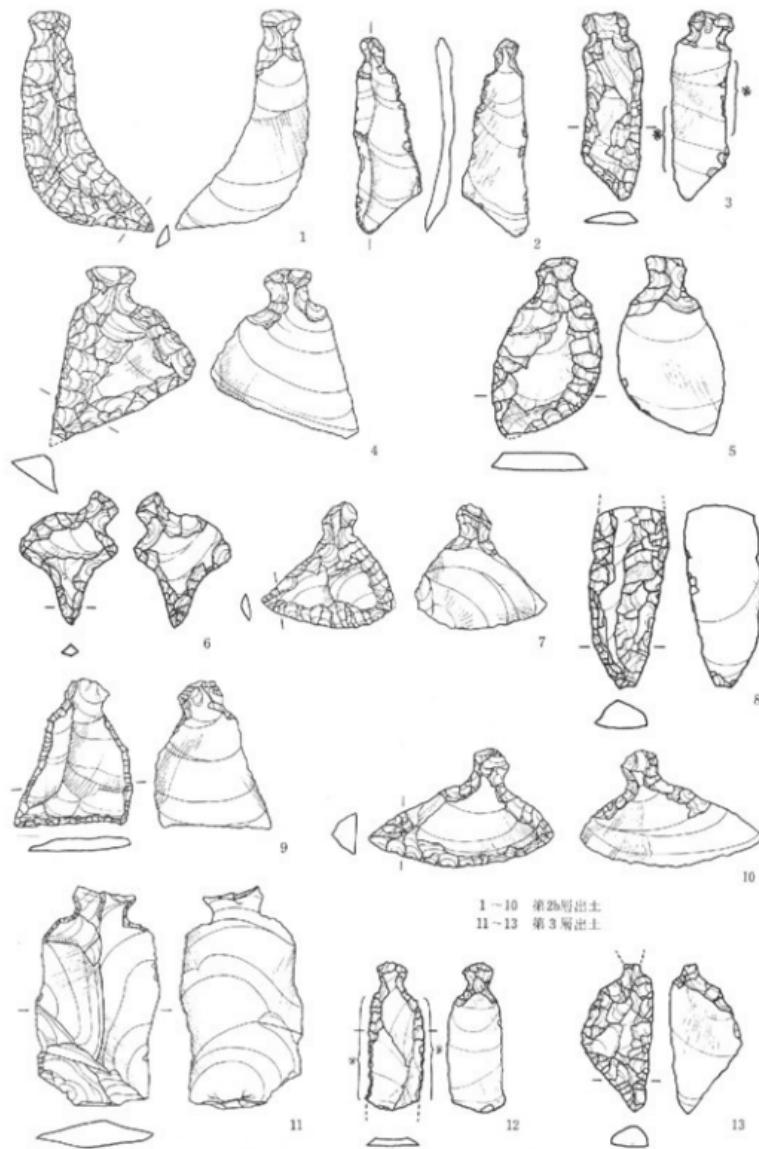


第22図 石匙実測図(2)
(縮尺2/3)

2:不明
1~3~8:第1層出土
9~14:第2層出土



第23図 石匙実測図(3)(縮尺2/3)



第24図 石匙実測図(4)(縮尺2/3)

離底が残されているものである。

4類（第22図13、第24図11）

両側刃が直線的で、先端が尖らず、全体として棒状を呈するものである。4点出土。第22図13は剥片の末端につまみをつけたもので、比較的厚みのある剥片を素材としているため、ゴロッとした感じをうける。第24図11は剥片の末端につまみをつけただけのもので、下端には素材となった剥片の加熱面が残っている。

5類（第21図4・11、第22図14、第23図1・10・11、第24図5）

左右いずれかの側刃が直線的で、もう一方の側刃がゆるく外側に張り出るものである。8点出土。第21図4は左側刃が弧状に外に張り出しているため、全体は半月状になっている。第23図1は人形で、裏面にはバティナの異なる剝離底が残っているものである。第23図11は剥片の末端につまみがつけられているもので、右側刃の下端には裏面にも二次加工が施されている。

6類（第21図12、第24図6）

全体として逆三角形状を呈するものである。2点出土。第24図6は両側刃が内側に彎曲しているもので、両面加工によって先端を作り出している。したがって、つまみがついているので一応石匙に分類したが、石鍬の可能性がある。

7類（第22図3・4、第23図6、第24図7・9・10）

全体として三角形状を呈するもので、側刃部は直線的なものである。つまみと反対側の下刃が直線的なものと、ゆるく弧状に張り出するものがある。8点出土。第22図3は剥片の裏側に二次加工が施され、整形されている。裏側だけに二次加工が施されているのはこれ1点のみである。第23図6はほぼ正三角形を呈するものでつまみが欠失している。機能部の角度は他の石匙に比して概して大きい。第24図7は剥片の末端につまみがつけられているもので、丁寧な二次加工で整形されている。第24図9は剥片の周辺に簡単な二次加工を施して整形したものである。

8類（第22図1、第23図2・3、第24図4）

全体として三角形状を呈するが、左右いずれかの角がもう一方の角よりもつまみの近くに位置するものである。4点出土。第22図1は横長の厚みのある剥片を素材とし、丁寧な押圧剝離が施されているものである。先端には細かな刃こぼれ状の痕跡が認められる。第23図3は薄身の剥片の下刃に簡単な二次加工を施したものである。つまみの作り出しも丁寧ではない。第24図4は丁寧な二次加工によって整形されているもので、先端がわずかに欠失している。

その他、形態の不明なものが15点ある。また所謂縦型・横型に分類すると、縦型が55点、横型13点、不明8点となり、縦型のものがかなり多い。また、各層位から各形態のものが出土しており、バラつきはない。

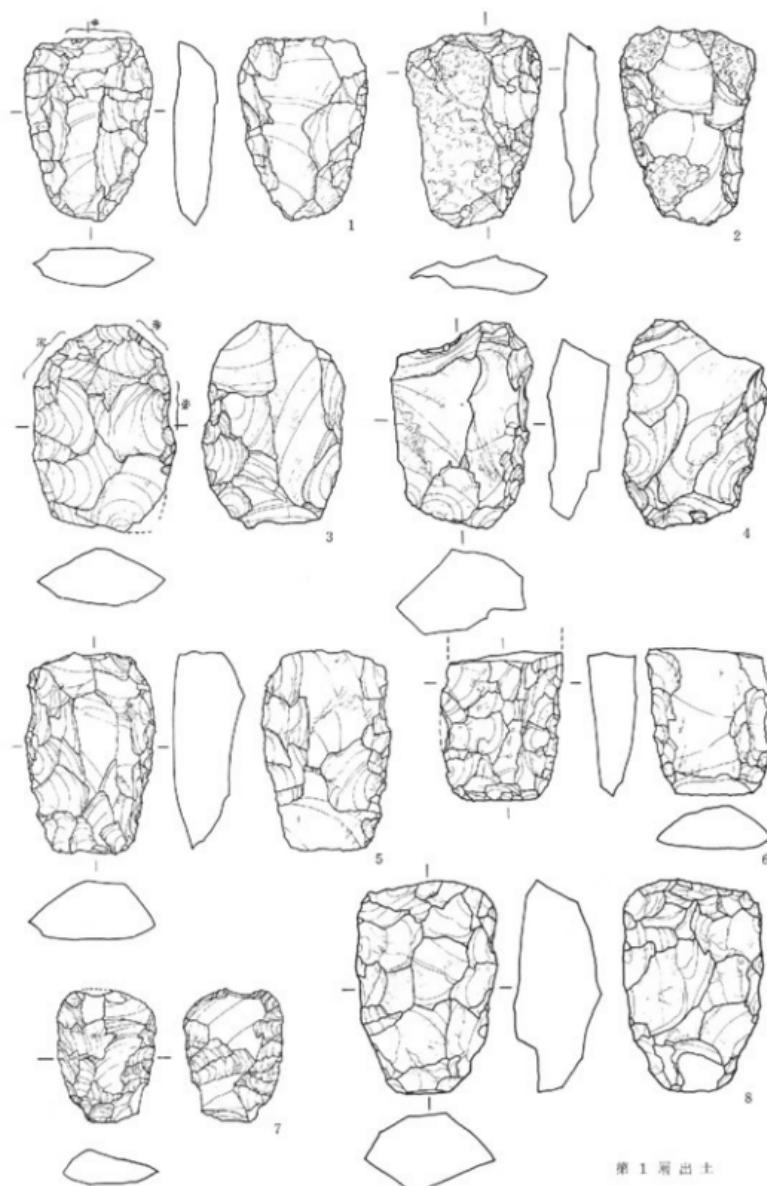
3. 石 篓（第25図、第26図、第27図1）

総計26点出土した。うち完形品が16点ある。第1層より10点、第2層より7点、第2a層より1点、第2b層より1点、第3層より4点、第3号住居跡より1点が出土した。その他に出土地不明なものが2点ある。

大きさは、大部分のものが、長さは5～6cm、幅は3～4cmの範囲に集中する。二次加工は、両面に丁寧に施されるものと裏面には周辺だけに施されるものがあり、大部分が粗く大きな剝離である。裏面は平坦なものが多く、横断面はかまぼこ型となるものが多い。最大厚のある部位は先端の近くが多く、したがって先端は急角度をなすものが多い。また、最大厚と最大幅の部位が一致するものが約半数存在する。石質はほとんどが頁岩である。

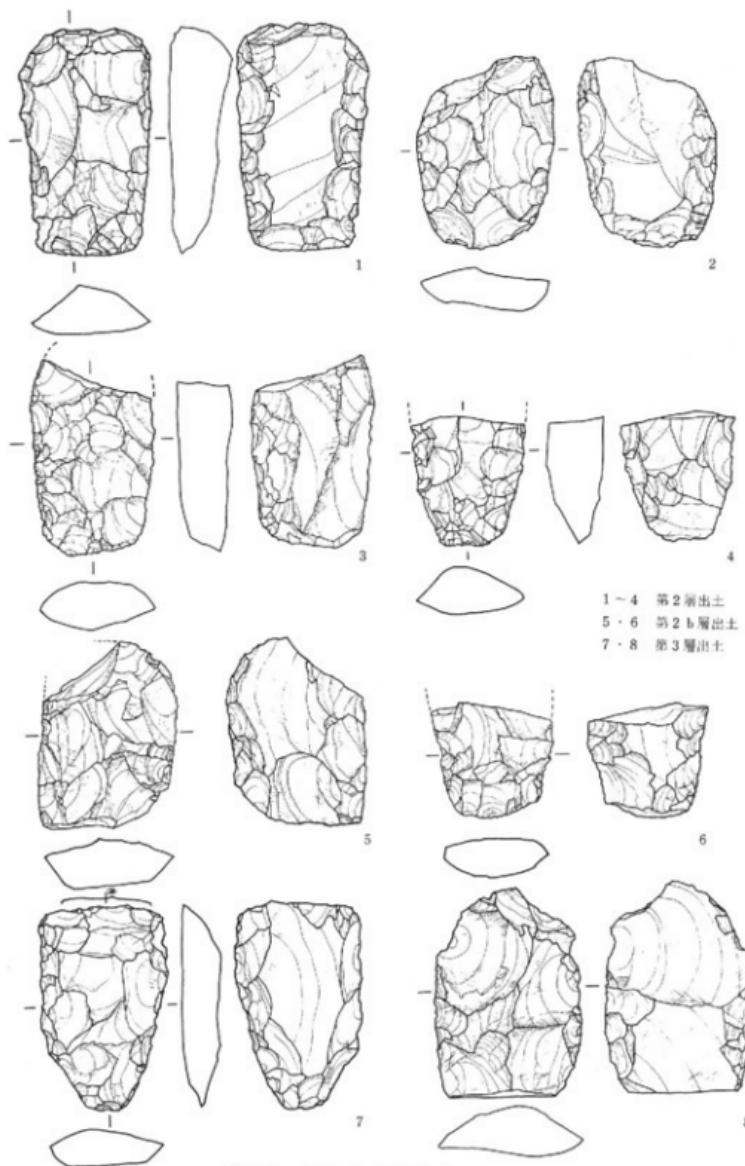
一方、これらの石器の表面には、剝離面の稜の磨滅や光沢が石器の中央部に残されており、使用方法や対象物を考えるうえで興味深い。

第25図1は縦長の剝片を素材としたもので、主に側辺部に二次加工が施されている。先端には細かな刃こぼれ状の剝離痕が認められる。またこの石器の表裏両面の中央部にはわずかに光沢が認められる。2は火熱をうけたらしく、大部分がはね飛んでしまっている。4は横長の剝片を素材とし、裏面側辺を大きな剝離によって整形している。5は横長の剝片を素材としており、裏面の二次加工は両側辺中央部のみに施されている。7は小型のもので、両側辺に二次加工が施されている。8は一部に自然面の残る厚めの剝片を素材とし、表裏とも全面に二次加工が施されている。第26図1は縦長の剝片を素材としている。表側に粗い大きめの剝離を加え、さらに表裏両面の側辺に二次加工を施し整形している。2は横長の剝片を素材としている。先端の左側は欠失したものと思われる。3は横長の剝片を素材としており、先端が欠失している。裏面右側辺はバルブ除去のためか二次加工が施されている。5は横長の剝片を素材としており、左側が欠失している。裏面の側辺には二次加工が施されているが、左側はバルブ除去のためか大きめの剝離がなされている。6は途中から折れたものであるが、使用によるものか製作時の中のものは不明である。横長の剝片を素材とし、基部には自然面が残っている。7も横長の剝片を素材としている。基部が細くなっているため平面形は五角形状を呈する。表側の中央部の剝離面の稜が先端付近から基部にかけて帯状に磨滅している。また、裏側の先端及び右側辺の剝離面の稜も磨滅している。さらに、先端には細かな刃こぼれ状の剝離痕が認められる。8は表裏両面ともに大きめの剝離のみであり、石核の可能性がある。第27図1は縦長の剝片を素材とおり、裏面は両側辺に粗い二次加工が施されている。また、先端には細かな刃こぼれ状の剝離痕が認められる。



第1層出土

第25図 石器実測図(Ⅰ)(縮尺2/3)



第26図 石器実測図(2)(縮尺2/3)

4. 石 墓（第27図2～4、第28図、第29図1～4）

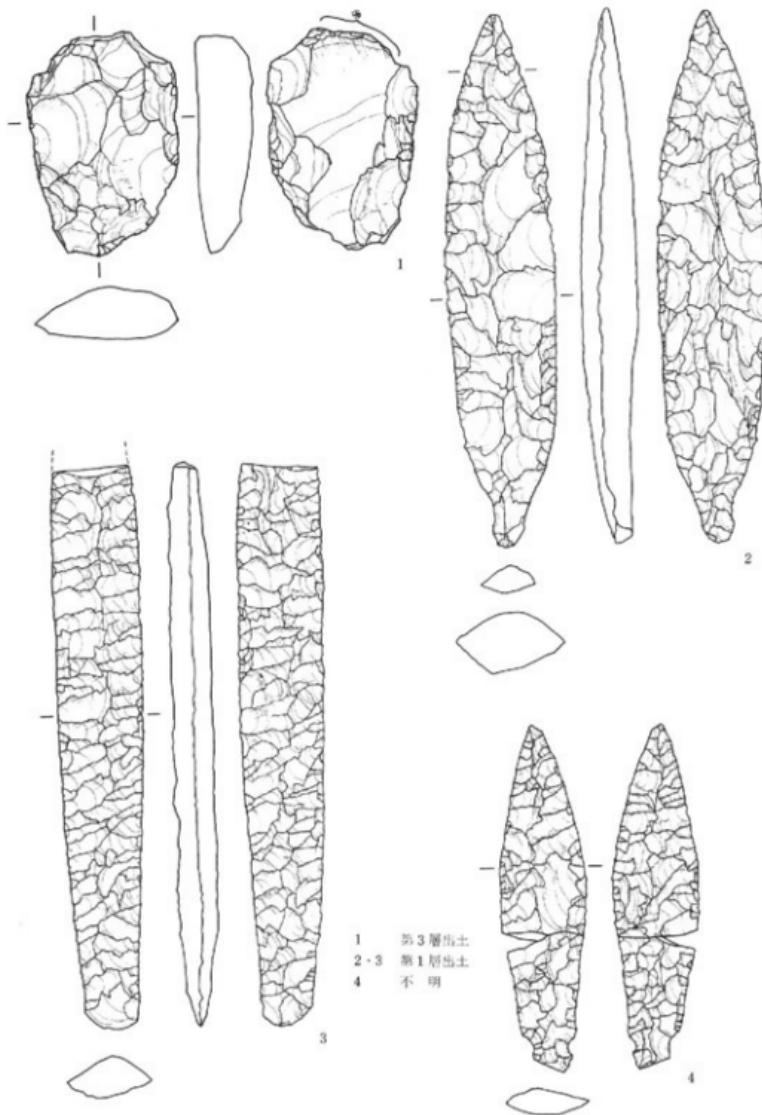
総計15点出土した。第1層より4点、第2層より3点、第2a層より1点、第2b層より2点、第3層より1点、第3号住居跡より1点が出土した。他に出土地不明のものが3点ある。石質はすべて頁岩である。

これらのうち、基部につまみを作り出しているものが5点ある。これは、両面加工であること、鋭い尖頭部を作り出し全体の形状が整った柳葉形をなすこと等から、石匙から分離して本類に含めた。

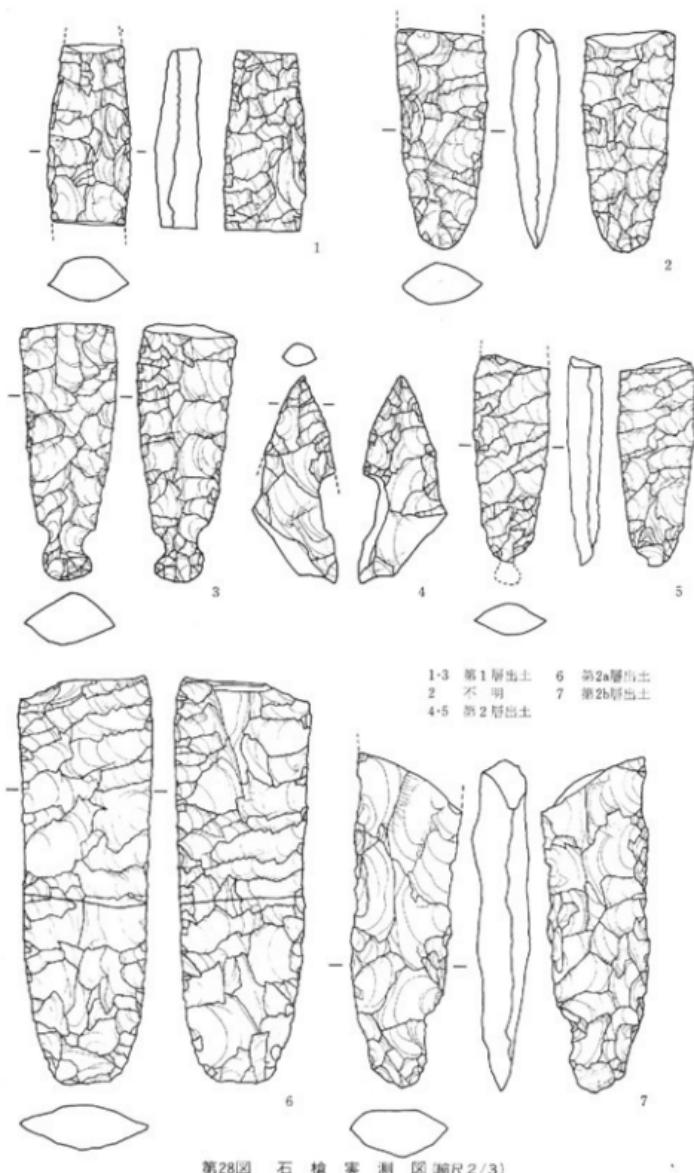
第27図2は整った柳葉形を呈するもので、基部にはつまみが作り出されている。二次加工は表裏とも全面に及び、丁寧に製作されている。尖頭部には磨痕が残っており、錐として使用されている。横断面はほぼ菱形である。3は尖頭部が欠失しており、基部にはつまみがないものである。表裏とも全面に丁寧に押圧剝離が施されている。横断面はほぼ菱形を呈し、薄身で長大なものである。4は薄身の柳葉形のもので、基部にはつまみが作り出されている。表裏全面に押圧剝離が施されており、さらに側辺には細かな二次加工が施されている。第28図1は尖頭部・基部ともに欠失しているもので、比較的厚手である。2は尖頭部を欠失しているので、表裏とも全面に二次加工が施されている。また折れ口から加撃された剝離痕が残っている。3も尖頭部が欠失しているので、基部にはつまみが作り出されている。表裏とも全面に丁寧に二次加工が施されている。折れ口から加撃された剝離痕が残っている。4は尖頭部のみ残存しているもので、火熱を受けている。先端は細かな二次加工によって丁寧に作り出されている。5は尖頭部と基部を欠失しているもので、基部には折れた痕跡が残っているので、つまみがついていたと思われる。表裏とも全面に押圧剝離が施されて、丁寧に製作されている。6は破損品どうしが接合したもので、比較的薄手のものである。表裏とも全面に丁寧に押圧剝離が施されており、側辺には細かな二次加工が施されている。また、折れ口にも二次加工が施されており、折損した後にも使用されていたと思われる。他のものに比して幅広であり、基部にはつまみがつけられていない。7は尖頭部を欠失しているもので、基部には自然面が残されている。表裏とも全面に粗い大きめの剝離が施されているだけであり、未製品の可能性がある。基部には若干のくびれがあるが、つまみをつけようとしたのか否かは判然としない。第29図1は尖頭部を欠失しているもので、基部にはつまみが作り出されている。2は基部が欠失しているもので、表裏とも全面に丁寧に押圧剝離が施されている。火熱を受けている。3は尖頭部を欠失しているもので、側辺に細かい二次加工を施し整形している。4は基部を欠失しているもので、小形のものである。先端にははっきりとした磨痕が残されており、錐として使用されている。

5. 石 錐（第29図5～14）

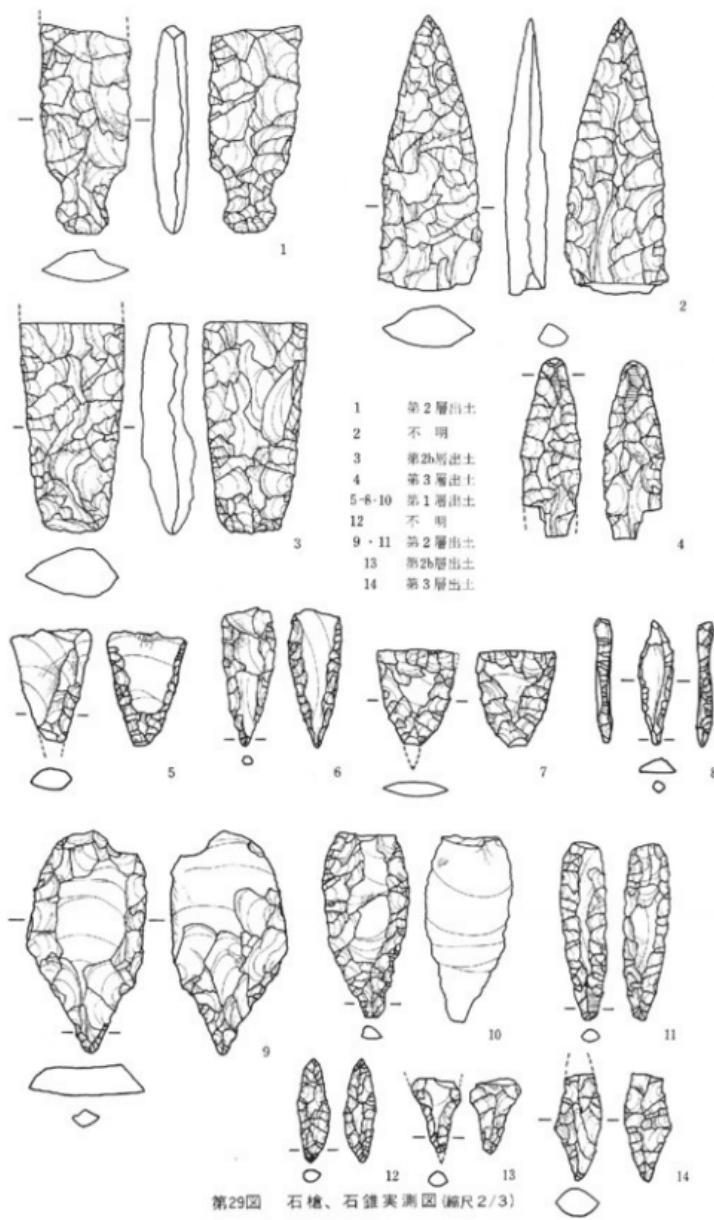
総計12点出土した。石質はすべて頁岩である。第1層より4点、第2a層より2点、第2層よ



第27図 石器、石槍実測図 (縮尺2/3)



第28図 石 槍 実 测 図 (縮尺2/3)



第29図 石槍、石錐実測図 (縮尺2/3)

り2点、第3層より2点出土し、不明のものが2点ある。

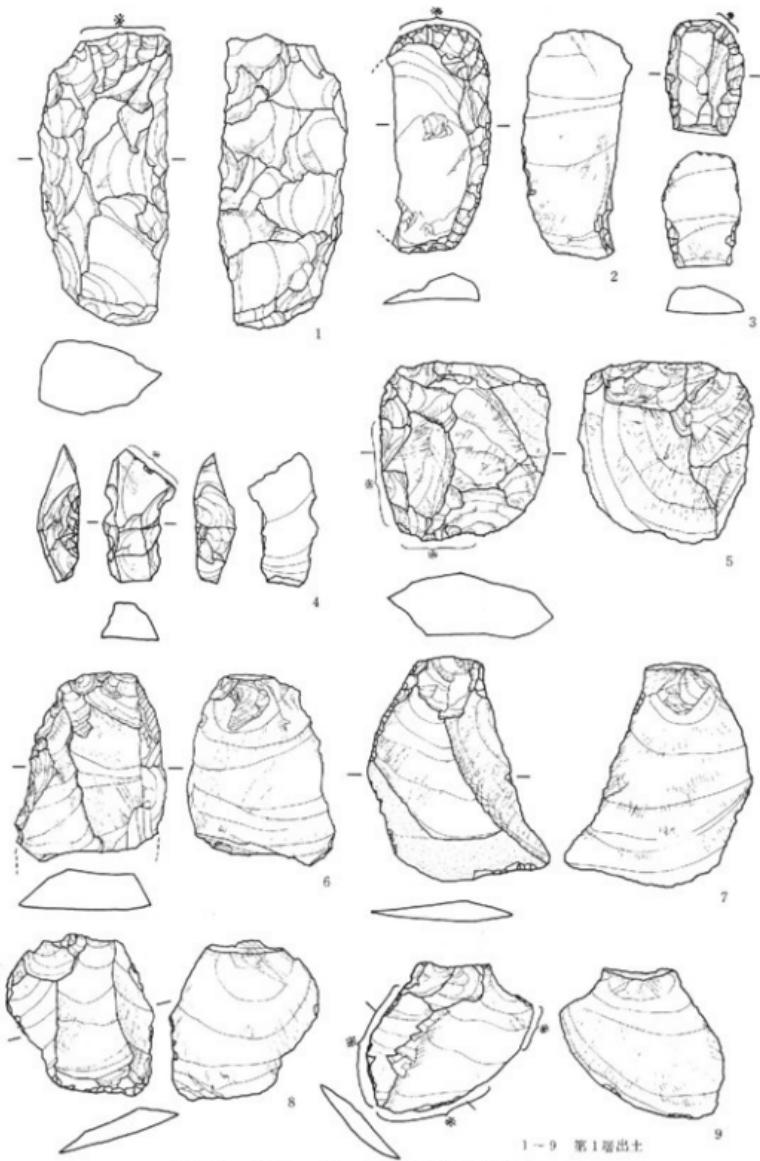
全体の形状は、三角形状のものと棒状のものとに大別され、棒状のものには先端に著しい磨痕が残されている。

第29図5は縦長の剥片を素材としているもので、機能部を欠失している。剥片の加筆点のある方を機能部にしているためその部分で厚みをもっている。機能部はほとんどか表側に施された二次加工によって作り出されている。6は横長の剥片を素材としているもので、機能部は側面に施された二次加工によって作り出され磨痕が残されている。7は縦長の剥片を素材としているもので、機能部は欠失している。表裏とも周辺から二次加工が施され石錐に類似するが、先端付近で急激に細くなるものは石錐ではなく、ここでは石錐に分類した。8は横長の剥片を素材とし、両側面にプランティング様の二次加工を施しているもので、その部分の横断面が菱形を呈するので石錐とした。9は縦長の剥片を素材としているもので、加筆点のある方を先端にしている。表側の周辺に急角度の剥離を施し整形しており、裏側にはバブル除去のための大きめの剥離が施されている。機能部は細かな剥離によって丁寧に作り出されている。10は縦長の剥片を素材としており、表側の側面に二次加工を施し整形している。裏側には二次加工が施されないため、機能部の横断面は三角形を呈する。この点で他の石錐と異なるが、明らかに尖頭部を作り出しているため石錐とした。11は横長の剥片を素材としているもので、表裏とも側面からの二次加工で整形している。機能部には著しく磨滅した部分があり、横方向の擦痕も残されている。12は縦長の剥片を素材とし、表裏とも全面に二次加工が施され、丁寧に製作されている。機能部には磨滅痕と横方向の擦痕が残されている。13は機能部の先端と上部が欠失しているもので、機能部は細かな二次加工によって作り出されている。14は上部が欠失しているもので、表裏とも全面に二次加工が施されている。

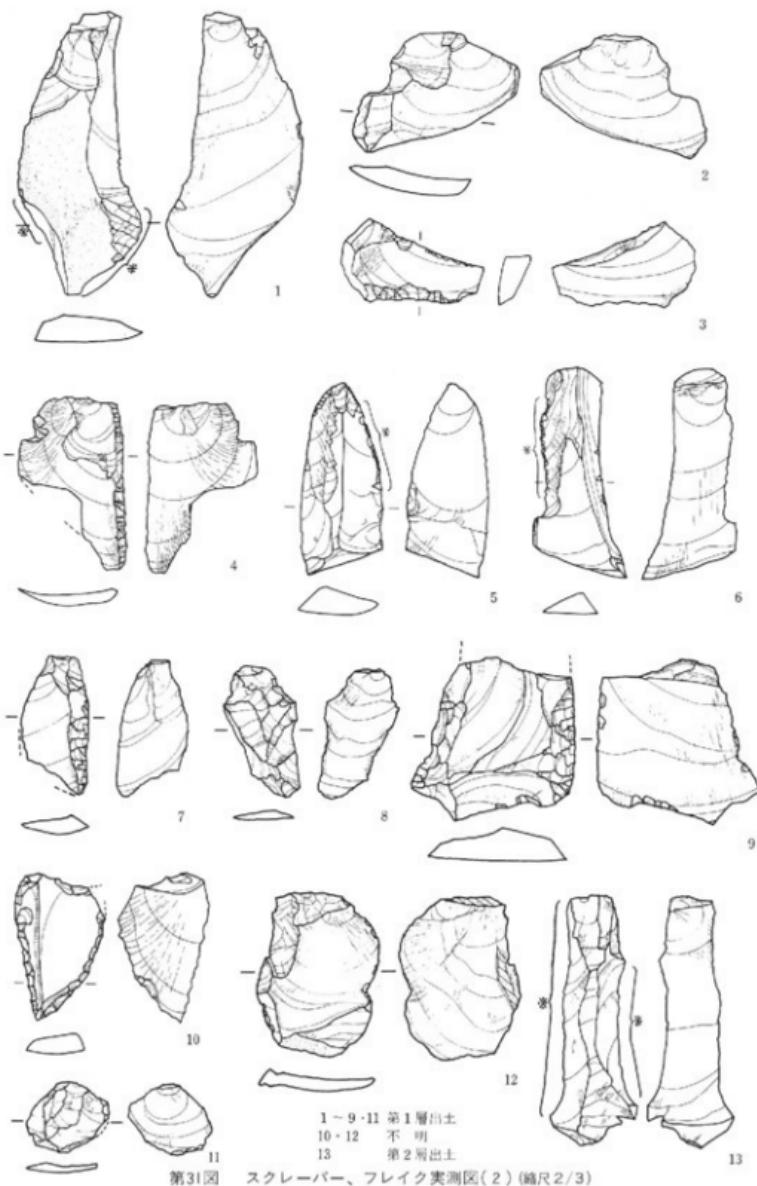
6. スクレーパー・使用痕ある剥片・剥片（第30図、第31図、第32図、第33図1～3）

本類は剥片の側面や末端に簡単な二次加工が施されているものや、使用によると思われる刃こぼれ状の剥離痕が残されているもの、所謂不定形石器と剥片を一括したものである。本跡出土の剥片には、その20%以上に二次加工が施され、大部分に使用痕が残されている。ここではそのうちの代表的なものを紹介するにとどめておくことにする。

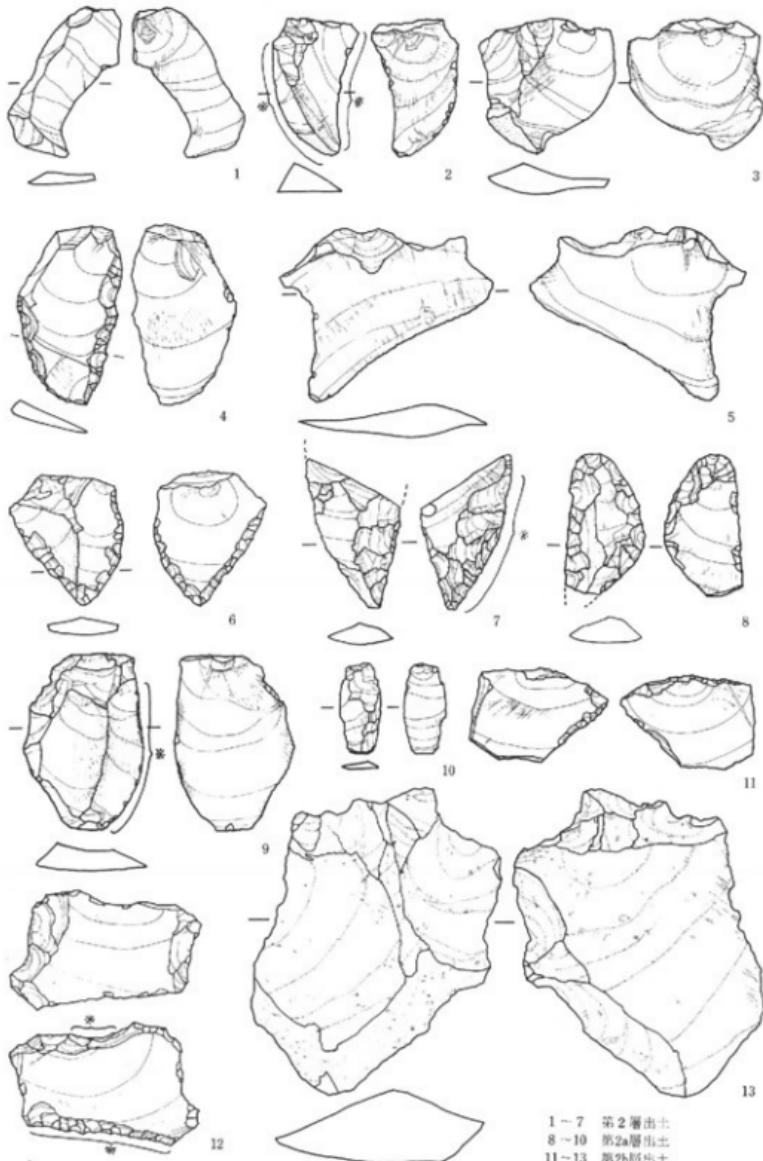
第30図1は大きめの剥離でほぼ半月形に形を整えているもので、上部にはさらに小さめの二次加工が施されている。その部分にはさらに細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されている。比較的厚手でゴロッとした感じであり、これ自体が石器なのか、あるいは何らかの石器の素材なのかは不明である。2は縦長の剥片を素材としており、火熱を受けたために半分がはね飛んでしまったものである。周辺には二次加工が施され、特に上部は丁寧に作られており、細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されている。3は縦長の剥片を素材とし、表側に二次加工を施し整形して



第30図 スクレーバー、フレイク実測図(1) (縮尺2/3)



第31図



1~7 第2層出土
8~10 第2a層出土
11~13 第2b層出土

第32図 スクレーバー、フレイク実測図(3)(縮尺2/3)

いるものである。一部に自然面が残り、右上部には細かな剥離痕が残っている。4は横長の剥片を素材とし、左右両端を折り取り、その折断面に二次加工を施したもので、折断調整石器と仮称されているものである(岡村 1979)。上部には細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されている。5は一部に自然面の残る剥片を素材とし、粗い大きめの剥離が施されており、石核かとも思われるが、左側辺と下部に刃こぼれ状の剥離痕が残っていることから本類に分類した。6は左側辺に細かな剥離痕が残された剥片である。7は左側辺に二次加工が施された剥片である。8は右下端に細かな剥離痕が残されている剥片である。9はほぼ全面に刃こぼれ状の細かな剥離痕が残されている剥片で、加撃面は自然面である。第31図1は右側辺の凸部に二次加工が施されているもので、自然面が大きく残っている剥片である。2は横長剥片である。3は下部に二次加工が施されているもので、上部は欠失しているが、その折れ口に細かな剥離痕が残されている。4は縦長の剥片の右側辺に二次加工が施されているもので、下部が欠失している。5は縦長剥片の左右側辺の表裏に細かい刃こぼれ状の剥離痕が残されているもので、加撃点は剥片剥離時にはね飛んでしまったらしく、残っていない。6は縦長の剥片の左側辺に細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されているものである。7は縦長の剥片の右側辺に二次加工が施されているもので、左側辺にも若干刃こぼれ状の細かい剥離痕が残っている。主要剥離面にはバルブが二つある。8は石器製作時に生じた剥片であると思われる。9は左右両側辺に二次加工が施されているもので、上部が欠失している。10は縦長の剥片の両側辺に二次加工を施したものである。11は薄い剥片で石器製作時に生じたものと思われる。12は自然面と節理面のある剥片で、加撃面も節理面である。13は上下両端にバルブが存在し、バイポーラー・テクニック(両極打法)で製作された剥片である。左右両側辺に細かい刃こぼれ状の剥離痕が残されている。上下両端にバルブを有するものはこれ1点のみの出土であり、本遺跡ではこの剥片剥離技術は盛行しなかったようである。第32図1は加撃点が加撃面の左の稜線上にある剥片である。2は左右両側辺に細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されている剥片である。3は末端に自然面の残る剥片である。4は左右両側辺に二次加工が施されている剥片である。5は加撃面の稜線上に加撃点が残された横長剥片である。6は表裏とも左右両側辺に二次加工が施されているものである。表側の二次加工は浅く、薄くはがしたような感じである。裏側の二次加工は表側の剥離面を加撃面として施されている。7は縦長の剥片を素材とし、左側辺に細かい剥離痕が残されているものである。二次加工は表側は右側辺、裏側は左側辺に施されている。8は縦長の剥片を素材としており、下部が欠失している。表側は全周に二次加工が施されている。裏側の二次加工はバルブ除去を目的としているらしく、上部にのみ施されている。9は右側辺に細かい刃こぼれ状の剥離痕が残されている剥片である。10は石器製作時の剥片であると思われる。11は横長の剥片を素材としているもので、加撃面は小さなプランティング様の二次加工で除去されている。表側の右側

邊にも二次加工が施されており、尖頭部を作り出しているかのようである。12は表側の左右両側邊に大きめの二次加工を施し、裏側の上下両邊に小さめの二次加工を施しているもので、周辺部はかなりの急角度を有する。13は安山岩の縦長の剥片を素材としているもので、裏側の剥離は大きく石核かとも思われるが、この剥離面に対応するような剥片がほとんど存在しないので、一応本類に分類しておくことにする。自然面を残し、火熱を受けていると思われる。第33図1は縦長の剥片を素材としたもので、表側の側邊に二次加工が施されている。2は横長の剥片で、表側の下端に節理面が残されている。右側邊の裏側に細かな刃こぼれ状の剥離痕が残されている。3は縦長の剥片を素材とし、表裏とも左右の側邊に二次加工が施されている。

剥片類は総計1163点出土した。ここでいう剥片類とは、スクレーパー・使用痕ある剥片・剥片の総称である。第1層より349点、第2層より313点、第2a層より126点、第2層より120点、第3層より118点、第1号住居跡より12点、第2号住居跡より7点、第3号住居跡より41点が出土した。他に出土地不明のものが77点ある。

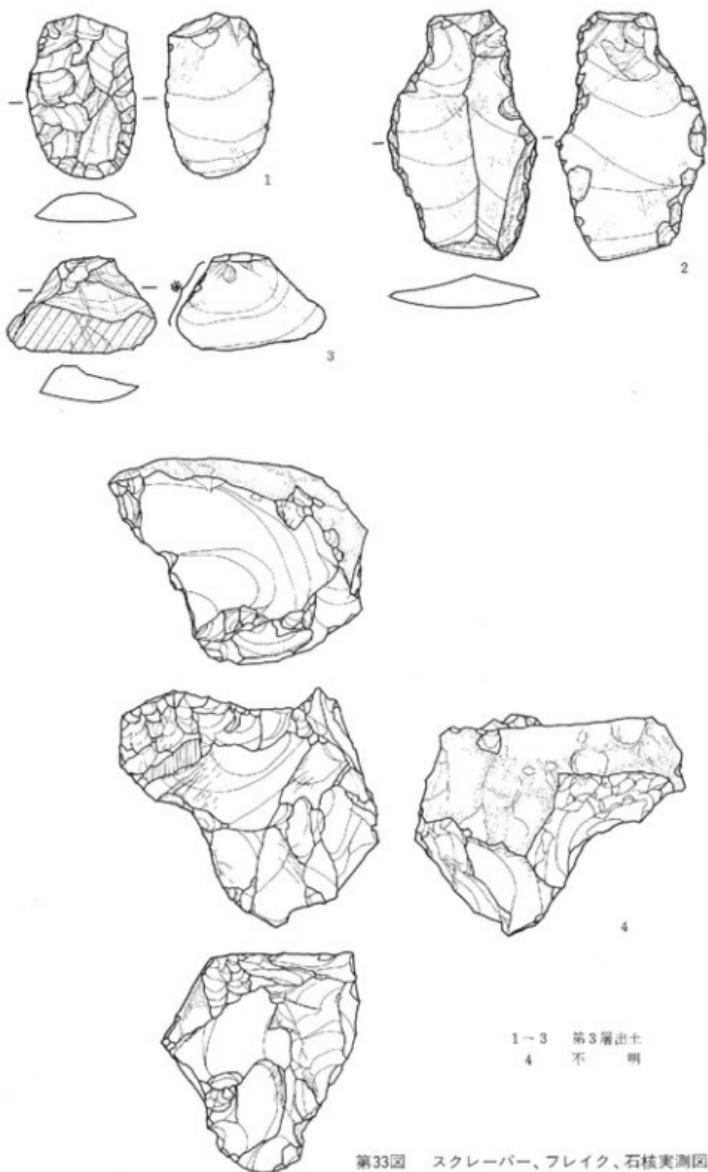
出土した剥片類のうち計測可能なものは212点にすぎなかった。なお、計測方法は林（林1969）に拠った。計測結果によれば大部分の剥片は、長さ2~4cm、幅2~4cmの間に集中している。しかし、この計測方法は長さがみかけより短く、幅がみかけより広く計測値として出てくる傾向があるので、みかけの剥片の形状はやや縦長のものが多い。剥片の最大幅のある部位は中央部が最も多く、次いで下部、上部にあるものの順となる。末端の形状は鋭く薄いフェザーエンドのものが大部分である。剥離角は110°前後のものが最も多い。また加撃面は平坦なものが大部分で、バルブは大きくはっきりしたもののが約3%を占めている。

剥片に二次加工を施したものは全体の2割以上に及び、明確に二次加工と断定できない細かい刃こぼれ状の剥離痕が残されているものを含めると半数以上に及ぶ。二次加工は表側に施されたものが多く、多くは側邊部になされ左右ほぼ同数である。

自然面を残している剥片は全体の1割強を占めるが、大きく自然面を残しているものは極くわずかである。また、変色したり、はね飛んだりして明らかに火熱を受けた剥片が53点ある。

B. 石核（第33図4）

石核は総計3点出土している。図示したものが最も多くの剥片が剥取されているものである。加撃面は二箇所認められ、大きく自然面をとり去り加撃面を作り出している。一つの加撃面からある程度の剥片を剥取ると、加撃面の再生や調整はなされずに、他の加撃面へ転移するという工程がみられる。



第33図 スクレーバー、フレイク、石核実測図
(縮尺2/3)

C. 磨製石器

1. 磨製石斧（第34図）

総計8点出土した。第1層より3点、第2層より1点、第2a層より1点、第3層より1点が出土した。他に出土地不明のものが2点ある。石質は堆積岩系統の岩石が主に用いられている。

第34図1は全面に剥離の痕跡が残っているもので、全体を研磨によって仕上げている。刃部の剥離痕は敲打によるものであり、研磨後に施されたものである。これは斧としての機能を果せなくなつてからも、何らかの用途に使われた可能性を示していると思われる。2は1と同様に全面に剥離剝と敲打痕が残っているもので、頭部は二次加工が施され整形されている。

3は小形のもので頭部が欠失している。実用に供されたらしく、刃部はやや片刃気味であり、破損もみられる。第34図4は環状磨製石斧で、半径は約7cmであり、約1/4が現存している。5は刃部を欠失しているもので、全面に丁寧に研磨が施されている。

今調査で出土した磨製石斧によれば、まず手頃な原石に敲打を加え大体の形を整え、さらにそれを研磨して完成させるという製作工程を考えられる。一方、東日本の縄文時代早・前期には擦切手法による石斧が存在する。三神峯遺跡においても、1967年の宮城教育大学の調査（白鳥 1974）や1974年の仙台市教育委員会の調査では、擦切手法による石斧が出土しており（第41図1）三神峯遺跡でも擦切手法は存在したと思われる。

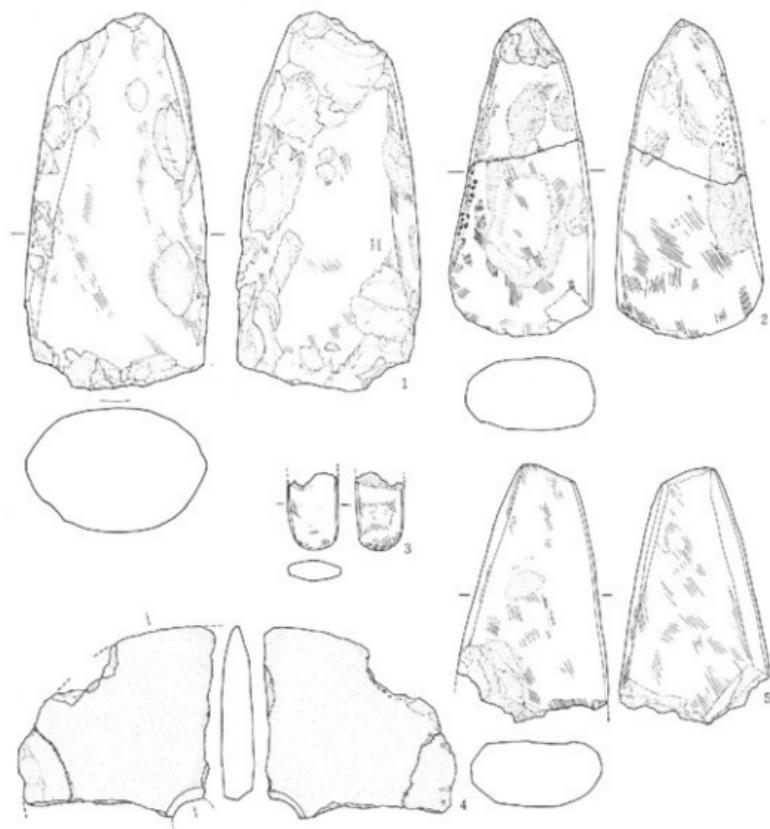
また、環状磨製石斧は林によれば「東北では上川名、ムシリ、野口などから出土していて、ほぼその年代は桂島式の前後に限定される」（林 1965、73P）ものである。用途は棍棒頭と考えられている。最近では縄文時代から弥生時代まで出土例が増加している。

2. 石皿（第35図）

完形・破損品あわせて23点出土しているが、ほとんどが破片である。第1層より7点、第2層より5点、第2a層より2点、第2b層より2点、第3層より1点、第3号住居跡より2点出土した。他に出土地不明のものが4点ある。石質は、ほとんどが安山岩の凹凸の激しいものを用いているが、花崗岩を用いた表面の滑らかなものもある。

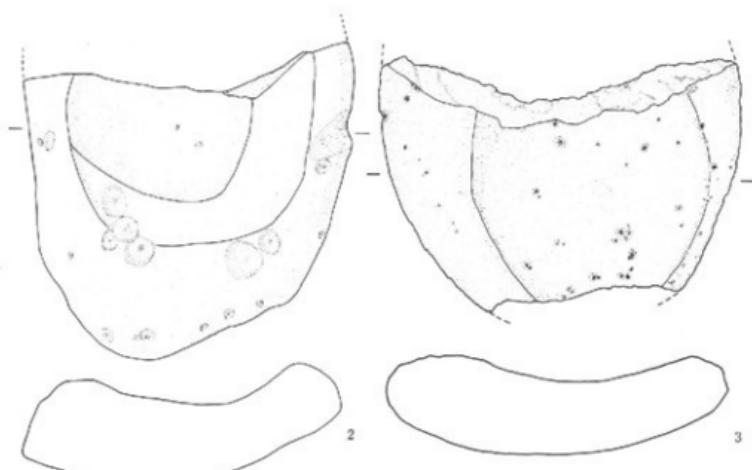
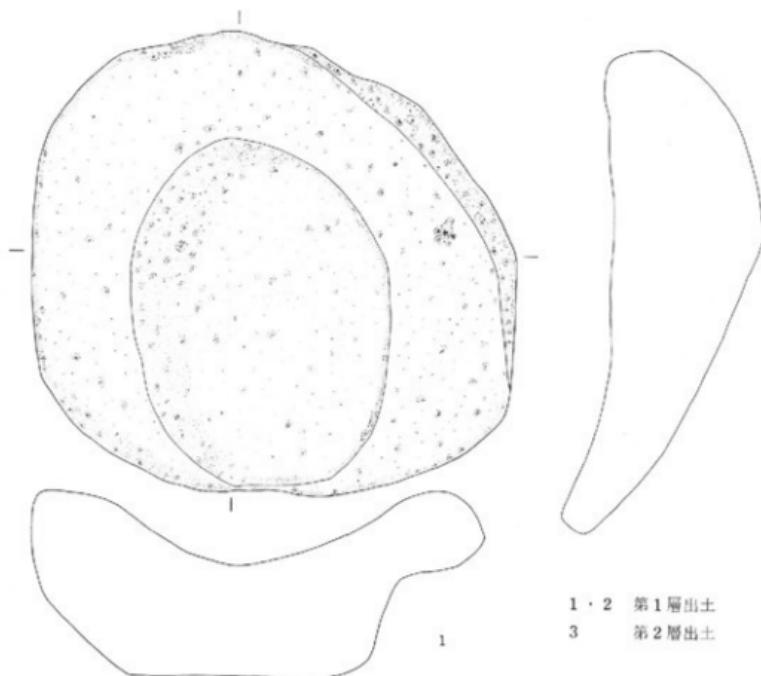
多くのものは中央に凹みをもつが、平坦なものや断面が橢円形をなす中央部が盛り上っているものがある。大部分のものは火熱をうけている。

第25図1は完形のもので、中央部は凹んでおり、凹みの部分には明瞭に磨痕が認められる。一方には搔き出し口がつけられている。裏面も若干研磨が施されており、すわりをよくしたらしい。2は半分が欠失しているもので、中央部が凹んでいる。周辺部には径2cm程の凹みがあり、凹石もかねていたらしい。裏面にも凹みが2個残されている。3は半分が欠失しているもので、中央部が凹んでいる。



- 1・3 第1層出土
2 不明
4 第3層出土
5 第2層出土

第34図 磨製石斧実測図 (縮尺2/3)



第35図 石皿実測図 (縮尺2/3)

3. 磨石、凹石、礫（第36図）

磨石は36点出土した。第1層から4点、第2層から7点、第2a層から1点、第2b層から4点、第3層から1点、第3号住居跡から2点が出土した。他に出土地不明のものが17点ある。石質は安山岩系の河原石が大部分を占める。なお実測図の←→は磨痕の残されている範囲を示している。

磨石は礫に磨痕が残されているもので、凹みが同一個体につけられている場合には凹石として分類した。平面形は楕円形を基本とし、横断面は円形、楕円形、三角形、四角形等を呈している。長さは10cm程度のものが多く、厚さは5cm前後が一番多い。重さは700g前後が多いが、バラつきも大きい。研磨面は一面だけのものは少く、三面、四面と研磨してあるものが多い。破損品が多いが、これらも長さ10cm程度のものが多く、これは大きすぎる礫を手頃な大きさに削って使用した結果も考えられるが、なお検討を要しよう。

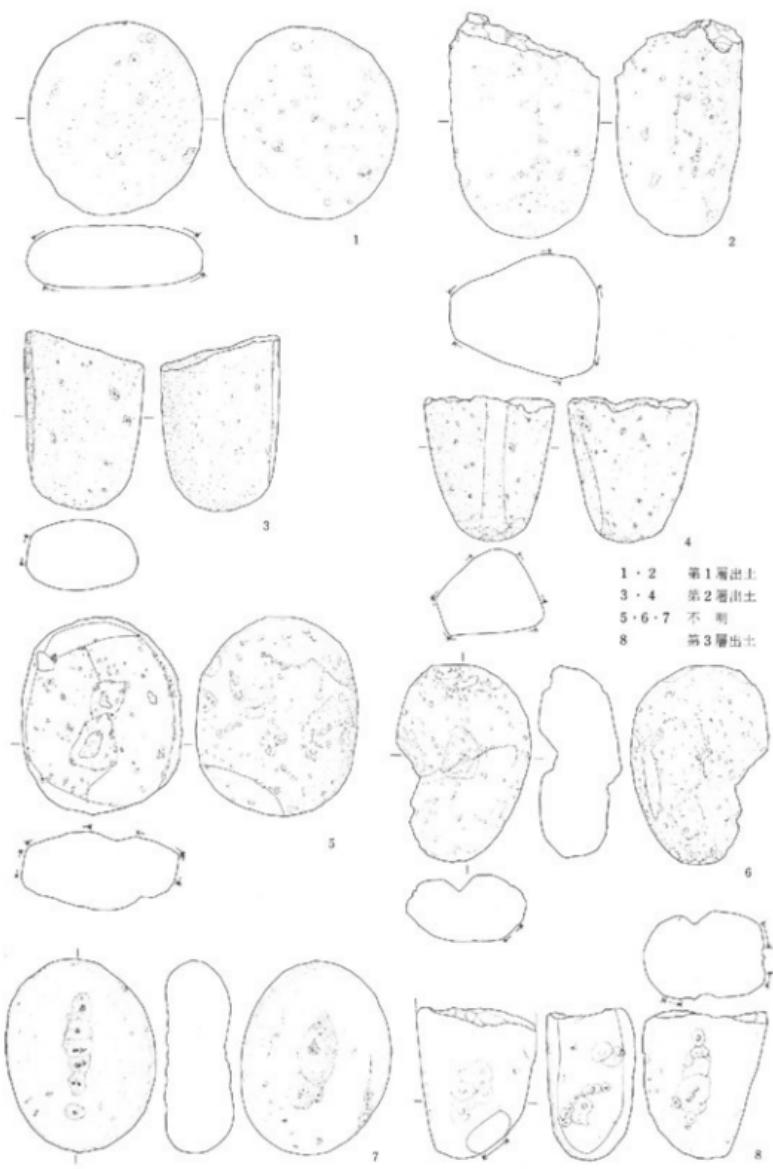
第36図1はほぼ円形の扁平な礫の平担面に磨痕が残されているものである。2はほぼ全面に磨痕が残されているもので、一部には敲打痕が残されている。3は横断面が楕円形を呈する礫の左側辺に磨石が残されているものである。4はほぼ全面に磨痕が残されており、下端には敲打によると思われる剝離痕が残されているものである。2、3、4は特殊磨石である。

凹石は25点出土した。第1層から4点、第2層から4点、第2b層から2点、第3層から5点、第3号住居跡から1点が出土した。他に出土地不明のものが9点ある。石質は安山岩系の河原石が用いられている。磨石とほぼ同様の形態の礫に1～3個の凹みをつけたものである。凹みはほぼ円形を呈し、直径は8～30mmまでのものがあるが、15mm前後のものが最も多い。凹みの深さは2～4mmに一定している。完形・破損品とも手で握れるくらいの大きさのものが多く、磨痕が残されているものも多い。

第36図5は楕円形の礫の片面に2個の凹みが穿たれているもので、凹みの周辺と左右両側辺に磨痕が残されている。6は卵形の礫の片面に1個の深い凹みが穿たれているもので、表面の風化が著しいものである。7は楕円形の礫の片面に6個、他の面に2個の凹みが穿たれているものである。8は半削の礫の片面に4個、他の面に2個、側辺に3個の凹みが穿たれているもので、それぞれの凹みは何回かの敲打によって穿たれている。礫の形態と凹みの位置から凹みは素材となった礫が半削品になった後穿たれたと思われる。5、8は特殊磨石である。

磨石や凹石と同様の形態を呈するが、磨痕や凹み、敲打痕が残されていないものを礫として一括した。これは人間が何らかの意図で遺跡内に搬入したものである。

他に珪化木が数点出土している。



第36図 磨石、凹石実測図 (縮尺1/3)

III. そ の 他

イ. 土 師 器

いずれも小碎片のみ。第1層(表土)から出土したものかほとんどで、明確に遺構に伴なって出土したものは見られない。点数にして20点ほどで甕が圧倒的に多く、壺が若干混じる。

・甕…口縁部が1点、他は体部。口縁部は体部から90度の角度で外反し、口唇部でわずかに立ちあがる形状のもので、内外面ともロクロで調整している。体部は、中央部付近でいく分ふくらみをもち、下端ですむ形態で、上半部は外面ロクロ調整、下半部はケズリかタタキの痕跡が見られる。特に下半部は二次的に炎を受けた形跡は明瞭である。全般に焼成は良好で、色調は灰褐色を呈し、器厚は4~5mmで薄手である。

・壺…いずれも破片で2点出土。1点は、口縁~底部にかけての破片のため復原可能。ロクロによる調整が内外面に見られ、特に内面は内黒ミガキ調整が見られる。口径13.8cm、器厚4mm。

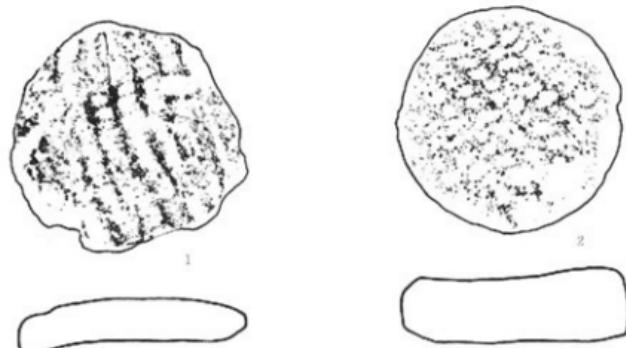
甕、壺とも平安時代のものであろう。

ロ. 須 惠 器

1個体分出土。器形は壺。体部破片。焼成堅緻。色調は青灰色。外面にロクロ調整が施されている。器厚は5~6mmで下部は厚い。奈良平安期のものと思われる。

ハ. 土製円板 (第37図)

いずれも繩文土器片を利用して作られたものである。2は周縁をていねいに研磨しており、円形である。直徑3.9cm、厚さ1.0~1.1cmと厚手である。表面に繩文が施文されているが磨耗して判然としない。纖維を含む。1は周縁を荒く打ち欠いて円形にしたものである。直徑4.0cmだが厚さは5mmで前者よりも薄い。繩文は前者同様磨耗のため判然としない。多量の纖維を含む。いずれも大木1~2a式のものである。



第37図 土製円板実測図 (縮尺1/1)

ニ. 不明土製品

丸味を帯びた細長い形態を呈し、赤褐色に焼けているものである。胎土にはいくぶん繊維を含む。粘土を手で丸めて細く延ばし、強く握ったらしく指のあとと思われる凹みが残されている。意図的に作ったものではないと思われるが、適当な名称がないので不明土製品とした。

ホ. 寛永通宝

1点、表土から出土した。

(4). 住居跡床面出土の炭の放射性炭素による年代測定結果について

今回の調査で発見された竪穴住居跡からは、いずれも住居跡中央部の床面直上で、厚さ1cm前後の焼土を伴わない炭化物の分布が確認された。特に3号住居跡では顕著であったので、このサンプルを採集して放射性炭素による年代測定を依頼した。依頼先は、社団法人日本アイソトープ協会（東京都文京区駒込二丁目28-45）である。採集月日は昭和50年8月27日で、昭和51年6月3日付けで測定結果が仙台市教育委員会へ送られてきた。それによれば、この炭の年代は<B.P. 5840±125年 (Libby 値B.P. 5680±120年)>である。この炭が住居跡床面直上出土のものという点から考えて、この炭の年代は即住居跡の年代ということができる。なお、これに関する付記として、①C¹⁴年代が年代誤差の範囲に含まれる確率は70%である。②、C¹⁴年代は必ずしも真の年代と等しくない、とされている。

この住居跡の床面からは作出遺物がほとんど見られず、遺物との厳密な年代的な対比はできないが、住居跡に伴う土器型式として、三神峯III式ないし、大木2a式の範囲に含まれることはまちがいないわけである。

(5). 昭和48年度調査成果

〈調査体制〉

▽調査期間：昭和48年5月1日～5月5日

▽調査主体：仙台市教育委員会

▽調査担当者：伊東信雄（東北学院大学教授）

▽調査員：岩渕康治（仙台市教育委員会社会教育課）

▽調査協力：仙台市公園工事事務所

　　丹羽　茂（宮城県教育庁文化財保護課）

　　山田　稔（東北学院大学考古学研究部）

〈調査の動機と経過〉

遺跡東北端において、国有地と民有地の境界表示の為、延長約140mにわたり、コンクリート基礎の鉄筋設置工事が仙台市公園工事事務所の昭和47年度事業として実施され、仙台市教育委員会が立ち会ったところ、その一角において遺構らしきものを検出したので、工事を一部中断してその実態調査を実施することになったものである。

調査は、鉄筋の基礎設置のため掘りあけたビットのうち、焼土および土器などが検出された地点を中心にして2つのトレンチを設定、合計26m²にわたり調査を実施した。トレンチを設定した位置は、台地の北東端、崖よりのところである。

調査の結果、表土下40～50cmにおいてほぼ隅丸方形と推定される落ちこみ輪郭の一部が3ヶ所で検出されたので、掘削によって破壊される予定の部分（Bトレンチ）についてさらに精査を進め、2基の落ちこみの一部を床面まで掘り下げ断面、平面の記録を採取した。

落ちこみの埋土は3～8層に細別され、レンズ状もしくは水平堆積状態を呈している。先に検出された焼土帯はこれらの堆上の上部に位置しており、人為的遺構と見ることは難かしく、投棄されたものと考えられる。また、落ちこみの壁面は垂直もしくはやや斜めに立ちあがり、床面はきわめて平坦で、部分的に炭が残存していた。壁際の床面には径8～10cm、深さ5cm程度の小ビットが15～20cm間隔で検出されたり、おちこみの東邊では径50cm、深さ40cm程度の円形ビットが確認されたりしている。こうした状況は、今回の調査で確認された住居跡ときわめて共通点が多く、住居跡の一部と認定してさしつかえないと思われる。

○出土遺物

ミカン箱大ダンボール1.5箱分出土。その大半は繩文土器である。他は石器である。整理が進んでいないため略述するが、傾向としては今回の調査成果と類似する。出土層で最も顕著だったのは、住居跡埋土の最上部に属する焼土帶およびその上下層で圧倒的に多く、埋上下層および床面直上からはほとんど発見されなかったことである。

① 繩文土器…完形品ではなく、いずれも破片である。全体に焼成および保存状態は良好である。

(器形) 完形品がないため不詳だが、口縁部は外反気味で山形の突起もししくはゆるやかな波状口縁のものが多い。体部は上部がわずかに内反気味に開くが下部は直立気味のものが多い。底部は平底でそれ以外のものは見当たらなかった。

(胎土) 繊維を含むものが多く、また砂や石英をよく含み、きめの荒いものが多い。

(文様) 斜行繩文と羽状繩文が圧倒的に多いが、他にループ文、竹管沈線文、撚糸文などがある。総体的に、体部の上3分の1付近で文様帯の分離が認められる。

(その他) 底部および体部下半は二次的炎によって赤変し、もろくなっているものが多く見られた。

(型式) 大本1~2a式のものが多い。

② 石 器…10数点出土。

・剥片石器…いずれも頁岩製である。

(右點) 片面調整。つまみを除く各辺にリタッチが施されている。

(石鎌) 二等辺三角形で両面にリタッチが加えられている。調整はやや難である。

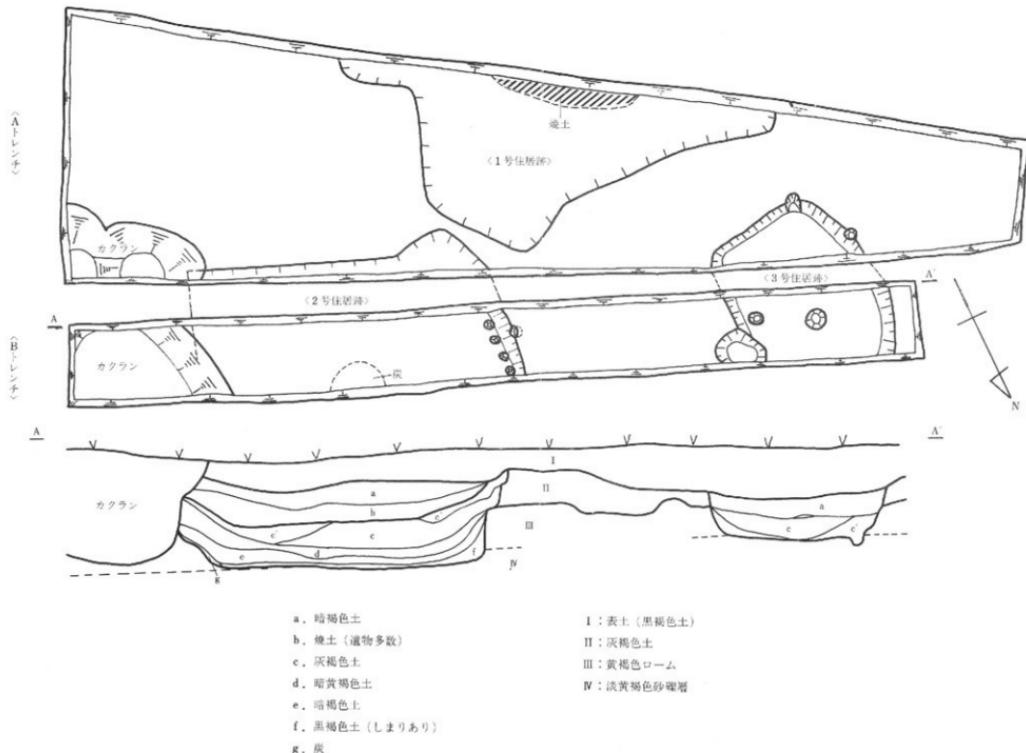
(石錐) 断面菱形で全面に調整が及んでいる。

(使用痕のあるフレイク) 細かい調整はない。

・磨製石器

B 地点検出堅穴住居跡一覧表

	第 1 号 住 居 跡	第 2 号 住 居 跡	第 3 号 住 居 跡
位 置	Aトレンチ西半	Aトレンチ東北縁、Bトレンチ東半	Aトレンチ西半、Bトレンチ西半
検 出	II層上面(表土下40~50cm)	II層上面(表土下30cm)	II層上面(表土下40cm)
平 面 形	隅丸方形?(部分検出)	隅丸方形?(部分検出)	隅丸方形?(部分検出)
規 模	3.6×x(m)	3.1×x(m)	1.5×2.0?(m)
深 さ	光沢せず不明	80cm(II層上面より)	50cm(II層上面より)
壁	不明	凸壁は直立、東壁は45°前後(段状)	西壁とも70度前後
床 地	不明	磯削直上、平坦、凹い、底あり	磯層上、やや凹凸あり、底い
柱 穴	不明	壁際で20cm間隔の小穴4ヶ (深さ10cm前後)	壁にいくこんだビット2 (深さ30cm~40cm) 床中央で1、裏寄りで1(深さ10cm)
埋 土	上部…燒土、灰、遺物を含む暗褐色 下部…不明	上部…燒土と遺物、灰を含む暗褐色 下部…遺物軽少つまりある灰褐色土	全体的にしまった灰褐色土、遺物 稀少
そ の 他	東辺に張り出しあるおちこみ。	床面中央で炭の広がりを確認、東辺 は薪ヒットで既設	東辺で直径50cm、深さ30cmのピット検出
出土遺物	繩文前期土器、石斧	繩文前期土器、石斧	繩文前期土器、石斧
備 考	輪郭確認のみで張り上げず	Aトレンチにかかった部分は張り上げず	全体の3分の2以上を検出



第38図 B地点調査実測図 (縮尺1:40)

(擦切石斧) 側辺に擦切痕が残っている。材質は輝緑岩もしくは綠泥岩。破片。

(石皿) 砂岩製。破片。片面を中凹に擦っている。もろい。

(凹石、磨石)

(6). 過去の未報告遺物

A. 土偶

昭和40年以前に採集され、現在東北大文学部考古学研究室に保管されている。2点。いずれも破損品だが、板状土偶の一部である。

1は、全形は不詳だが、おそらく中央部が細くくびれるひょうたん形の板状土偶と思われる。縦15.2cm、横9.0cm、厚さ1.9~2.3cm（下にいくほど厚い）の破片である。焼成は良好だが胎土に砂粒を含む。色調は白褐色だが黒斑をもつ。下端部付近に推定径1.8cmの貫通円孔（焼成前のもの）を有する。両面に半截竹管によると思われる沈線文様が施されている。両面とも中心線をはさんで左右対称の文様を形づくっている。一面には、上下に2本の平行沈線が下端の円孔の1.5cmほど上まで刻まれ、その両側に3本の弧状沈線が施され、上部には蛇行線、平行線、鋸歯状線などが刻まれ対称文様を作っている。下端、円孔の左側には半截竹管刺突文が規則的に配列されている。裏面も同じく半截竹管による沈線文様を形成しているが、下半部は円孔の右側で2本の平行沈線による右巻きの3回満巻文となっている。上半部は弧線、鋸歯状線による対称文様となっている。一見して、両面とも複雑な沈線文様であるが、女性像を象ったものであることはまちがいない。

2も破損品だが板状土偶の胸部破片である。現形は、縦7.1cm、横8.3cm、厚さ2.0cmで、前者と比較すると小型である。胸部に円錐形の乳房の貼りつけがあり、胸部の表現を中心とした土偶である。両乳房の下部中央は近から左右両下方に竹管沈線が刻まれているが、他には文様は全くない。焼成は良好で、胎土に砂粒、石英粒を含み、色調は灰褐色である。表面は削りとナデを施した形跡があり、滑らかである。総合的にみて前者とは異質の趣がある。時期としては、繩文前期後半（大木4~6式）ごろと考えられる。

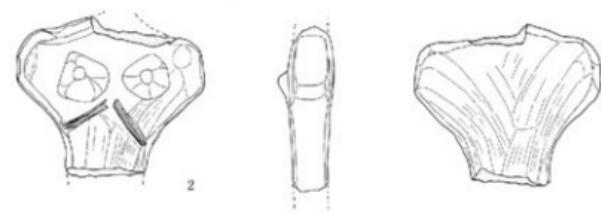
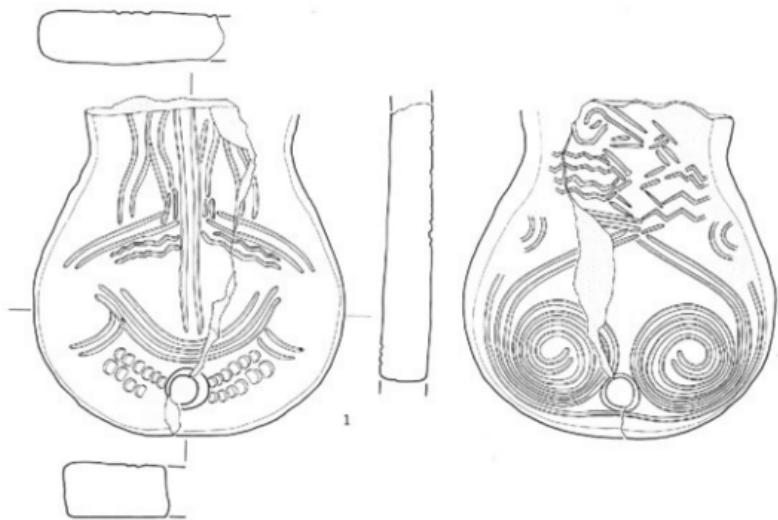
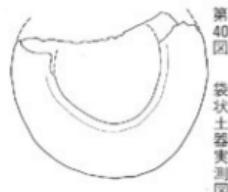


図1：宮城県教委・丹羽茂氏 実測

第39図 土偶実測図 (縮尺1/2)

B. 袋状土器

第40図は山田しょう氏が1971年頃に農道の断面より採集したものである。焼成は良好であり、色調は明黄褐色を呈する。約半分を欠失しているが、器形はやや掲底氣味の底部を有し、口縁部ですばまる楕円形のものと思われる。胎土には若干の纖維を含んでいる。外面は全面きれいに磨かれ、丹塗りの痕跡が認められる。内面はヘラ状工具によるナデが認められ底部付近に顕著である。底部と体部は別々に作られた後接合されており、合せ目付近に指頭の圧痕が残されている。時期は胎土に纖維が混入されていることから縄文時代前期前半に属するものと思われる。



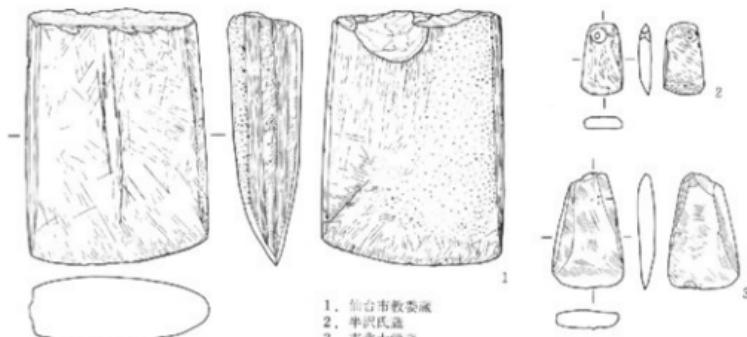
第40図
袋状土器実測図



(縮尺1/3)

C. 磨製石斧

第41図1は1974年の仙台市教委の調査の際に出土したもので、基部が欠失しているものである。表側は全面が研磨されており、擦痕が著しい。中央に残る条は研磨以前につけられたものであり、擦切痕の可能性がある。右側辺には表側と裏側からの擦切痕が残り、中央付近に凸出した部分がある。これは、擦切の際最後まで擦切らずに途中で折り取ったためと思われる。裏面には研磨以前に施された小さな敲打痕がほぼ全面に認められる。刃部には斜め方向の擦痕が表裏とも残されている。3は東北大学所蔵のもので、発見時期は不明である。表裏ともきれいに研磨されており、擦痕がよく観察される。刃部はやや片刃氣味である。2は半沢正氏採集のもので、所属時期は不明である。表裏とともにきれいに研磨されており、基部も刃部同様に薄く仕上げている。刃部はやや片刃氣味である。基部には両側から穿たれた孔がみられることから垂飾品とも考えられるものである。



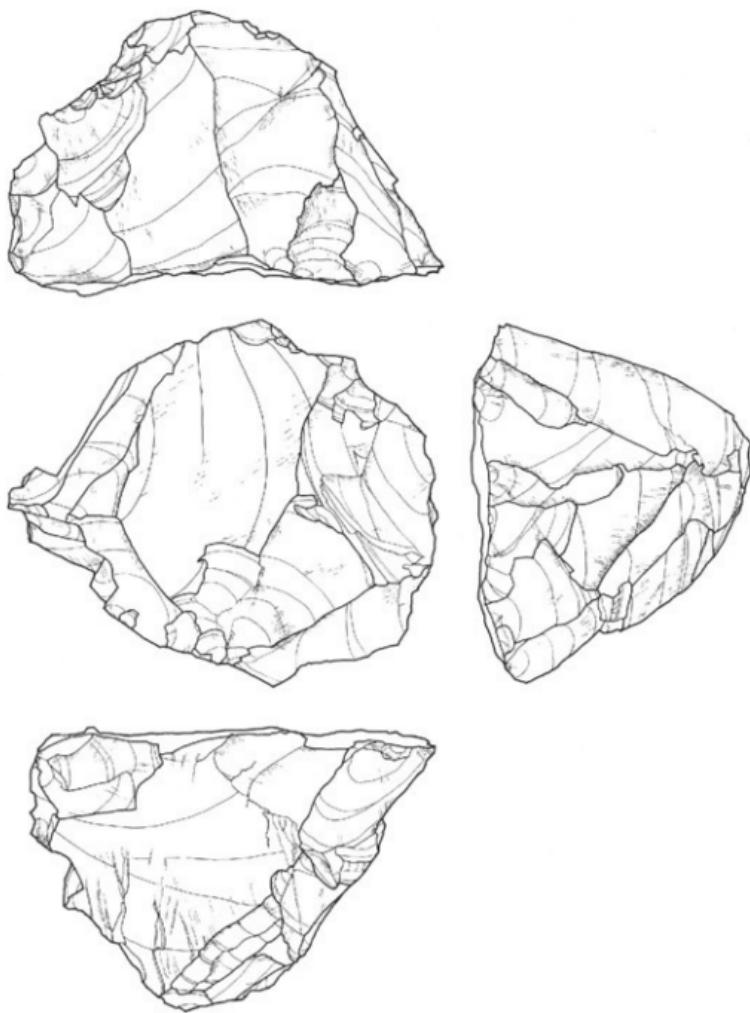
第41図 磨製石斧実測図 (縮尺1/2)

D. 石核

第42図は昭和40年に公園内に休憩所と便所が設置されたときに採集され、その形態と付着していたといわれる黄色土から、旧石器時代の石核とされていたものである。今調査中にその採集時の模様を詳しく聞くことができた。それによれば、この石核は掘り上げられた土中から発見され、周囲の土は黒土であったこと、その後1ヶ月半ほどの間雨ざらしになっていたのを再び発見し、仙台市教委に届けられたとのことである。この石核の発見の経緯は以上のようにあり、その出土層位は不明である。

形態は円錐形を呈し、旧石器時代の石刃技法による石核に酷似する。打撃面となった平坦な面は他の剥離面とは風化の度合が異っている。打撃はこの平坦面を打撃面としてほぼ全周をめぐるように行われ、その後その剥離面を打撃面として、平坦面に剥離が施されている。また、平坦な面を打撃面として剥離した大きな剥離面を打撃面として剥離が施されている。個々の剥離面は大きさがバラバラであり齊一性がない。石質は茶褐色の頁岩である。

以上のことから、この石核は旧石器時代のものとする根拠をもたず、どちらかといえば縄文時代に所属する可能性が高い。



第42図 石核実測図 (縮尺2/3)

5. まとめと考察

(1). 遺跡の形成年代と構成について

三神峯遺跡の調査は遺跡の存在が古くから知られている割りには進展せず、今回の調査を含めても、遺跡全体のごく一部が明らかにされたにすぎない。従って、これらのデータから、遺跡全体の構成を想定することは先ず不可能に近い、といってよい。しかしながら断片的ではあるが、これらの調査データに加えて、表面採集によるデータなどから判断して、いくつかの本遺跡に関する傾向を探ることができる。

① 繩文時代前期初頭の集落としてのあり方

これまで本遺跡に関する正式の発掘調査は過去4回にわたって実施されている。(A～C地点および富沢窓跡) このうち表面採集ならびにA～C地点における調査によって、特に本遺跡を色濃く特色づけるものとなったのは、縄文時代前期初頭の遺物包含層および竪穴住居跡群の発見であった。竪穴住居跡は合計7軒発見されているが、いずれも縄文前期初頭のもので、しかも限定された調査範囲にかなり濃密な分布状態で確認されているため、遺跡全体を考えると、密度の差を考慮に入れても、かなりの数の住居跡が埋蔵されていると考えてよい。こうした状態は、昭和46～47年に宮城県教育委員会の調査でその実態が明らかにされた名取市今熊野遺跡の内容とかなり類似するもので、市内はもちろん、県内でも、縄文前期初頭の集落としては屈指の規模のものということができよう。今のところ、住居跡の分布は、遺跡北東部(つまり丘陵北東縁辺)において知られているにすぎないが、この分布が全体的にどのようなあり方を示すものかは全くわからない。表面採集による遺物の分布範囲としてはほぼ遺跡全域にわたり、量的に縁辺部がやや多い傾向を指摘できるか、発掘調査実施地点の結果を見ても遺物の出土量と、住居跡の地点が必ずしも一致しないため、遺物の分布から遺構分布の傾向を探ることはあまり適切とはいえない。

住居跡の内容は、後述するように形態構造的に、いずれもきわめてよく類似した特徴を有しており、ほとんどが同時期ないし近接した時期のものといってよい。その年代については、3号住居跡床面出土の炭化物の放射性炭素による年代測定結果ではB.P.5840年前後とされたが、土器型式的には住居跡床面出土の土器が稀少なため厳密に型式名を比定することはできなかった。住居跡以外の墳墓等の遺構は、今のところ全く発見されていない。

② 縄文前期初頭以降のあり方

本遺跡における縄文前期初頭以降のあり方を示す遺構は、今のところほとんど確認され

ていない。出土遺物としては、縄文前期後半（大木4～5式）の上器片や、土師器、須恵器などの平安時代の遺物が住居跡確認面よりも上の層から発見されている。従って、これらの時期の遺構が本遺跡において形成されている可能性は十分に考えられる。また、昭和49年度の丘陵西南斜面での調査では、埴輪窓が発見された他、付近から瓦や鉄滓などが表面採集されている。従って、古墳時代から平安時代ごろまでにかけての生産遺構が、三神峯丘陵南側斜面一帯にわたって形成されていたことが推定される。

丘陵北側斜面では、横穴群の形成が見られる。丘陵の西側には高塚古墳が2基残存している。この古墳の実態は未解明であるが、古墳時代には墳墓地としての利用が本丘陵においてはなされていた可能性が強い。

いずれにしろ本遺跡においては、時代的にみても遺構の種類という面から見ても、多種多様な内容が見られ、長期的な歴史の流れにおいて常に、本遺跡が地域的に中心的なあり方を示していたと考えられる。

(2) 穫穴住居跡の様式比較について

—名取市今熊野遺跡発見住居跡との類似性について—

三神峯遺跡ではこれまで8軒の竪穴住居跡が確認してきた。それらはいずれも構造様式が類似し、ほとんど近接した時期—縄文前期初頭（大木1式～2a式期）のものと推定された。宮城県内はもとより、東北地方全般にわたってこの時期の住居跡の発見例はきわめて少なく、比較検討の材料に乏しい。しかし、今回の調査以前の昭和46～47年に宮城県教育委員会によって調査が実施された名取市今熊野遺跡は、当時東北で最初の方形周溝墓群の発見となられており、縄文前期としては日本最多の住居跡群の発見によって大きく注目されていたが、それらの住居跡が三神峯遺跡発見の住居跡と様式上きわめて類似することが判明した。

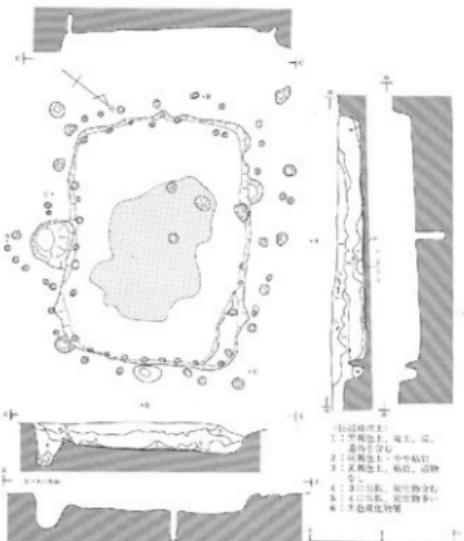
① 住居跡の形態・規模

形態はいずれもやや細長い隅丸方形である。規模および長幅比について若干のちがいがそれぞれ見られるが様式の差違に影響するほどのものとは思われない。

② 柱穴配置

きわめて特徴的なのは、どの住居跡からも、床面中央部付近に径10cm前後の円形で、深さ50cm程の深い主柱穴を1基有し、周壁沿いに径数cm、深さ5cm前後の浅い小壁柱穴を20～30cm間隔で点々と配している点であり、さらに住居跡の一辺の中央部付近に（多くの場合、住居跡東辺）外側にとびだしたような状態で、径50cmの平面円形、深さ50cmほどの底面が丸い大型ピットを必ず有することである。このような柱穴配置からどのような上部構造が想定できるであろうか。中央部の深いピットが中心柱であることはまちがいのないところであろう。このピットの底面は、三神峯遺跡の場合、ローム層を貫いて堅固な疊層に

まで達している。壁柱穴は直立するものが多く、深さも浅く小さい点などから桁梁に直接関連



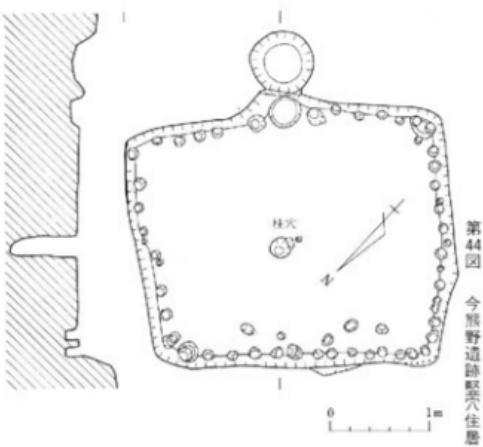
第43図 三神峯遺跡堅穴住居跡

するとは思われない。住居跡東邊に張りだした大型ピットは埋土が水平堆積状態を示し柱底を何わせるわけでもなく、ピットの形態からしても柱穴ではなく、貯蔵穴様のものと考えられる。こうしてみると、堅穴内部のピットだけから上部構造を想定することは難かしく、桁梁に関する堅穴外の柱穴の存在が前提となってくる。もしそうでないとするならば、桁梁をもたないきわめて簡易な、あるいは最も初現的な上部構造を想定しなければならない。三神峯遺跡では堅穴外でも柱穴と考えられる多数のピットが発見されているが、一方で、全般に堅穴の深さが深い。

(最高90cm) いうことが簡易な上部構造を補っているということも考えられる。

③ 埋土、遺物の出土状態

住居跡の深さは一定していない。検出面を基準にすると、三神峯遺跡では最も深い2号および6号(昭和48年度調査)住居跡で90cm、最も浅い1号住居跡の場合は10~15cmで差がある。今熊野遺跡でも同様の傾向が指摘できる。ところで、これらの埋土に共通して認められたのは、上部に焼土、



第44図 今熊野遺跡堅穴住居跡

炭および土器片、石器などの遺物を多量に含むのに対して下部には床面に至るまで全く対照的にほとんど遺物を含まないことがある。上部の埋土は断面から見ると橙赤色の焼土を厚さ10cm前後、幅1mほどにわたってレンズ状に含むが、硬化して焼面を呈している状態は見られず、機能的に炉を想定することは難かしい。この焼土帶の上下層は焼土粒をシモツリ状に含む黒褐色土で遺物も比較的多い。中下部の埋土は一変して地山に類似した粘質の暗黄褐色土で、中には特に深い住居跡の場合は層状を呈することなく、人為的に埋められた形跡も認められた。床面からは、前述のとおり、遺物の発見もほとんどなく焼面や炉のような施設も全く発見されなかったが、中央部を中心として炭の分布（厚さ1～2cm）が認められた。焼土は全く見られず、植物がそのまま炭化したと考えられる。

三神峯遺跡と今熊野遺跡は、仙台市と名取市の境を東西に流れる名取川をはさんで南北に相対する位置にある（第1図）。前者は、名取川北岸から2.3キロ、最高標高67.5m、総面積約80,000m²の東南に突出した舌状台地上にある。後者は、名取川南岸から3.3キロ、最高標高51.9mで総面積約100,000m²の東へ突出した舌状台地上にある。沖積平野との比高はいずれも約40mである。両遺跡の住居跡の様式の類似は、このような立地環境の類似を背景としており、両遺跡の有機的関連が想定される。両遺跡の住居跡が名取川を中心とする局地的様式なのかあるいはさらに広範な文化圏にわたる様式なのかは今後の類例の増加に期待しなければならない。

（3）遺物の考察

A. 繩文土器

1. 東北地方南部における縄文時代前期初頭の編年研究の現状

東北地方南部において、現在のような縄文時代の編年を確立したのは山内清男である（山内1937）。この小論では山内の設定した型式の内容の理解を中心として、他の研究者のそれらの型式に関する認識を明らかにすることを目的としている。

山内によって、縄文時代早期末に楓木1式、楓木2式、前期初頭に室浜式、大木1式の型式が設定された。それらの内容はまとまって發表されていないので、不明であると言わざるを得ないが、各種文献に散見されるものをみると次のようになる（山内 1929・1937）。

楓木式とは、柴田郡柴山町所在の楓木貝塚出土の土器群を標準としている（註1）。薄く、繊維の混入のない、又は著しくない、縄文がなく「櫛齒状刺痕」のあるものを楓木1式とし、粗大で厚く、繊維が混入され、内面には条痕があり、外面には縄文が施文されたり（されないものも相当ある）、「刺痕列文様」、「細隆線文様」、「口端の点列」があるものを楓木2式とした。室浜式とは、桃生郡鳴瀬町所在の室浜貝塚出土の土器群を標準として、大木1式よりも厚手で、大形、底は平底のものもあるが、底部と体部との境界は大木1・2式ほど明確ではないものである。体部にはほとんど斜行縄文があるが、撚糸住痕や竹管による文様も存在する。大木1

式とは、宮城郡七ヶ浜町に所在する大木圓貝塚出土の土器を標準とし、隆帶がなく、不整撫糸文、ループ文、正整な撫糸を押したものである。「竹管条痕」がまれにあり、縄文は帯状縄文、斜行縄文であり、底面にもしばしば縄文がみられるものである。

山内の示した編年の大要はほとんど変化はしていないが、その型式の内容についてはしだいに明らかにされてきた。すなわち、1951年に加藤孝は柴田郡栄田町に所在する上川名貝塚の発掘を行い、出土した土器を2群に分類した（加藤 1951）。下層の土器群は楕木2式に属するものであり、アルカ属の貝殻条痕を有し、尖底で胎土に纖維を含むものである。上層の土器は、羽状縄文を全表面に施すか、あるいはそれを地文とし、竹管文や撫糸文等の装飾文があるものであり、胎土に多量の纖維を含み、底部は丸底あるいは丸底風揚底である。この上層の土器群を、室浜式との前後関係は不明であるとしながらも、縄文時代前期初頭、関東地方の花積下層式に併行するものと位置づけた。これ以後前期初頭の土器群は室浜式にかわって上川名II式あるいは、上川名上層式の名称が一般化した（註2）。また加藤は船入島貝塚出土の土器群を三類に分けた（加藤 1960）。第1類は、平底の深鉢で、ループ文、羽状縄文、撫糸文をもち、底部は無文の土器である。第2類は、平底円筒深鉢型の土器で羽状縄文を主とし、底面に中心部からの放射状縄文があるものである。第3類は丸底の羽状縄文深鉢形纖維土器である。第3類は上川名II式に、第1類は大木1式に併行するものとし、第2類土器はそれらの間にに入るものと位置づけた。一方林謙作は、上川名II式と大木1式の間に柱島式を提唱した（林 1960）。柱島式とは、器形は単純な深鉢形か、口縁が斜く外反する深鉢形で、底部は丸底ないし尖底、丸底風平底、丸底風小揚底などで一定していず、多くは平縁で胎土には纖維を多量に含むものである。文様は原体の短かい羽状縄文が圧倒的で、結束の有無を問わず拂りの異なる2本の原体を使用したものが大部分を占める。底部には半截竹管の角ばった串状工具による刺突文が施文されるのが特徴である。この柱島式は「どちらかといえば上川名II式に近く、大木1式に遠い」（P25）もので、口縁部文様帯が存在しないこと等から上川名II式から分離され、1つの型式とすべきであるとしている。そしてさらに柱島式と大木1式の間に三神峯III式（註3）なる型式を、三神峯遺跡においては「大木1式よりも下層に、ほとんど純粹な形でふくまれていた」（P26）ことを根拠として提唱した。そしてこの三神峯III式を設定することにより、柱島式から大木1式への移行をよりスムーズに説明できるとしている。その内容は、器形は截頭円錐形状の深鉢が多く、底部は丸底風平底にタガ状に粘土帶を貼りつけて安定させたものか、心持揚底気味の平底で、いずれも縁が外方に突出し、底面には縄文の施文がみられるものである。また複合口縁・口唇部の刻み目は存在せず、胎土には纖維の他に石英砂・長石などが多く多量に含まれる。文様は単斜行縄文、あるいは雑然とした複方向斜行縄文が主体であり、羽状縄文は結束された原体によるものは皆無に等しく、原体は大木1式とほとんど同様、節の長径4.5mm程度、

条の長さ40mm前後のものが多いとしている。

一方、大木1式については、加藤（1960）、伊東信雄（1950）、興野義一（1967）らの解説がある。伊東によれば、上部の開いた円筒形揚底風の深鉢が大部分で、口縁部は大きく波うち、ループ文をはじめとして種々の繩文が施文されたものであるという。興野によれば、地文は単節、まれに複節の結束のない羽状繩文であり、装飾文としてはループ文と不整撚糸文が口縁に付され、ループ文がくすれて不整撚糸文に近いもの（註4）と組紐回転文が地文としてあり、揚底風の平底にはしばしば体部と同じ施文がみられ、ゆるい波状口縁を呈するものがある土器群が大木1式であるとしている。

しかし近乍、宮城・福島・山形県内では以上のいずれの型式内容とも異なる土器群が発掘されている。福島県相馬郡小高町所在の宮田貝塚出土の第III群土器（竹島1975）（註5）や、山形県大石田町庚申町遺跡の土器群（註6）等である（註7）。宮田III群土器は、口縁部に繩の側面圧痕文・ループ文・竹管文等による刺突文の幾何学的文様帶を構成したり、刻み目、突起、隆帯をもつもの、あるいはもたないもの等様々なバリエーションをもち、底部にはループ文・繩文・組紐文や刺突文が施され、完全な平底のものである。一方、中島によれば（中島1975）庚申町I群土器には、直線化した撚糸压痕や撚糸文・ループ文・竹管文があり、平底のものと丸底のものがある。宮城県桃生郡鳴瀬町所在の金山貝塚出土の土器群は、撚糸压痕文・竹管文・瓜形文・ループ文等の装飾文様を有し、尖底や丸底気味の小さな平底のもので、刺突が施されたものもある。これらの土器群には、三角形状に無文部を残す手法や底部に刺突のある土器の存在、ループ文の存在等の共通点がある。一方、石巻市南境貝塚妙見地区出土の土器群は、羽状繩文原体の条の長さ30mm前後、節の直径は5~6mmと粗大なものが多く上川名II式に類似するが、条・節とも短小な株島式的な羽状繩文が共存し、口縁部・複合口縁上の文様帶は存在せず、丸底で纖維の混入の多いものである。

三神峯遺跡に関しては、1967年に宮城教育大学日本史研究会によって発掘調査が行われ、その成果が公表されている（白鳥 1974）（註8）。それによれば、第II層土器には羽状繩文・斜行繩文・ループ文の他に条の短かい羽状繩文・口縁部に刻目のある土器があり、底部は大部分が平底であるが丸底のものも2点出土している。第II層土器は羽状繩文やループ文が多用され、異条斜繩文、組紐回転文、結節回転文等も存在する。器形は器高20~25cm程の口縁部が直立する屈曲の少ない深鉢形を呈するものが多い。底部はすべて平底で、底面に繩文が施文されるものは約60%を占めている。第I層土器は地文として羽状繩文、斜行繩文があり、各種の撚糸文、竹管文等も存在する。器形は口縁部が直上するかやや内側する深鉢形で、底部は平底であるが

縄文施文のものや底縁が外側へ張り出すものは少ない。これらの土器群は、第III層土器は上川名II式・柱島式の両型式と併行関係に、第II層土器は大木1式に、第I層土器は大木2a式にそれぞれ編年的に位置づけられている。

以上概略的ではあるが縄文時代前期初頭の土器群を紹介してきた。これらのうちで、本遺跡と密接なかかわりを有するのは、林によって三神峯III式と仮称された土器群である（林 1960）。この土器群は三神峯遺跡の小発掘の所見により抽出されたとされているものである。ところが白鳥によれば（白鳥 1974）、三神峯遺跡においては、三神峯III式的土器は第II層土器に含まれるもので、「林氏が三神峯III式と仮称している土器を含む第II層土器全体をひとまとまりの土器群として大木1式土器に比定されるもの」（P35）としている。今回の調査においても、後述するごとく、三神峯III式とされる土器は第2b層出土の土器の一部と共通するものであり、三神峯III式的な土器を層位的には確認できなかった。したがって、現時点においては、白鳥の指摘のごとく、三神峯III式は大木1式に含まれるものと理解しておきたい。

註1 松崎貝塚と呼ばれることもある（加藤 1952）。

註2 これとは別に、室浜式は桂島式に併行するものとする考え方もある（瀧見 1973）。

註3 船入島貝塚第2類とはほぼ同内容をもつが、量的に多い三神峯遺跡出土遺物をもって、三神峯頭式と仮称しておくとしている。

註4 三神峯遺跡で「変形ループ文」と名づけたものと同一のものであろう。

註5 報告者の竹島国益氏の御好意により実見の機会を得た。

註6 山形大学教育学部歴史学研究会の御好意により実見の機会を得た。

註7 他に同様な土器群を出土した遺跡には、山形県米沢市松原遺跡（真庭 1972、赤塚 1973、瀧見考古学会 1977）、同八幡原N626、N633遺跡（米沢市教委 1975）、同大字原遺跡（手塚、栗、安彦 1972）、宮城県白石市白畑遺跡、同荒井遺跡（白石市史編纂委員会 1975）、同桃生郡鳴瀬町金山貝塚（鳴瀬町教委 1977）、同宮城郡七ヶ浜町左道貝塚（後藤 1973、白鳥 1978）がある。

註8 宮城教育大学の調査時の層位と今回の調査の層位との相違の関係は様々な特徴から、第III層は色調が異なるが今回の調査の第3層と、第II層は第2b層と、第I層は第2a層とそれに対応すると考えられる。

2. 三神峯遺跡出土土器の考察

今回の調査で出土した土器のほとんどが、胎土に纖維を含む、縄文時代前期前半の土器である。ここでは、出土層位ごとに土器をまとめそれらの特徴と編年的位置づけについて考えてみたい。

a. 第3層出土土器・第3号住居跡出土土器

第3層出土の土器は出土数の1割強であり大部分は小破片で、保存状態も概して悪い。したがって器形の把握等は十分ではない。

体部文様は、斜行縄文・羽状縄文が約67%であり、組紐文が約5%ほどを占める口縁部の文様は、斜行縄文・羽状縄文は約40%、ループ文が約18%、組紐文が約19%を占める（第2表）。したがって第3層出土土器の文様の特徴は、口縁部文様として、ループ文、変形ループ文を含む組紐文があり、地文としては、斜行縄文、羽状縄文があり、組紐文が少数伴うことである。

また、口縁部に撫糸文や竹管文が施された土器が存在する。

底部はすべて平底であるが、底縁が外側に張り出すものが比較的多い。また底面に竹管による刺突が施されているものも存在する。器厚がやや厚く繊維の混入度も第2a層出土土器や第2b層出土土器に比して相対的に多い。

第3号住居跡出土の土器は、斜行縄文・羽状縄文が約74%を占め、ループ文が7点、撫糸文が5点、竹管文が2点、組紐文が3点あり、不明のものが約20%ある。これらの土器と第3層出土の土器は、撫糸文・竹管文が施された土器が存在すること等共通性が強い。したがってここでは、両者をひとまとめのものとしてとり扱う。

ここでいう撫糸文とは第2a層の撫糸文と異なり、撫糸の側面が押圧されたものである。撫糸の側面を押圧する土器は、從来上川名式に特徴的にみられるものとされてきた。一方、大木1式とされる土器群にはこのような土器は存在しない（奥野 1967、白鳥 1974）。また、底部付近から底面にかけて竹管による刺突が施された土器は、縄文時代前期初頭に限って存在し、大木1式期には存在しない。一方、宮城教育大学の調査によって検出された第III層土器と比較すると（白鳥 1974）、ループ文や斜行縄文・羽状縄文の施文状態等共通する要素が多い。しかしながら、第3号住居跡出土の土器や第3層出土の土器、第III層土器はいずれも出土数が少なく、小破片のため全体として不明の部分が多い。したがってここではこれらを一括して、大木1式より以前の縄文時代前期初頭の土器としておきたい。

b . 第2b層出土土器

第2b層出土の土器は、体部文様として、斜行縄文・羽状縄文が約63%を占め、その他の文様はほとんど存在しない口縁部文様は斜行縄文・羽状縄文が約68%、ループ文が17%であり、変形ループ文を含む組紐文が第3層土器に比べて6%と減少する。（鉢1）（第2表）。したがって第2b層出土土器は、口縁部文様としてはループ文があるだけであり、斜行縄文・羽状縄文の文様構成に占める割合が第3層出土土器と比べて増加する。また羽状縄文は、RLとLRを同じ段に交互に、あるいは一段おきに帶状に施文するものが圧倒的に多く、結束のあるものや、1本の原体によって施文された羽状縄文はほとんど存在しない。原体の長さは3cm前後、節の大きさは3mm前後が多い。器形は、器高20cmほどの屈曲の少ない土器が一般的であるが、大形のものには体部に膨らみを持ち、頸部でしまりをもつものがある。口縁は平坦なもの、波状のもの、山形の突起をもつものがある。底部には縄文が施されたものが30%ほどあり完全な平底であ

る。底縁が外側に張り出すものは半数以上ある。このような土器は白鳥による第II層土器と同様のものであり、大木1式とされている（白鳥 1974）。

一方、白鳥による第II層土器の羽状繩文は、1本の原体で同一の段内において縦方向と横方向に施文し菱形を形成するものが多く、次いで結束のあるもの、次にLRとRLを使用するものが多いとされたが、今回全く逆の結果となった。すなわち第2b層出土土器の羽状繩文は、LRとRLの2本の原体を同一の段内においても交互に横に回転施文したものが大部分で、結束のあるものはわずかであり、縦の回転のものは羽状繩文では存在しない。第II層土器の図版等をみるとほとんどが横に回転されていることから、第II層土器の1本の原体による羽状繩文とされたものは、捺りの異なる2本の原体を横に回転したものと考えられる（註1）。

したがって、大木1式の羽状繩文は、捺りの異なる2本の原体を横に回転することによって施文され、2本の原体間に結束のあるものは少ないという特徴をもつものである。

註1 白鳥氏も現在では横の回転によるものと考えている旨、御教示を得た。

c. 第2a層出土土器

第2a層出土土器は、体部文様としては、斜行繩文・羽状繩文が約49%、捺糸文が13%、組紐文が約6%となっている。口縁部文様としては、斜行繩文、羽状繩文が約42%、ループ文約5%、捺糸文約16%、竹管文約9%、組紐文約8%となっている。

これらの土器には、竹管文、ループ文等が口縁部にのみ施文され、地文としては斜行繩文、羽状繩文が多く施されている。捺糸文は口縁から底部まで施文されるものと、口縁部にだけ施文されるものがあり、後者のほうが多い。底部に繩文が施文される割合は約25%であり、底縁が外側に張り出す土器は少ない。捺糸文には、木目状捺糸文、瓦瓦状捺糸文、網目状捺糸文等の種類があり、瓦瓦状捺糸文がやや多いようである。竹管文としたものには、半截竹管、円形竹管による平行沈線文、押し引き文、櫛齒状工具による刺突文や波状文などがある。胎上には纖維が混入されるが、相対的に少なく、ループ文、斜行繩文、羽状繩文等は、第3層出土土器、第2b層出土土器に比べて退歩的である。このような土器は、白鳥による第I層土器と同じであり、大木2a式に比定される。

なお興野（興野 1968）は、大木2a式には結束のある羽状繩文が増加すると指摘しているが、今回の調査ではそうした傾向は見られなかった。

また興野によれば（興野 1967・1968）、宮城県登米郡迫町所在の藤塚貝塚の所見をもとに、大木2式にはループ文や帶状の繩文は全く存在しないとされているが、三神峯遺跡においては、大木2a式にもループ文を伴う羽状繩文が存在する。一方、宮城県桃生郡失木町所在の平田原貝塚出土の土器群は大木2a式に比定されており、第2a層出土土器とほぼ同一の内容をもつものであるが、この土器群にはループ文が存在することが報告されている（塙釜女子高社会部 1969）。

したがって、同貝塚報告書で指摘されているように、大木2a式土器にもループ文が存在すると考えられる。

以上、三神峯遺跡出土土器は、第3層出土土器と第3号住居跡出土土器は前期初頭の大木1式より以前の縄文時代時期に、第2b層出土土器は大木1式に、第2a層出土土器は大木2a式に比定されることを指摘した。

注1 变形ループ文がどの時期に出現するのかは不明であるが、大木1式には確実に存在し、平田原貝塚（第IV類土器）（滋賀女子高社会部 1969）にも認められることから、大木2a式までは存在したようである。

B 石 器

石器は生産用具であり、人間が様々な生産活動を行えば、当然石器は様々な組合せとなって存在する。したがって、これら生産活動の発明には石器を絆としてとらえる方法が必要である。一方、個々の石器がどのような役割を果したのかが理解できなければ、有機的関連を有するはずの生産活動の発明は不可能である。それ故、現在、早急に明らかにされねばならないのは、種々の石器がどのような機能を有していたのかということであろう。

石器は、人間が使用しようと意図し、製作したものであるから、ある程度はその形態に人間の意図が表わされているはずである。特に、石器が定形的な形態を有している場合にはそれが顕著であろう。しかし、発掘によって我々の目前に出てくるものは、素材から完成品、そして使用による破損品に至るまでの様々な段階のものである。石器研究には、石器がどの段階に属するのか、という検証はつねになされなければならないし、人間の意図が石器に反映していく段階としての製作技術の正確な復原なしにはそのような検証は不可能であろう。

ここでは、以上のような点を基本にして、石器に関する若干の考察を述べてみたい。

今回発掘された石器は、土器の分析から大部分が縄文時代前期前半に属するものであり、ここではすべて一括してとり扱うこととする。

I. 刃 片 類

総数1,163点出土。これらのほぼ1割に自然面が認められるが、剥片の背面が自然面すべて覆われているものはほとんど存在しない。また、石核の出土は極めて少ない。さらに、剥片と定形的な石器の大きさの分布はほとんど一致せず、剥片の縦・横とも3cmを中心とするまとまりの外側に、トゥール類のそれぞれのまとまりがとりまくように存在する。また、磨石、凹石等にも敲打痕の認められるものは少ない。

以上のことは、三神峯遺跡においては、剥片の剥離作業は行なわれず、手頃な剥片を選んで遺跡内に持ち込まれたと考えられる。剥片類がほぼ同じような大きさと形態を示すこと、こ

の選択と持ちこみを裏づけるものといえよう。また、チップやスポール、定型的な石器の未成品がほとんど出土しなかったことから、定型的な石器は加工されて持ち込まれたものとも考えられるが、今回の調査は三神峯遺跡のごく一部についてのものであり、これらのことことが遺跡全体の傾向を示すものかどうかは定かではない。

2. 石 錐

定型化した石器の中で量も形態も豊富なのは石匙である。それらは、その製作方法において強い齊一性がみられる。それは、打撃面がかなりの数の石匙につまみとして残っており、また剥片の先端につまみを作出している場合には、ヒンジフラクチャー等をおこしたものを利用し、打撃面側を利用したものと同様の効果をねらっている。すなわち、つまみの部分は、剥片の厚みがある部分に作り出されるということである。また主要剥離面側に施される加工は、つまみと側辺部への肩の部分のみであり、側辺部には加えられない。一方、秦は縄文時代早期末～前期初頭にかけて出土する特徴的な石匙が存在する（米沢市教委 1975）ことを指摘している。また、保角は山形県庚申町遺跡において、「庚申町型石匙」という、左側辺の中間付近にくびれをもち、くびれ付近のバルブを刃漬しするという特徴的な形態・製作技法を有する「庚申町型石匙」の存在を指摘している。これも前期初頭に限って出土するらしい。三神峯遺跡からは、そのような特徴を有するものは出土していない。したがって、大木I式の直前の時期に、半片面加工石匙→片面加工石匙という変化があったようであり、縄文時代前期前半は石匙の一つの完成期であったと思われる（註1）。

現在石匙の機能としては、捕獲動物の解体・処理に用いられたと考えられている。一方、楠本によれば、つまみの執りを利用したりすると、骨角器の製作にも威力を發揮し得る工具だとのことである（楠本 1973）。またつまみに柄をつけて刺突具としても利用（十肥 1971）されたとする考えがある。宮城県山王遺跡ではつまみに繩がついたまま出土しており、縄文時代後、晩期にはつまみ部分にアスファルトが紐状に残されている例が見られることからつまみには紐や繩がまきつけられていたとする考えは有力である。

3. 石 盆 等

石鍤、石槍、石匙等の多さと共に、石皿、凹石、磨石、礫等の豊富さも注目すべきであろう。特に破片を含めてではあるが、石皿の27点は縄文時代前期としては特筆すべきである。

石皿、凹石、磨石等は一般に植物質食料の処理用具とされており、凹石には様々な用途が想定されているが、現在のところクルミ割り具説（渡辺1975・武藤1965・1968）が最も妥当であろう。一方、橋口（橋口 1977）は、特徴的形態をもつ敲石と台石に注目し、民俗例からトチの実等の種皮剥ぎの用途を想定している。敲石は長い年月使用すると消耗痕が残り、短期間の使用では痕跡は残りにくいとのことである。遺跡内にある礫にも十分注意を払うべきだろう。

また、本遺跡出土の磨石には断面の形が長楕円形や三角形の礫を素材とし、その幅の狭い部分に磨痕が残されたものがかなり存在する。これらは八木によって定義された「特殊磨石」に類似する（八木 1977）。特殊磨石は中部地方において押型文土器群と非常に強く共伴すること、関東地方では撚糸文、沈線文土器群に伴い、北海道では縄文時代早期に存在することが八木によって指摘されている。近年、東北地方でも宮城県岩出山町座敷丸本遺跡において縄文時代早期木葉の上器とともに検出されている。また報告書の図版等でみると、岩手県沢内B遺跡、山形県松原遺跡・凌申町遺跡・小林遺跡などでも出土している。本遺跡出土の特殊磨石はこれらの中では新しい時期に属するものである。用途に関しては、獸皮なめし工具説（中村 1965）、落葉広葉樹林帯に産する植物資源の処理用具説（八木 1977）等があるが、現在までのところは不明といわざるを得ない。

三神峯遺跡では狩猟具とされる石鏃、石槍等が数多く出土しており、狩猟活動の活発さをうかがわせるが、それと同時に、植物質食料の採集・加工も活発に行なわれていた（註2）。これは三神峯遺跡が集落跡であり、遺跡内で生活がある程度完結していたからであろう。

本稿は昭和52年度に東北大学に提出した卒業論文を書き改めたものである。この稿を書くに際しては、東北大学文学部芹沢長介先生をはじめ、白鳥良一氏、岡村道雄氏、東北大学文学部考古学研究室の方々から貴重な御指導、御助言をいただいた。文末ではあるが、記して感謝の意を表すものである。

註1 東日本においては、縄文時代中・後期より、所謂「横型」石匙が多くなるとされる。また、中部山岳地帯では縄文時代中期には粗大なものが主体となり、関東や西日本では一直して「横型」石匙が主体的であるという。したがって、縄文時代前期後半期から中期にかけて、石匙はしだいに「横型」が多くなり、汎日本的に分布するようになる。これがどのような理由によるものか不明であるが、石匙の機能を考える上で重要な変化であろう。

註2 植物質食料の加工・処理用具は存在するが、直接採取する用具が明らかになっていない。関東、中部地方では打製石斧があげられるが、東北地方には、それは乏しいとされてきた。しかし、近年石斧をも含めて打製石斧として分類しているものがある（保角 1973）。しかし、打製石斧は機能がはっきりしており、東北地方の石斧あるいは鉋状石器は、機能の実証的な解明を経た後の打製石斧への分類ではない。今後、石器群の総体的な見直しの過程で、植物質食料獲得の直接生産用具を規定していかねばならぬし、木器や骨角器にも注目すべきであろう。

引用、参考文献目録

- 1925、中谷治宇二郎、石匙に対する二・三の考察、人類学雑誌40卷4号、PP144~151
- 1929、赤堀英三、石器研究の一方法、人類学雑誌44卷3号、PP87~105
- 1929、山内清男、関東北に於ける織維土器、史前学雑誌1卷2号、PP117~146
- 1929、山内清男、斜行縦文に関する二・三の考察、史前学雑誌1卷2号、PP187~189
- 1929、山内清男、織維土器について追加第1、史前学雑誌1卷3号、PP271~272
- 1930、山内清男、織維土器について追加第2、史前学雑誌2卷1号、PP73~75
- 1930、松本彦七郎、陸前国名取郡西多賀村の三石器時代乃至直後遺跡、考古学雑誌20卷2号、PP1~17
- 1930、斎藤 忠、松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報(上)東北文化研究第2卷4号、PP83~100
- 1935、八幡一郎、奥羽地方発見の籠状石器、人類学雑誌50卷5号、PP196~200
- 1936、角田文衛、陸前船入島貝塚の研究、考古学論叢第3集、PP255~274
- 1937、山内清男、織紋式土器型式の大別と細別、先史考古学第1卷1号、PP29~32
- 1950、伊東信雄、三神峯石器時代遺跡、仙台市史3別編1、PP6~10
- 1951、加藤 孝、宮城県上川名貝塚の研究、宮城学院女子大学研究論文集1、PP183~199
- 1952、加藤 孝、阿武隈北上両河岸段丘並に松島湾岸諸島に於ける貝塚の分布とその編年、宮城学院女子大学研究論文集2、PP213~237
- 1956、川崎利夫、山形県東村山郡山寺村上荒谷縄紋前期遺跡、山形大学史学研究1、PP53~62
- 1957、伊東信雄、古代史、宮城県史1、PP3~165
- 1957、佐藤達大他、青森県上北郡早稻田貝塚、考古学雑誌43卷2号、PP35~58
- 1959、鎌木義昌、広域文化圏の形成—縄文前期文化、世界考古学大系1日本I、PP61~77
- 1960、加藤 孝、考古学上より見た塙釜市周辺の遺跡、塙釜市史VI別編1
- 1960、林 謙作、宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群、考古学雑誌46卷3号、PP20~32
- 1961、上野佳也、有柄石匕試論 考古学研究8卷2号、PP24~30
- 1962、林 謙作、山形県野山遺跡の土器、考古学雑誌47卷4号、PP68~70
- 1963、佐藤信行、山形県村山地方における縄文前期土器の概観、村山考古8号、PP1~17
- 1963、上野佳也、東日本縄文文化石器の大きさについての比較研究、考古学雑誌49卷2号、PP107~120
- 1963、藤森栄一、縄文中期における石匙の形態的変化について、考古学雑誌49卷3号、PP35~43
- 1964、澄田正一、濃飛山地に分布する石皿の機能について、名大文学部研究論集32、PP33~52

- 1965、中村竜雄、中部山岳地帯における縄文早期の磨石様石器について、立正考古24、PP 6
～9
- 1965、藤森栄一、生産用具としての石器、井戸尻、PP145～150
- 1965、林 謙作、縄文文化の発展と地域性－東北、日本の考古学II、PP64～96
- 1965、武藤雄六、長野県大畑遺跡第3次調査、長野県考古学会誌3、PP39～55
- 1966、竹島国基、花輪遺跡 日本考古学年報19、PP93～94
- 1967、奥野義一、大木式土器理解のために(1) 考古学ジャーナル13号、PP16～18
- 1968、奥野義一、大木式土器理解のために(2) 考古学ジャーナル16号、PP22～25
- 1968、澄田正一、濃飛越山地に出土する石皿の研究、名大文学部研究論集20周年記念論集、PP
37～49
- 1966、武藤雄六、海戸一生产用具の変遷と背景、長野県考古学会研究報告書4、PP88～92
- 1969、宮城県教育委員会、南境貝塚、宮城県文化財調査報告書20集
- 1969、小井川和夫、大木2a式にみられる横尚文について、宮教考古第1号、PP14～20
- 1969、宮城県塩釜女子高等学校社会部、宮城県桃生郡矢本町平田原貝塚調査報告書、貝輪5号
- 1969、清野謙次、陸前国宮城郡七ヶ浜村大字要害字大木園貝塚、日本貝塚の研究、PP416～425
- 1969、渡辺 誠、縄文前期文化－東日本、新版考古学講座3、PP69～82
- 1969、林 謙作、第3地点第4文化層の出土遺物－剣片、星野遺跡－第3次発掘調査報告、PP
61～67
- 1970、竹島国基、相馬、双葉地方の縄文前期の土器、福島考古11号、PP 1～14
- 1970、木村剛郎、縄文時代における機能上の実験(1) 考古学ジャーナル43号、PP23～26
- 1970、村田文夫、関東地方における縄文前期後半期の生産活動について、古代文化22卷4号、
PP75～88
- 1970、木村剛郎、縄文時代における機能上の実験(2)、考古学ジャーナル50号、PP22～24
- 1971、山内清男、高畠町史別巻考古資料編序文
- 1971、木村剛郎、縄文時代における機能上の実験(3)、考古学ジャーナル54号、PP22～23
- 1971、土肥 孝、石器と石製品 貝塚貝塚、PP56～87
- 1971、宮城県教育委員会、矢塚遺跡、宮城県文化財調査報告書24集
- 1971、秦 昭繁、米沢市松原遺跡概報、さあべい第3号、PP53～60
- 1971、保角里志、村山市河島山にみる大木2a式土器の様相、PP61～68
- 1971、名久井文明、青森県芦野遺跡の土器群について、考古学雑誌第57卷第2号、PP 1～25
- 1972、日下部善己、縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相、福島考古13号、
PP 1～31

- 1972、木村剛郎、実験よりみた敲石とその用途(1)、考古学ジャーナル74号、PP19~21
- 1972、木村剛郎、実験よりみた敲石とその用途(2)、考古学ジャーナル5号、PP20~22
- 1972、真室公一、米沢市松原遺跡発掘調査概報、置賜考古第3号、PP1~6
- 1972、手塚 孝、秦 昭繁、安彦政信、米沢市八幡原周辺の遺跡、置賜考古第3号、PP7~17
- 1973、一条孝夫、縄文時代における労働用具のあり方について、福島大学考古学研究会研究紀要、PP1~63
- 1973、保角里志、大石田町庚申町遺跡の石器について、さあべい第2巻1号、PP7~14
- 1973、小林康男、縄文時代の石器研究史(一)、信濃25巻7号、PP15~61
- 1974、小林康男、縄文時代石器研究史(二)、信濃25巻10号、PP69~78
- 1973、楠木政助、仙台湾における先史狩漁文化、矢本町史第1巻先史別刷
- 1973、企則寺貝塚、今熊野遺跡調査概報、宮城県文化財調査報告書33集
- 1973、邊見綱高、出島山下貝塚—第4次調査概況報告書
- 1973、赤塚長一郎、山形県地方における縄文前期初頭の編年的研究(上)、最上川流域の歴史と文化、PP41~55
- 1973、保角里志、山形県大石田町庚申町遺跡の縄文土器について、山形考古第2巻2号、PP19~28
- 1973、仙台市教育委員会、三神峯遺跡北東部緊急発掘調査概報
- 1974、白鳥良一、仙台市三神峯遺跡の調査、東北の考古歴史論集、PP1~54
- 1974、埼玉県教育委員会、関山貝塚、
- 1974、小林康男、縄文時代生産活動のあり方(一)、信濃26巻12号、PP59~69
- 1975、小林康男、縄文時代生産活動のあり方(二)、信濃27巻2号、PP184~199
- 1975、小林康男、縄文時代生産活動のあり方(三)、信濃27巻4号、PP25~40
- 1975、小林康男、縄文時代生産活動のあり方(四)、信濃27巻5号、PP73~85
- 1975、渡辺 誠、縄文時代の植物食
- 1975、竹島国基、宮田貝塚
- 1975、米沢市教育委員会 No.33遺跡、米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第一集、PP43~51
- 1975、米沢市教育委員会 No.26遺跡、米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第一集、PP52~69
- 1975、小林遺跡調査団、小林遺跡
- 1975、中篠 寛、大石田町庚申町遺跡について、山大史学第5号、PP13~47
- 1975、白石市史編纂委員会、白烟遺跡、白石市史別巻考古資料篇255P

- 1975、白石市史編纂委員会、荒井遺跡、白石市史別巻考古資料篇263P
- 1976、山形県教育委員会、小林遺跡、山形県埋蔵文化財調査報告書第8集
- 1976、森川昌和、山田昌久、繩文前期の石斧柄、ドルメン10号、PP33~43
- 1976、竹島国基、小高町の原始古墳文化と考古資料、小高町史別刷
- 1977、橋口尚武、民俗資料からみた敲石の再検討、ドルメン12号、PP103~113
- 1977、鳴瀬町教育委員会、亀岡遺跡、金山貝塚
- 1977、置賜考古学会、松原
- 1977、高橋雄三、吉田哲大、横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物、調査研究集録第2冊、PP65~99
- 1978、宮城県教育委員会、今熊野遺跡、どるめん16号、PP73~79
- 1977、白鳥良一、宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について、宮城史学第6号、PP40~48
- 1979、七ヶ浜町教育委員会、大木岡貝塚
- 1979、藤田定興、中村五郎、白河地方の古式繩紋土器、福島考古第20号、PP25~42
- 1977、八木光則、いわゆる「特殊磨石」について、信濃28巻4号、PP30~47
- 1977、白鳥良一、宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について、宮城史学第6号、PP40~48
- 1978、宮城県教育委員会、今熊野遺跡、どるめん16号、PP73~79
- 1978、石器文化談話会、座敷乱木遺跡発掘調査報告書I
- 1979、七ヶ浜町教育委員会、大木岡貝塚
- 1979、藤田定興、中村五郎、白河地方の古式繩紋土器、福島考古第20号、PP25~42
- 1979、岩手県埋蔵文化財センター、沢内B遺跡

縄文土器文様構成一覧表

第2表 口縁部文様

出土層位	文様	斜行縄文	羽状縄文	ループ文	撚糸文	竹管文	組織文	無文	その他不明
第1層	層	79	33	34	79	53	31	10	30
第2層	"	26	5	4	12	7	6	2	3
第3層	"	42	14	14	3	1	5	1	10
第2層	"	61	41	26	15	8	10	1	11
第3層	"	23	9	14	5	3	15	1	9
第1号住居跡埋1	1	—	—	1	—	—	3	—	—
" 埋2	—	—	—	—	—	—	—	—	1
第2号住居跡埋1	2	1	—	—	—	—	—	—	—
" 埋2	—	1	—	—	—	—	—	—	—
第3号住居跡埋1	7	3	—	—	1	—	1	—	—
" 埋2	9	5	5	2	—	—	—	—	—
" 埋3	3	1	1	—	—	—	—	—	—
不 明	4	5	3	4	1	4	—	—	3

体部文様

出土層位	文様	斜行縄文	羽状縄文	ループ文	撚糸文	竹管文	組織文	無文	その他不明
第1層	層	934	363	26	429	54	137	44	505
第2a層	"	175	70	1	67	5	29	4	143
第2b層	"	287	132	5	15	1	10	2	210
第2層	"	624	263	25	73	6	43	4	245
第3層	"	319	124	9	21	5	34	3	135
第1号住居跡埋1	6	1	1	4	—	33	1	3	—
" 埋2	3	—	—	1	1	1	—	—	3
第2号住居跡埋1	3	2	—	—	4	1	—	—	8
" 埋2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第3号住居跡埋1	56	24	1	—	1	1	—	—	44
" 埋2	80	41	—	1	—	—	2	—	6
" 埋3	14	4	—	—	—	1	—	—	8
不明	74	28	3	27	4	15	3	—	60

底部文様

	第1層	第2a層	第2b層	第2層	第3層	第1号住居跡埋1	第3号住居跡埋1	第3号住居跡埋2	第3号住居跡埋3
斜行縄文	37	4	10	26	12	—	—	6	2
羽状縄文	9	1	7	12	2	—	—	1	—
無文文	117	20	14	46	25	—	—	—	—
その他不明	39	19	19	28	16	1	3	3	1

第3表

石 錄

図版 No.	形態	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重さ	欠損部位
第3類1	A a	II a	1	24.9	(16.7)	3.1	(1.15)	左基部
20	A b	3住抜	2 a	(18.2)	17.3	3.4	(0.85)	先端
10	A c	I b	2	12.8	14.6	3.7	1.00	完形
11	B a	I a	2	(22.2)	(11.3)	3.4	(0.70)	基部
	B a	C D 抜	2 a	(9.9)	(18.4)	2.8	(0.55)	基部
25	B a	3住抜	2 a	19.7	12.5	5.0	0.95	完形
5	B b	II a	1	(20.3)	15.4	(2.7)	(0.90)	先端
4	"	II c	1	15.8	16.3	3.6	0.55	完形
7	"	VI c	1	(18.8)	16.2	4.1	(1.15)	先端
23	"	BDアゼ	2 a	19.6	14.5	2.3	0.45	完形
28	"	C D 抜	2 b	23.8	15.7	5.5	1.60	完形
27	"	3住抜	2 b	(22.7)	18.3	4.8	(1.55)	先端
17	"	I b	2	16.7	11.7	2.8	0.35	完形
31	"	I c	3	19.4	(13.6)	2.3	(0.35)	左基部
33	"	III a	3	(21.7)	11.8	3.6	(0.80)	先端
6	"	不 明		20.1	15.0	1.9	0.45	完形
2	B c	II d	1	32.6	18.5	3.1	1.15	完形
22	"	C D 抜	2 a	24.3	16.9	3.4	1.10	完形
26	"	II a	2 b	23.9	(17.4)	4.1	(0.90)	左基部
25	"	3住抜	2 b	(18.4)	18.0	3.3	0.90	先端
15	"	I b	2	17.1	15.7	3.2	0.55	完形
12	"	II a	2	21.7	14.6	3.1	0.70	完形
14	"	IV a	2	26.3	17.2	4.6	1.75	完形
13	"	IV b	2	(24.0)	14.4	3.2	(0.65)	先端
16	"	IV b	2	(21.8)	15.4	4.0	(1.05)	先端
第3類5	"	3住	標2	(15.2)	13.6	2.8	(0.50)	先端
第3類9	B d	IV a	2	25.2	15.5	3.8	0.90	完形
18	"	IV b	2	(19.2)	15.6	3.0	(0.80)	先端
34	"	IV b	3	(19.1)	17.4	4.9	(1.20)	先端
28	B 不明	C D 抜	1	(18.1)	(12.3)	3.2	(0.50)	基部
29	"	3住抜	2 b	(20.9)	(13.6)	3.9	(0.80)	基部
	"	3住抜	2 b	(26.7)	(15.4)	2.5	(1.00)	基部
9	C b	II a	1	(30.9)	(15.8)	2.6	(0.95)	左側辺
	C c	BDアゼ	1	(32.8)	(15.8)	8.6	(4.55)	基部

第4表 石 範

図版 No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	欠部	損位	図版 No.	形態	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚
第263	I d	1	55.1	35.8	16.0	完	形	第261	A a	I a	1	64.4	14.9	8.3
第264	II a	1	35.2	26.0	8.5	完	形	第261		II a	1	57.7	24.0	11.0
第265	II c	1	51.5	35.6	8.8	完	形	第262		ABアゼ	1	54.9	20.2	6.6
第266	II c	1	49.1	34.3	10.3	完	形	第263		II a	2 b	52.7	17.3	6.5
第267	III c	1	55.4	37.0	19.3	完	形	第261		3住抜	2 b	51.8	29.3	7.8
第268	III d	1	53.8	34.8	17.9	完	形	第261		I a	2	(53.7)	20.6	6.2
	II a	1	48.8	44.4	19.6	完	形	第263		II b	2	54.0	17.8	6.9
第269	ACアゼ	1	56.9	36.3	21.6	完	形	第269		II c	2	53.7	17.8	5.1
第270	BDアゼ	1	(43.7)	41.7	11.0	基	部	第266		不	明	40.3	14.3	5.0
	CD抜	1	30.4	20.8	7.9	完	形	第265		不	明	51.1	19.6	6.1
第272	CD抜	2 b	(50.1)	37.2	14.5	先	端	第261	A c	II a	1	59.0	15.3	5.4
第273	I a	2	61.9	35.1	15.3	完	形	第261		CD抜	2 b	60.1	28.0	7.2
第274	I b	2	(31.3)	(32.2)	10.7	先	端	第262	A d	CD抜	2 b	49.7	15.2	3.8
第275	I b	2	(36.2)	(32.3)	(13.2)	先	端	第262		II a	2	46.1	18.1	4.8
	I c	2	(34.7)	(38.0)	(7.5)	先	端	第262		II b	2	53.9	26.0	6.0
第276	III d	2	(55.3)	(34.0)	(15.6)	先	端	第264		3住	埋2	59.7	21.3	6.5
第277	III d	2	51.6	37.4	13.2	完	形	第261	A e	3住	埋1	48.5	26.7	7.9
	III d	2	39.7	30.9	12.6	先	端	第264	A h	CD抜	2 b	44.9	34.0	8.9
第278	II a	3	56.9	34.5	12.0	完	形	第260	A k	III a	1	68.9	29.5	7.6
	II c	3	48.2	27.2	14.5	完	形	第263	A l	II b	2	51.1	15.4	6.4
第279	II b	3	58.3	39.9	14.4	完	形	第260		II a	3	57.4	31.9	9.0
	CD抜	3	43.1	28.7	8.3	完	形	第260	A m	II a	1	46.5	18.6	6.8
第280	3住抜	3	57.0	39.8	14.6	完	形	第260		3住	埋2 a	42.8	18.2	5.3
第281	3住	埋3	58.6	36.9	14.0	完	形	第265		II b	2 b	47.7	27.4	8.5
	不	埋	(36.5)	(32.0)	(7.4)	先	端	第264		II d	2	50.0	13.9	5.5
								第261		III a	2	72.2	22.0	7.5
								A n	3住	2 b	51.8	29.3	7.8	
								第263		3住	埋1	45.1	23.9	6.0
								第262	A o	II c	1	47.0	24.9	3.7
								第264	A p	3住	2 b	36.0	25.4	6.1
								第265	B a	II d	1	35.0	59.5	5.6
								第263		CD抜	1	35.5	32.0	6.2
								第267	D d	3住	2 b	33.4	34.5	6.2
								第264	B e	I d	1	31.5	44.8	5.7
								第269	B g	3住	2 b	38.4	30.2	3.7
										3住	埋2	30.3	32.0	3.7
								第262	B j	II c	2	46.2	31.1	6.3
								第260	B k	3住	2 b	33.1	47.5	6.1
										3住	2	51.2	28.8	6.2

第5表 石槍

図版 No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	欠損部位
第29圖3	I b	1	(79.2)	(25.0)	11.9	中央
第29圖1	I b	1	(48.3)	(21.7)	11.8	基部・先端
第29圖2	II b	1	142.3	29.0	15.3	完形
第29圖3	C D 拡	1	(150.3)	22.7	11.0	先端
第29圖6	C D 拡	2 a	(108.1)	(35.0)	(12.4)	中央
第29圖2	C D 拡	2 b	(56.1)	(27.1)	(13.9)	中央
第29圖7	3 住拡	2 b	(89.3)	(27.6)	(11.5)	中央
第29圖3	I c	2	(55.1)	(20.0)	(8.6)	中央
第29圖4	II c	2	(55.2)	(19.5)	(8.5)	中央
第29圖1	II d	2	(54.2)	(22.9)	(9.1)	中央
第29圖5	3 住	埋2	(33.6)	(15.6)	(8.2)	中央
第29圖4	不	明	92.4	22.9	7.5	完形
第29圖2	不	明	(59.3)	(24.0)	12.3	中央
第29圖2	不	明	(73.3)	(26.7)	(10.8)	中央

石錐

第29圖8	II a	1	32.8	9.2	4.4	完形
6	II c	1	46.3	13.5	4.3	完形
A C アゼ	1		26.4	17.9	5.4	完形
5	B D アゼ	1	(30.2)	21.1	4.9	先端
13	C D 拡	2 b	(20.0)	13.0	5.2	基部
	C D 拡	2 a		—	—	先端・基部
11	I b	2	47.0	12.0	4.2	完形
9	III d	2	59.3	31.2	9.6	完形
16	I c	3	(28.5)	12.0	8.9	基部
4	IV c	3	(47.2)	(15.8)	(8.6)	基部
12	不	明	26.9	8.4	4.9	完形
7	不	明	(25.2)	(20.2)	3.9	先端

石斧

第29圖3	II d	1	(56.2)	(39.6)	(9.8)	破片
第29圖3	B D アゼ	1	(27.3)	(18.4)	6.1	基部
第29圖1	C D 拡	1	(134.5)	66.5	43.0	先端
第29圖1	C D 拡	2 a		—	—	破片
第29圖5	I a	2	(92.1)	(54.4)	(24.0)	先端
第29圖2	不	明	114.0	51.8	20.3	中央
第29圖2	不	明	—	—	—	破片

第6表 石皿								
図版No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	欠損部位	備考	
第35図2	I a	1	20.4	11.6	3.0	破片	火をうけている 火をうけている	
	I d	1	20.4	11.5	6.3	破片		
	I d	1	16.8	16.5	5.6	破片	火をうけている 火をうけている	
	II d	1	28.5	23.4	6.8	中央夾		
	III a	1	21.3	11.5	5.8	破片	火をうけている 四面あり、火をうけている	
	III c	1	21.9	11.7	6.3	破片		
第35図1	IV b	1	16.2	13.8	7.0	中央夾	火をうけている 火をうけている	
	A C アゼ	1	35.4	33.0	14.9	完全形		
	3住拵	2 a	20.7	14.3	6.3	中央夾	四面あり、火をうけている	
	3住拵	2 a	22.7	20.9	6.3	中央夾		
	III a	2 b	24.6	33.5	9.7	中央夾	火をうけている 火をうけている	
	3住拵	2 b	12.3	7.2	5.0	破片		
第35図3	3住拵	2 b	23.5	14.8	7.3	破片	火をうけている 火をうけている	
	I c	2	20.7	8.9	9.1	破片		
	II b	2	20.0	16.6	7.3	破片	四面あり、火をうけている 火をうけている	
	II b	2	22.7	11.8	6.8	中央夾		
	III a	2	18.2	25.3	6.8	中央夾	四面あり	
	III b	2	12.3	9.6	4.2	破片		
	III c	2	23.3	13.3	5.7	破片	火をうけている 火をうけている	
	不明	不明	9.9	9.7	5.8	破片		
			18.4	13.7	8.2	破片	四面あり	
	3住	埋2	13.3	12.0	5.8	破片		
	3住	埋2	17.4	5.5	5.0	破片	火をうけている 火をうけている	

第7表 磨石								
図版No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	欠損部位	備考	
第36図4	I b	1	17.2	7.2	6.5	完全形	特殊磨石	
	I d	1	7.8	8.1	3.8	中央夾	火をうけている 火をうけている	
	IV c	1	9.6	5.9	5.5	破片		
	3住拵	2 a	17.5	8.8	6.1	中央夾	特殊磨石	
	II a	2 b	6.8	5.4	4.5	中央夾		
	II a	2 b	11.1	7.1	3.4	中央夾	火をうけている 特殊磨石	
	3住拵	2 b	6.7	7.5	4.1	中央夾		
	3住拵	2 b	14.7	6.1	5.7	完全形	火をうけている 特殊磨石	
	II b	2	12.8	6.5	4.5	完全形		
	II d	2	7.9	6.9	5.0	中央夾	特殊磨石 特殊磨石	
	III a	2	7.9	7.2	5.1	中央夾		
第36図3	III a	2	7.4	6.4	5.1	中央夾	特殊磨石 特殊磨石	
	III c	2	12.0	10.1	4.4	完全形		
	IV d	2	9.1	6.3	4.1	中央夾	特殊磨石	
	IV b	2	10.0	7.5	4.8	破片		
	IV c	3	6.2	4.9	2.8	破片	特殊磨石 特殊磨石	
	不明	不明	9.5	7.0	5.3	中央夾		
			11.8	7.2	5.3	中央夾		

第7表

磨 石

図版No	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	欠損部位	備考
第36図2			12.1	7.5	6.4	中央	特殊磨石、火をうけている
			13.5	7.5	5.6	中央	特殊磨石、火をうけている
			7.5	7.7	4.5	中央	
第36図1			9.0	4.5	3.0	完全	
			9.8	6.5	4.8	完全	
			7.2	6.6	4.8	中央	特殊磨石
			6.6	6.4	5.7	中央	
			8.0	7.0	4.8	中央	特殊磨石
			5.6	6.3	5.7	先端	特殊磨石
			7.5	8.0	5.4	完全	特殊磨石
			13.0	6.9	6.0	先端	特殊磨石
			12.1	7.3	7.0	先端	特殊磨石
			5.6	6.2	3.8	破片	火をうけている
3住	埋1		17.2	6.2	4.2	完全	
			8.9	5.3	4.0	破片	火をうけている
3住	埋1		12.7	8.0	3.8	中央	火をうけている

石 盆

図版No	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	凹みの数	欠損部位	備考
A C アゼ		I a	1	8.3	9.7	4.0	1 1	特殊磨石
		I u	1	11.8	5.5	3.3	1 2	特殊磨石
		I a	1	6.7	8.8	3.7	1 2	
		I d	1	8.2	8.5	3.7	1 2	
		2 a	10.6	8.5	4.0	2	完全形	特殊磨石
		C D 抵	2 b	9.2	4.8	2.9	1 3	
		3 住 抵	2 b	7.7	7.1	3.6	1	
		II b	2	8.8	5.1	2.7	1 2	風化著しい
		III a	2	14.4	7.3	4.4	1	特殊磨石
		III a	2	10.2	7.5	4.4	1 2	
第36図8		N c	2	9.5	8.0	3.2	1 1	
		I c	3	13.0	7.8	3.9	3	火をうけている
		I c	3	6.9	8.5	3.3	1 2	
		III b	3	13.4	8.3	2.8	1 1	
		III c	3	10.9	8.6	3.2	1 1	
		IV b	3	7.9	6.4	4.7	2 3 4	特殊磨石
		IV c	3	9.2	9.0	4.1	1 2	
		不明	不明	12.1	7.3	4.0	3 3	
				11.6	4.5	2.6	2 2	
				12.1	8.6	3.5	3 4	
第36図7				10.4	7.9	3.9	2 6	
				10.7	7.8	3.9	1 2	
				10.5	7.1	3.9	1	
第36図1	3住	埋1		7.6	5.5	4.1	1	

第8表 制 片

固版 No	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	末端の 形状	打 角	長軸 指數	備 考
	BDアセ	1	26.1	40.4	8.6	FE	105°	0.49	
			18.4	34.1	9.4	HF	107°	0.53	表右 刃こぼれ
			25.0	33.1	7.2	HF	123°	0.75	表右 刃こぼれ
	IV b	1	18.9	22.1	2.0	FE	147°	0.85	打面調整フジーク
	III a	1	33.0	29.2	2.8	SF	115°	1.23	表右 刃こぼれ
	ACアセ	1	18.2	32.3	5.3	FE	118°	0.56	
	I		12.5	29.4	2.8	HF	138°	0.42	表上に刃こぼれ
	I c	1	32.8	25.6	6.7	FE	97°	0.78	
			18.3	28.0	4.9	SF	128°	0.65	表右 刃こぼれ
			34.6	25.0	6.8	SF	107°	1.38	裏左右刃こぼれ
			25.8	13.3	4.3	HF	120°	1.93	表左右刃こぼれ ポール
	II a	1	26.8	24.0	3.1	FE	140°	1.11	表右 刃こぼれ
	III b	1	33.1	50.4	8.3	FE	108°	0.65	裏右下 刃こぼれ
30選			57.9	51.8	6.0	FE	101°	1.11	表右 二次加工
	II d	1	41.2	35.4	4.5	FE	135°	1.16	表右 刃こぼれ
	I d	1	41.7	35.8	9.7	HE	127°	1.16	表左下 刃こぼれ 自然面有
			32.8	37.2	7.7	FE	103°	0.88	表左 刃こぼれ
			15.8	32.4	3.9	FE	103°	0.48	
			10.8	25.9	11.4	FE	132°	0.42	表左 刃こぼれ 自然面有
			21.4	42.7	5.4	FE	108°	0.50	表下 刃こぼれ
	IV a	1	16.9	23.0	2.9	HF	105°	0.73	
			29.7	24.6	8.5	HF	91°	1.20	表左 刃こぼれ
	III b	1	29.0	40.8	8.9	FE	112°	0.71	表右 刃こぼれ
			25.7	28.0	7.8	HF	108°	0.91	
30選	II b	1	35.6	33.0	9.3	HF	124°	1.07	
	III c	1	36.2	40.7	9.0	FE	114°	0.88	表左右 刃こぼれ
31選			67.0	39.3	10.6	FE	120°	1.70	表右 刃こぼれ 自然面有
			47.3	35.1	10.0	FE	76°	1.34	裏右下左 刃こぼれ
			47.1	59.0	9.4	FE	109°	0.79	節理面有
			23.3	31.9	9.0	FE	118°	0.73	表左 刃こぼれ
			17.5	19.3	7.7	FE	132°	0.90	自然面有
	II d	1	33.7	44.0	4.5	FE	115°	0.76	
	III d	1	20.2	22.0	4.0	HE	110°	0.91	自然面有
	IV d	1	47.2	25.7	7.6	HF	118°	1.83	表左右 刃こぼれ
	II d	1	22.5	30.1	6.4	FE	106°	0.74	表下 刃こぼれ
	I a	1	37.2	41.6	9.1	FE	118°	0.89	表右下 刃こぼれ
			52.9	52.0	8.6	FE	107°	1.01	スクレーパー
	I d	1	28.6	28.6	7.2	FE	146°	1.00	自然面有
31選			31.7	43.1	5.3	HF	98°	0.73	
			27.8	52.2	6.9	FE	136°	0.53	表左右下 刀こぼれ
			41.2	25.0	9.7	FE	115°	1.65	表左下 刀こぼれ
			29.9	35.1	9.5	FE	117°	0.85	表左 刀こぼれ
			35.2	33.4	4.0	FE	117°	0.60	右半欠損

第9表 制片

図版 No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	末端の 形状	打角	長幅 指数	備考
II c	II c	1	23.3	38.9	5.3	F E	100°	0.60	
			36.2	26.2	9.2	F E	110°	1.38	
			25.4	—	9.1	F E	121°		右端欠損
			22.9	33.5	6.4	F E	112°	0.68	
			38.9	46.4	10.0	H F	105°	0.84	
			33.1	42.8	8.8	F E	104°	0.77	
			32.9	43.3	8.4	F E	113°	0.76	
			52.1	61.1	10.0	S F	105°	4.69	
			30.6	29.1	7.9	F E	103°	1.05	自然面有
			32.7	24.4	7.0	F E	124°	1.34	自然面有
C D 扱	C D 扱	1	19.0	33.1	5.1	F E	100°	0.57	
			44.3	29.8	6.1	F E	122°	1.49	
			28.8	19.0	3.4	F E	111°	1.52	自然面有
			32.0	33.0	4.4	F E	115°	0.97	
III a III b I c II d I a III c III d	III a III b I c II d I a III c III d	2	28.2	35.4	8.2	H F	124°	0.79	自然面有
			48.8	35.2	8.8	断端面 で研磨		1.38	自然面有
			26.2	28.0	7.4	H F	106°	0.93	右端欠損
			18.3	33.6	6.2	F E	116°	0.54	表右 刃こぼれ
			35.3	41.5	4.7	H F	98°	0.85	表左 刃こぼれ
			35.6	29.6	8.6	H F	108°	1.20	表左 刃こぼれ
			34.2	20.6	5.3	F E	—	1.17	頂部損傷 表下刃こぼれ
			27.6	27.6	7.1	F E	—	1.36	頂部損傷 表右刃こぼれ
			33.7	33.0	7.0	H F	112°	0.71	裏左 刀こぼれ
			25.5	37.3	6.6	F E	91°	0.68	裏右刃こぼれ 表左二次加工
III a III b III c III d	III a III b III c III d	2	56.4	25.9	9.3	F E	109°	2.17	裏左刃こぼれ 表右二次加工
			52.4	25.9	6.3	H F	92°	2.02	表右下 刀こぼれ
			36.3	41.0	7.3	H F	107°	0.88	表左右刃こぼれ 表右二次加工
			32.1	35.2	6.6	H F	95°	0.91	表左右 刀こぼれ
			25.3	37.0	9.0	F E	107°	0.68	表右 裏左 刀こぼれ
			59.2	22.7	7.7	H F	125°	2.60	表左右刃こぼれ 斜面打凸による剥片
			40.6	34.4	7.4	H F	97°	1.18	表右 裏左 刀こぼれ
			20.8	26.4	4.9	H F	90°	0.78	表下 二次加工
			39.9	22.1	4.4	F E	117°	1.80	自然面有
			16.3	20.5	4.6	F E	133°	0.79	裏左右表下 刀こぼれ
II b III c	II b III c	2	22.4	17.0	3.4	F E	117°	1.31	
			37.9	49.0	12.0	S F	106°	0.77	裏左 二次加工
			30.3	40.2	8.6	H F	126°	0.75	表左右 刀こぼれ
			44.1	43.4	7.9	F E	114°	1.01	表左右刃こぼれ 自然面有
			31.6	46.0	9.8	F E	106°	0.68	表左刃こぼれ 自然面有
III a	III a	2	28.6	22.0	7.8	F E	122°	1.30	裏左 刀こぼれ
			42.4	22.0	8.4	F E	106°	1.92	裏左 刀こぼれ
			27.4	33.7	2.0	F E	112°	0.81	
			26.7	14.2	2.2	F E	123°	1.88	表右刃こぼれ 表左二次加工
			53.6	49.3	9.8	F E	106°	1.06	スクレーパー

第10表 剣 片

銘版 No.	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	末端の形	状	打角	長幅 指数	備考
	N c	2	30.8	21.0	3.2	F E	112°	1.46		
	I c	2	31.4	26.1	5.8	F E	135°	1.20	表左右 刃こぼれ	
	IV d	2	30.0	32.0	6.0	S F	116°	0.92	表左 刃こぼれ	
			28.0	31.0	7.0	S F	102°	0.90	表左 刀こぼれ	
			23.1	23.3	4.8	H F	121°	0.99	裏左 刀こぼれ	
			29.1	29.7	4.7	H F	121°	0.97	表右 刀こぼれ	
	IV e	2	34.2	33.8	10.9	F E	101°	1.01		
			19.0	41.8	9.0	F E	115°	0.45	裏下 刃こぼれ	
			22.0	16.2	2.4	F E	—	1.35	頂部損傷	
			61.2	30.0	5.5	F E	107°	2.04	表右 刀こぼれ	
	I b	2	27.0	27.0	4.4	F E	109°	1.00	裏右 刀こぼれ	
			33.7	13.4	3.1	F E	143°	2.51	表右 刀こぼれ	
	III c	2	39.7	29.2	7.5	F E	116°	1.35		
	H c	2	28.3	39.8	8.0	F E	118°	0.74	表下 刀こぼれ	
			50.5	28.5	6.0	H F	96°	1.77	表右 刀こぼれ	
			26.4	41.4	8.0	F E	110°	0.63		
新規	III a	2	39.5	64.5	8.8	H F	107°	0.61	表右左下 刀こぼれ	
			37.5	58.0	8.1	F E	123°	0.64	裏下 刀こぼれ	
			42.4	24.0	7.8	F E	117°	1.76	裏左 刀こぼれ	
新規			39.0	20.4	4.0	F E	109°	1.91	表右 刀こぼれ	
	III d	2	42.4	26.1	6.8	F E	130°	1.62		
			32.9	37.0	9.4	F E	105°	0.89	自然面有	
	III b	2	55.0	30.5	7.1	F E	100°	1.80	自然面打面	
			30.5	23.9	6.1	F E	69°	1.28		
BDかべ	2 a	33.8	34.0	8.5	F E	97°	0.99	裏下 刀こぼれ		
ACかべ	2 a	42.6	31.8	7.2	F E	113°	1.33	表左右 刀こぼれ		
			32.4	41.8	9.3	H F	95°	0.77	裏右 刀こぼれ	
3住塚	2 a	57.4	26.6	7.0	F E	108°	2.15			
			33.4	33.0	7.7	F E	116°	1.01	表右下 刀こぼれ	
			45.9	31.0	3.9	F E	131°	1.48		
			24.3	36.8	8.9	F E	69°	0.66		
			27.7	21.7	5.3	F E	134°	1.28		
			22.9	20.9	5.4	H F	111°	1.10		
			28.0	21.0	3.6	F E	116°	1.33	自然面有	
	C D 拡	2 a	35.0	29.2	9.0	H F	90°	1.20		
			42.9	20.6	5.9	F E	121°	2.08	自然面有	
			26.9	39.4	7.3	F E	107°	0.68	自然面有	
			21.6	—	8.4	H F	98°		右端欠損	
			32.2	23.1	3.0	F E	139°	1.39	自然面有	
			27.0	39.0	6.0	F E	111°	0.69		
			35.3	21.2	5.3	H F	115°	1.67		
			50.8	22.8	7.0	H F	103°	2.23		
			30.1	36.5	4.0	F E	120°	0.82		
			26.0	31.1	6.1	F E	112°	0.84		

第一表 刀 片

図版 No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	末端の形	打角	長幅 指数	備考
3住塗	2 a		28.4	34.4	4.7	F E	111°	0.90	
			24.5	27.7	6.0	F E	114°	0.95	
			15.4	40.0	10.1	F E	128°	0.38	自然面打面
			33.3	25.5	4.4	F E	104°	1.55	
			24.3	38.8	2.7	F E	194°	0.74	
	2 b		15.7	36.6	11.0	F E	16°	0.51	
			24.8	17.7	3.2	F E	11°	1.49	
			19.8	19.9	3.2	F E	111°	1.11	
			60.3	29.9	8.2	F E	112°	2.42	
			23.2	41.1	4.6	H F	110°	0.57	
C D 塗	2 b		32.5	24.4	7.1	H F	121°	1.10	裏左右 刃こぼれ
			38.7	16.6	3.6	F E	113°	2.84	裏左 刃こぼれ
			11.6	22.2	3.6	H E	123°	0.50	裏下 刃こぼれ
			31.9	32.2	10.1	F E	100°	0.96	裏左右 刃こぼれ
			11.5	32.2	5.6	S F	128°	0.33	
3住塗	2 b		27.4	48.8	7.5	F E	78°	0.65	表右 裏左 刃こぼれ
			26.4	25.5	7.1	F E	92°	0.99	表左 刃こぼれ
			36.4	40.0	8.3	H F	103°	0.91	
			49.9	22.2	6.4	S F	114°	2.60	
			31.1	24.4	8.0	F E	118°	1.39	
3住塗	2 b		31.7	36.6	9.9	F E	105°	0.98	自然面有
			36.6	36.6	6.2	F E	104°	1.21	
			19.5	40.0	3.0	F E	106°	0.41	
			36.3	20.0	6.6	F E	115°	1.30	
			36.7	24.4	5.9	F E	112°	1.55	
ACアゼ	2 b		17.0	11.1	6.8	F E	124°	1.11	
			49.9	32.4	4.4	F E	131°	0.65	
			26.2	26.6	5.0	H F	133°	0.99	
			35.1	24.3	4.3	F E	107°	1.44	表左右 刃こぼれ
			66.2	54.6	17.0	H E	113°	1.21	自然面有
I b	2 b		40.0	32.6	7.7	F E	108°	1.28	
			23.8	36.7	8.3	F E	103°	0.64	裏下に刃こぼれ
			25.5	17.7	3.4	F E	108°	1.44	裏右二次加工 表左刃こぼれ
			13.7	39.2	9.5	F E	141°	0.34	裏左 二次加工
			38.8	32.2	5.4	H F	112°	1.20	表左 二次加工 表右刃こぼれ
III a	3		22.8	30.3	9.7	H E	141°	1.12	表左右刃こぼれ 裏上二次加工
			23.6	25.5	4.2	F E	113°	0.92	表左下刃こぼれ 右端欠損
			19.9	26.1	3.0	F E	113°	0.76	表左刃こぼれ 右側凹損
			43.9	29.0	14.6	F E	110°	1.51	表左 刃こぼれ
			60.6	29.0	7.1	F E	109°	1.55	表裏左右 刃こぼれ
I c	3		34.6	30.1	8.4	F E A	126°	0.84	表左右下 刃こぼれ
			23.6	47.0	6.4	F E	113°	0.87	表下 刃こぼれ
			22.1	23.2	7.7	F E	113°	0.66	表左刃こぼれ 自然面有
			24.4	33.6	4.1	F E	100°	0.72	表右 刀こぼれ

第12表 制片

図版 No.	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	末端の 形状	打角	長幅 指数	備考
III b		3	26.3	30.5	9.6	F E	111°	0.86	下端欠損 表右刃こぼれ 右端欠損
		3	19.9	—	4.0	H F	117°		
			23.2	20.8	3.2	S F	106°	1.12	
			18.9	20.8	4.9	F E	67°	0.91	
II a		3	22.5	41.3	7.7	F E	115°	0.54	自然面有
			26.5	42.5	3.6	F E	106°	0.62	twin bulb
3佳抜 不明		3	22.8	25.5	4.6	F E	116°	0.89	
		40.4	33.4	5.8	F E	111°	1.20	表右下裏左刃こぼれ	
			24.6	31.2	7.9	F E	121°	0.78	全体的に刃こぼれ
			28.8	22.4	4.3	H F	96°	1.28	表左刃こぼれ
			16.7	21.5	4.2	F E	127°	0.77	裏左二次加工
			33.5	39.6	6.9	F E	117°	0.84	先端欠損
			14.6	11.5	3.5	F E	131°	1.26	
			31.6	32.6	9.7	F E	130°	0.96	裏右下刃こぼれ
			51.1	33.7	8.1	F F	128°	1.51	自然面有 表左刃こぼれ
			33.5	29.7	6.8	H E	100°	1.12	表右刃こぼれ
1住 埋1 埋2			33.3	30.6	9.1	F F	131°	1.08	自然面有
			29.1	27.6	3.6	H F	118°		
			21.3	16.7	4.0	H E	122°	1.28	
			28.2	38.3	8.8	F E	120°	0.74	twin bulb
			27.4	32.3	5.2	F E	116°	0.85	
			16.9	22.6	4.5	F E	92°	0.75	
		埋1	15.2	12.5	4.6	F E	119°	1.22	
		埋2	24.2	29.7	3.5	F E	119°	0.82	表左右刃こぼれ
			48.3	26.2	6.8	F E	111°	1.84	表左刃こぼれ 自然面有
2住 埋1		埋1	37.7	36.7	6.5	F E	110°	1.03	表左刃こぼれ
			16.9	31.6	3.5	F E	116°	0.53	自然面有
			31.0	21.0	7.7	H F	116°	1.48	
			18.3	17.9	6.5	F F	119°	1.02	表左刃こぼれ
3住 埋1 埋2 埋3			11.8	13.9	2.0	F E	134°	0.85	
			35.8	32.1	6.0	F E	126°	1.11	全体的に刃こぼれ
			30.5	27.2	5.8	F E	105°	1.12	
		埋2	24.3	30.8	7.2	H F	124°	0.79	
		埋3	29.5	37.8	8.7	F E	119°	0.78	表下二次加工

(4). 仙台市内の原始時代集落跡の分布

仙台市内の原始時代集落遺跡（旧石器時代、縄文時代、弥生時代の各遺跡を含む）は現在までに49遺跡が確認されている。しかし、このうち発掘調査によってその実態のごく一部が明らかにされつつあるものは、二神峯遺跡の他に、富田の上野遺跡、大野田六反田遺跡、山田船渡前遺跡くらいで、後は全く未調査のままで、しかも市街の膨張などのため破壊の危機に瀕しているものが少くない。これらの分布は、図によって見る通り仙台市西南部、名取川流域に著しく偏っていることが一見して伺える。この点に関しては、①昭和46年～昭和49年にかけての宮城教育大学考古学研究会の「名取川水系分布調査」の実施ならびに報告などによって、仙台市西南部での集中的な分布調査が行われ、新たな発見例が増加したこと、②仙台市中心部は古くからの市街化の進展のため集落遺跡の保存の余地が見られなかったこと、③仙台市北部は、戦後の急激な開発ブームのためほとんど事前のチェックもされずに遺跡発見の可能性が奪いとられてしまったこと（鶴ヶ谷団地、中山ニュータウンなど）、④仙台市東部は標高10m以下の海岸平野で、従来こうした低地には弥生時代遺跡を除けば原始時代集落は形成されにくいとの認識が定説化してきた、などの理由を指摘できる。このほか名取川流域は、仙台市西南部において3段におよぶ発達した河岸段丘を形成し、南面し溺水豊富な地味において、原始時代集落遺跡の立地基盤としては他の地域よりも比較的優位にあったことをも付加しておいてよいと思われる。時期別の遺跡数の内訳としては旧石器時代1、縄文時代46（早期4、前期2、中期13、後期4、晩期6、時期不詳15）、弥生時代7である。（一遺跡で時期の複合するものは別々に数えた。）もちろん、これらはほとんどが遺物の表面採集を主体とする分布調査にもとづくデータであって、今後の調査の進展いかんによっては異なるデータが提示される可能性を十分に含むものである。数の面から見れば、旧石器時代～縄文時代早、前期までの遺跡数は合計して7ヶ所できわめて少なく、縄文時代中期にはいり圧倒的な遺跡数の増加を見ている。縄文時代後期に至っては4ヶ所と急激に少なくなるが、晩期、弥生と漸増する。こうした問題は文化程度の発展段階といった要因の他に、環境変化といった要因も加味して考え合わせなければならない問題であろう。これら各時期の遺跡の立地上の問題点などについて次に考えてみたい。

旧石器時代の遺跡としてはっきり認定されているのは現在のところ青葉山遺跡1ヶ所だけで、これは仙台市内では最上部段丘である青葉山段丘上に立地し、標高は200mに達する。縄文時代早、前期においても標高70m以上の高所で、比較的周辺地域と独立した、やや小規模の段丘上もしくは丘陵上に立地するものが多い。縄文時代中期にはいるとやや低地志向の形跡が見られ、標高30m前後の平坦な丘陵にも遺跡の形成が見られる。従って遺跡規模も大きくなり、富田上野遺跡などは標高30m、面積約30haにも及ぶ小高い丘陵上に位置している。しかしこの段階においてもなお、丘陵もしくは中位以上の段丘上に立地するものがほとんどである。縄文時

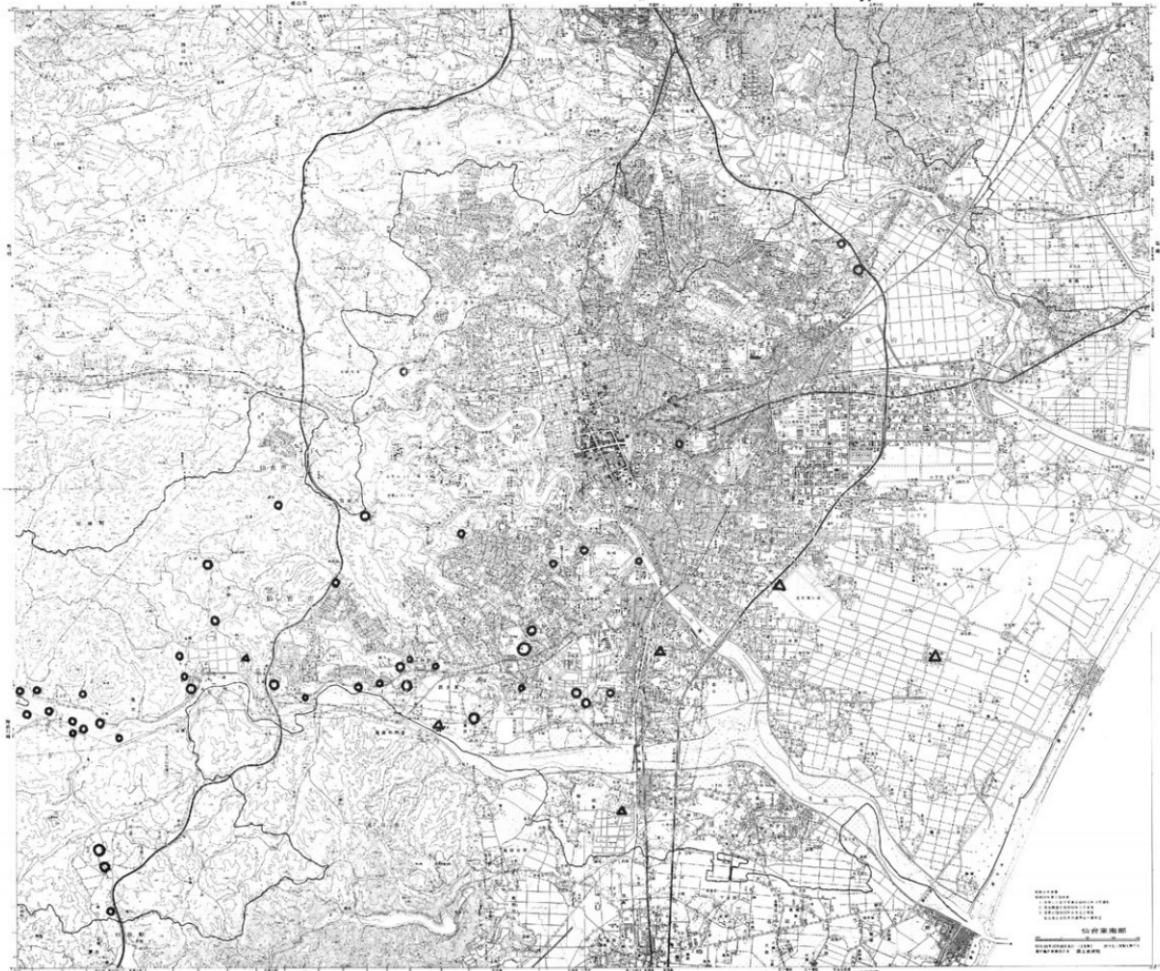
代後期にはいると、低地、それも標高10m程度の下部段丘もしくは沖積平野に立地するものが多いことが最近の発掘調査の進展などによって明らかになってきた。この点は従来の分布調査のみによるデータからは、ほとんど指摘されなかった問題点で、縄文後期の遺跡数が前代の中間に比して圧倒的に少ないのもこの点に大きな原因があるものと思われる。つまり、これら沖積地における縄文後期の生活文化層は地表からの深さ2~3mに位置することが多く、地表面探査ではほとんど確認不可能なのである。しかも、これら縄文後期生活文化層の上部に弥生~奈良、平安ごろまでの二重、三重にわたる生活文化層の累積が見られるケースもたびたびあり（長町西台塙遺跡、大野田六反田遺跡など）、これら上部生活文化層にカモフラージュされて縄文後期生活文化層の確認まで至らなかったのも大きな原因である。逆に考えれば、縄文後期以後の沖積作用の進展の度合が激しかったともいえる。いずれにしろ、縄文後期に至り初めて、一部ではあるが、沖積地を立地基盤とする集落形成が見られるようになり、その間に環境変化ないし生活文化内容の変化があったことを伺わせる。今後、沖積地における縄文後期以後の遺跡数の増加を見ることはまちがいないところであろう。

縄文晚期の遺跡としては現在のところやはり小高い丘陵上に位置するものが多いが、今後、沖積地における発見例も増加するものと思われる。

弥生時代の遺跡としては、標高10m以下の沖積地に立地するものと、70m以上の高所に立地するものとが数的には半々である。しかし、前者はその規模において広範な範囲を占めるに対し、後者は狹少な立地を示し、内容的に異質なものがあると考えるべきであろう。

最後に、貝塚分布について、ふれておきたい。仙台市内では、海岸線に面していくながら今までのところ、縄文時代はもとより、原始、古代を通して貝塚は全く発見されていない。言うまでもなく、仙台湾沿岸地域は全国でも有数の貝塚密集地帯として著名であり、隣接市町においてもかなりの貝塚が確認されている中で（塩釜市35、七ヶ浜町25、松島町15、名取市9、岩沼、多賀城市各3以上「宮城県遺跡地名表」昭51、による）、きわめて対照的な「貝塚空白地帯」とも言べき状況を呈している。この点は、やはり地形環境の問題が最大原因と考えるべきであり、松島湾岸のような入江状の地形が容易に形成されず、貝類の採取に不適当であった反面、河川や山林などの資源の豊かさが、海岸資源への依存をそれほど必要としていなかったとも考えられる。

以上、原始時代集落遺跡の分布を通じていえることは、ごく一般的に考えられていることではあるが、地形および環境、特に河川との関わりに強く結びついていることであり、そうした中から仙台の伝統の芽生えが始まったのであり、引いては「社の都仙台」のあけばのを探る上で貴重な教訓を提示するものといえよう。



6. 特 別 寄 稿

三神峯遺跡出土石匙の使用痕研究

梶 原 洋

1. はじめに

筆者と阿子島は1978年以来、L.H.キーリーとM.H.ニューカマーによるフリントを使った実験的使用痕研究（L.H.キーリー、M.H.ニューカマー1977b）に触発されて、良岩の実験を進めてきた。この研究は、簡単に言えば複製の石器を使って、様々な被加工物について計画的な実験を行い、その結果生じた使用痕を類型化し、実際の遺物の分析に適用する事を目的としている。ここで使用痕として観察の対象とされたものは、光沢、線状痕、微細剝離痕である（註1）。

筆者は以上の実験結果（図1参照）に基づいて、三神峯遺跡出土の石匙について使用痕研究を試みた。観察された資料は32点であるが、全体をこの報告書に発表する事は不可能であり、一部に限らざるを得ない。詳しい結果は近々別紙に発表の予定である（註2）。

2. 石匙の機能（註3）

石匙は、型式学的には両側刃の対応する挟み込みによって作出されたつまみ部を持つ石器と定義する事ができる。縄文時代に特有の石器として、研究の歴史も古い（中谷 1925）機能についても從来からさまざまの見解があるが、多くの場合、動物解体と処理の道具と考えられてきた（坪井 1959、上野 1961、小林 1978）。しかし、この仮説が縄文時代の生業を理解する上で、なんらの検証なしに無批判に用いられている点に大きな問題があると考える。最近では、それ以外に木や竹の加工にも使われる万能の道具とする説もある（岡本 1965、石岡 1978、橋 1980）。

しかし、いずれも実証的な分析をふまえたものではなく、石匙の機能自体は不明のままなのである。

筆者は一つの試みとして、使用痕分析を通じ、一器種としての石匙の機能の実態を明らかにしようと考えた。ただし、型式学的研究と使用痕分析に基づく機能研究は、なんら対立するものではないが、現在の所はそれぞれ別々に分析した上で、関連を追求すべきだと考えている。つまり、一器種 = 一機能（従来の意味で）という前提に立った考えは成立しないという事である。

3. 分析の方法

対象とした石匙は、脂防やごみを除去するため、石鹼で洗った後、水酸化ナトリウム溶液、希塩酸にひたし、最後にアルコールをよくふくませた脱脂綿で拭いた。

顕微鏡の倍率は200倍と400倍を用い、観察は原則として全縁辺を対象とした。一点につき50枚～70枚の写真が撮られた。ここで発表した写真は、紙面の都合上一部に限られており、決

って部分的な観察で全体を結論づけたわけではない。

実際の遺物は、実験品と違い長い間地中に埋れており、さまざまの作用を受けていると考えられる。ここでは、光沢と線状痕が同一部分に存在する場合を使用痕として認定した。

4. 具体的な分析

図47 図の上段に示された腹面の使用痕は、広く全面を覆うように広がる光沢と、筋状に縁辺に平行に走る線状痕で構成される。この光沢は、いわゆるコーングロスと呼ばれるもので、穀科植物を加工した時に生じるものである (J.ウイットホット1967)(図46 実験資料参照)。このような光沢は腹面部左側辺に沿ってかなり中まで入り込んでいる。400倍の写真的中央に見られる窪みは、いわゆるすい星状のピットと呼ばれるもので、コーングロスに特有のものとされている。ほぼ同部分の背面側では丸みを帯びた弱い光沢と、横方向に走る筋状の線状痕が見られる。しかし光沢はほとんど広がらず、剝離面の境の稜線上に若干見られる程度である。

石器の操作は線状痕の方向から、縁辺に平行に操作されたと推定される。つまり、この石匙の左側辺(註4)は、穀科植物を切る道具だったと推定されるのである。

背面と腹面の光沢の広がりの差は、別の重要な事実を示していると考えられる。つまり、この石器がかなり使用された時点で腹面にはば等しく広がっていた光沢は、背面側での刃部再生により大部分が除去されたと推定できるのである。ただし若干の光沢と線状痕が観察される事から、その後も作業に使用されたのであろう。その結果、形態的にも本末左側辺はもっと膨らんでいた事が推定される。この事実は、石匙の形態がこの場合、決定的なものではなく、結果的なものである事を示唆する点で極めて重要なと考える。

図48 腹面では縁辺に沿って細い幅で丸みを帯びたなめらかな光沢(図48a)と、それに重って縁辺に直交する線状痕(図48上段b1)が観察できる。やや中に入った所では、弱いながらも平行に走る線状痕も見られる。

背面側では腹面ほど強い光沢は見られないが、同様に明るくなめらかな光沢がある。線状痕は平行なもの(図48段b2)と直交するもの(図48下段b3)が観察できる。

腹面に見られる光沢は、ウッドポリッシュ(ポリッシュタイプB)と呼ばれる。木質の素材を加工した時に生じる光沢に類似している(図46の2)。背面の光沢も弱いながらウッドポリッシュの一種と考えられる。

線状痕からは、この石器が縁辺に平行な動きと直交する動きの2つの異なる操作が行われたと推定できる。直交する操作としては、腹面の光沢、線状痕が明確である事、背面にも弱いながら同様の使用痕が見られる事からスクレイピングというよりは、腹

面を対象物にあてて削るホイットリングの作業だったと推定される。

縁辺に平行する操作としてはカッティングが考えられる。しかし、平行する線状痕とそれに伴なう光沢はあまり発達していない。また腹面では直交する線状痕の見られない部分にのみ平行する線状痕が観察される。この事から、カッティングはホイットリング以前に行なわれた事とあまり長時間は使われなかつた事が推定される。

これら2つのカッティング、ホイットリングという作業が一連のものか、時間的に別々のものかはわからないが、いずれにしても一個の石器がさまざまに操作された事がわかる。

5. ま と め

以上のように分析された結果をまとめると表13のようになる。

この結果が直ちに全ての石匙に普遍的であるかどうかは、現在の所検証できない。しかし、今後このような分析例を増やしていくれば、石匙とはどのような意味をもつ石器だったかという具体的な姿が浮びあがってくるだろう。

少なくとも三神峯遺跡の石匙に関しては次のような傾向が窺われる。

- (1). 体部の二次加工のあるなしにかかわらず、全ての石匙が何らかの作業に使われている事。
- (2). 一個の石匙には複数の機能が推定できる事。その中で、操作はカッティングが主であるが、それ以外の操作も行なわれている事。
- (3). 従来言われて来た意味での擬型（註6）の石匙では、左側辺の使用頻度がより高く、横型のものでは下辺が主に使われている事がわかる（註7）。
- (4). 刃部再生が32例中10例で推定され、縁辺部の形が必ずしも決定的なものでなく、全体の形に変化が考えられる事。
- (5). 破損して既に機能を失なったと考えられる石匙の中で、破損部が刃部として使用された例がある事。
- (6). 推定された被加工物では稲穀植物や木など植物質の物の他に皮、肉、角、骨などが推定されている。この事実から、従来言われて来たような石匙を動物処理具と限定してしまう考えには納得できない。むしろ、野外用のナイフのように、持ち歩いて状況に応じて使い分ける万能のナイフといった姿が浮びあがってくる。しかし、被加工物不明の場合も多く、今後さらに分析の精度をあげる必要がある。

ありきたりの一例の石器を顕微鏡下で観察する時、その小さな表面に残されている情報は驚くほど豊富である事がわかる。我々の実験使用痕研究はまだ始まったばかりであり、幾多の問題を抱えているが、方法論としては充分に可能性のある分野と確信している。今後多くの遺物で同様の研究を進めて行きたい。

この研究は、芹沢長介先生の御指導と御助言に多くの力を貢献している。使用痕研究も当初は芹沢先生が始められたものである。記して感謝の意を表したい。

阿子島島氏には共同研究者として常に御助言を仰いでいる。その他、東北大考古学研究室の須藤助教授や友人達、石巻の楠本政助氏にもこの紙上をかりて感謝の意を表したい。

註1 鏡微鏡を使った使用痕研究は、ソビエトのS.A.セミヨノフ博士に始まる（セミヨノフ1957, 英訳1964, 1968）。博士は1978年に亡くなるまで、常にこの分野の指導者であった。

1974年以降、欧米では積極的に実験と使用痕観察を結びつけた、より体系的な研究が進められてきた（R.E.トリンガムetal. 1974, L.H.キーリー1974, 1977a・b, 1979, オデル1975）。

ソビエトでもセミヨノフ以来、実験と使用痕研究は並行して進められており、特に最近は実験使用痕研究と呼ばれている（G.F.コロブコワ1978a・b, V・Ye・シェリンスキイ-1978）。筆者も実験と顕微鏡による使用痕観察を組み合わせた研究を実験使用痕研究と呼びたい。

欧米の研究の中で最も重要なL.H.キーリーの研究の意義は、被加工物（木、稻穀穀物、皮、肉、骨、角）によって、生じる光沢に違いがあり、識別できるという点である（L.H.キーリー1977a・b, 1979）。

この方法は、実験による光沢の類型化は基本的に遺物の光沢にも適用できるという仮定の上に立っている。しかし実際には何度も言うように、自然の作用や使用以外の人間による痕跡をあまりこうむっていない条件の良い資料を使った場合にのみ、有効性を發揮できるだろう。

筆者と阿子島の共同研究である実験の結果は、光沢と線状痕に関する部分は共同で、微細剝離痕については阿子島が近々発表の予定である。

註2 石器の型式学的諸属性と機能との関連については、ここに載せる事はできなかった。別紙を参照願いたい。

註3 機能という言葉はもっと慎重に扱われるべきであろう。例えば、切る、削るという言葉は石器の操作を表わすものであり、この意味では日本刀と包丁は同じ分類項目に入れられる事になり、機能という意味をこれら操作だとすればいくつかの機械的な分類項目でこと足りる事になってしまふ。しかし、機能という言葉は対象物と結びついてこそ意味をなすだろう。

筆者は、一個の石器の機能を分析する時、次の3つの段階に分けて考えている。

1. どこが使われたか。

2. どのように使われたか（操作）。

3. 何に対して使われたか（対象物）。

註4 右側辺、左側辺、下辺はいずれも裏面を表した時の位置である。

註5 実際の作業を行う時、操作が一種類だけというのはむしろ稀であろう。例えば楠本の釣針の製作では、切る、削る、搔く、穿孔するなどの種々の操作が一連の作業に介在している。

註6 筆者はつまみの軸と体部を決め、そのなす角度を計る事により3つの類型に分けた。類似の方法は上深澤道彦でも用いられている（宮城県教育委員会1978）。

ここで扱った縦型は、そのうちのI類型とII類型の一部に、横型はII類型の一部とIII類型に相当する。

註7 松原遺跡（泰 1977）で認められた、腹面右側邊に二次加工のための打面部を残す技法は、もしこの部分が刃漬しの役割を果たすものだとすれば、左側辺がより多く使用されるという、三神峯遺跡の分析を裏づける事実であろう。

本研究は、「特定研究古文化財」の一部として、芹沢長介に交付された文部省科学研究所による研究の一部である。

〈参考文献〉

1. 石岡憲雄・小笠原幸範 1978 青森県教育委員会 熊沢遺跡、第8節、石匙 PP. 178~187
2. 上野佳也 1961 有柄石匙試論 考古学研究第8卷第2号 PP. 24~30
3. 岡本勇 1965 日本の考古学II 繩文時代III労働用具 PP. 286~308
4. 小林康男 1978 繩文前期の生産活動 どるめんNo.16 特集繩文前期觀の転換 PP. 45~61
5. 橋昌信 1980 石匙 一西北九州における繩文時代の石器研究三 史学論叢第11号 河野房男教授退任記念号 PP. 93~120
6. 幸井清足 1959 国解考古学辞典 石匙 PP. 41
7. 中谷治宇二郎 1925 石匙に對する二・三の考察 人類学雑誌第40卷第4号 PP. 144~151
8. 泰昭繁 1977 贈賜考古学会 松原
9. 宮城県教育委員会 1978 東北自動車道遺跡調査報告1 上深沢遺跡
11. Keeley, L.H. 1974 Technique and methodology in microwear studies:a critical review. World Archaeology 5 PP. 323~336
12. Keeley, L.H. 1977 a. The functions of paleolithic flint tools, Scientific American, Vol.237, No. 5 November 1977 PP. 108~126
邦訳 鈴木正男訳 1978 フリント製石器はどう使われたか サイエンスVol 8 No. 1 PP. 56~66
13. Keeley, L.H. 1977 b. Microwear analysis of experimental flint tools:a test case, Journal of archaeological science. 1977.4. PP. 21~62
14. Korobkova, G.F. 1978. Eksperimental'nyi analiz i ego mesto v metodike i teorii arkheologii, K.S. 152. Voprosy teorii i metodologii arkheologicheskoi nauki. PP. 55~61
15. Odall, G.H. 1975 Microwear in Perspective, a Sympathetic response to Lawrence H. Keeley, World Archaeology 7 PP. 226~240
16. Semenov, S.A. 1957 Pervobytnaya tekhnika.
英訳 by Thomson. M. D. 1964 Prehistoric technology.
抄訳 田中琢 1968 石器の用途と使用痕
「先史時代の技法」抄訳 考古学研究第14卷第4号 PP. 44~68
17. Semenov, S.A. 1968 Razvitiye tekhniki v Kamennom veke.
(石器時代の技術の発展)

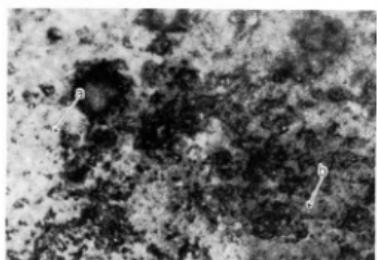
18. Shchelinskii, V.E. Eksperimental'no-trasologicheskoe izuchenie funktsii nizhnepaleoliticheskikh orudii, Problemy paleolita vostochnoi i tsentral'noi Evropy. PP. 182~196
19. Tringhan,R.E. Cooper, G. Odell, G.H.Voytek, B. and whitman, A. Experimentation in the formation of edge damage:a new approach to lithic analysis. Journal of Field Archaeology.1. PP. 171~196
20. Witthoft, J. Glazed polish on flint tools. American Antiquity.32 PP. 383~388

第13表 石匙の使用痕分析の結果(1)

n.	試査 回数 No.	左側 固定操作	右側 固定操作	推進加工物	右側 固定操作	推進加工物	下側 固定操作	推進加工物	最も深 く削られた辺	刃部露 出した辺
1	21回 13	Cutting Whittling	木	Cutting	木				右	
2	21回 1	Cutting Whittling	植物	Whittling Cutting	植物				左	左
3	22回 11	Cutting	不明	Cutting Whittling	不明				右	
4	24回 12	Scraping Cutting	皮 不明	Cutting	不明	Scraping Cutting	皮	左		
5	22回 4	Whittling	不明	Whittling	不明	Cutting	不明	左		
6	22回 9	Cutting Whittling	木	Cutting	不明				左右同程度	
7	22回 15	破損不明	不明	Cutting Whittling	木?	Scraping	皮	下		
8	22回 12	Cutting	植物	Cutting Scraping	木				左	左
9	21回 4	Whittling Cutting	木 不明	Whittling Cutting	植物 木				左右同程度	左
10	22回 10	Cutting	不明	Scraping Cutting	不明				左右同程度	
11	21回 10	Cutting Scraping	木 不明	先端 Cutting	木				左	
12	24回 13	先端 Cutting Whittling	木 不明	先端 Cutting Cutting	木				左	
13	22回 8	Cutting	木	Cutting Scraping	木 不明	Scraping	木	左	左	
14	21回 3	Cutting 破損 Scraping	不明	先端彫りのよ なSawing Sawing	不明				左右同程度	
15	24回 13	Cutting	皮の内	Scraping Cutting	皮 皮の内				左	
16	24回 2	Cutting Whittling	不明	Cutting Whittling	不明	Scraping	不明	左		
17	24回 3	Cutting	植物	Cutting	木	Cutting	木	左	左	
18	11回 1	Scraping Cutting	不明	Cutting Whittling	木 不明				左右同程度	
19	11回 4	Cutting	木	Cutting	木				左右同程度	

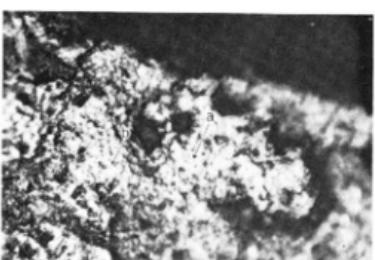
第14表 石匙の使用痕分析結果(2)

実性	回数	左側刃 右側刃 或加工物	右側刃 左側刃 或加工物	左側刃 右側刃 或加工物	下側刃 左側刃 或加工物	右側刃 左側刃 或加工物	最も使 われた辺 月部再生 された辺
20	24回 9	Scraping Soring	不明	Whittling Cutting	細料植物 木	Scraping Cutting	木 不明
21	23回 11	Cutting	木	先端 Whittling Cutting	木		左右同程度
22	21回 2	Cutting	不明	Cutting	不明		左右同程度
23		Cutting	角	Cutting	角		左
24	21回 5	Cutting	木	Cutting	木 木		左 左
25	24回 5	Scraping Cutting	皮・肉 角	Cutting Scraping	木 木		左 左
26	23回 10	Cutting	不明	Cutting Whittling	木		右
27	22回 1	Cutting 先端 boring	不明	Cutting	不明	Cutting 先端 boring	不明 下 F
28	22回 4	Cutting	皮・肉	Cutting	不明	Cutting	不明 下
29	22回 3	Whittling Cutting	不明	Scraping Cutting	不明	Scraping Cutting	不明 左 左
30	23回 3	未使用		Cutting Whittling	皮・肉	Cutting Scraping	皮・肉 皮 下
31	24回 7	Cutting	木	Cutting	木	Cutting	木 右・下 同程度
32	24回 10	未使用		未使用		Sawing	角 下



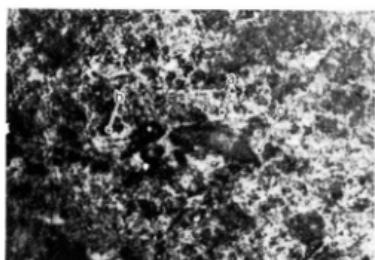
稻科植物による光沢

1



木による光沢

2



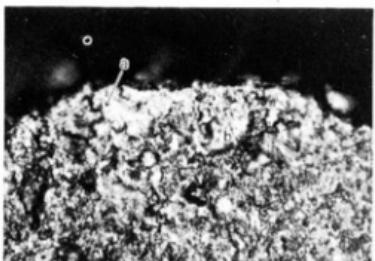
骨による光沢

3



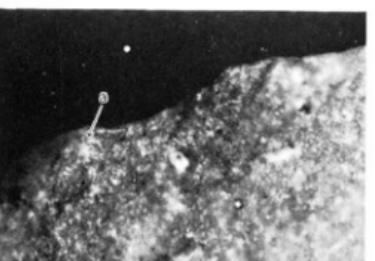
角による光沢

4



皮による光沢

5

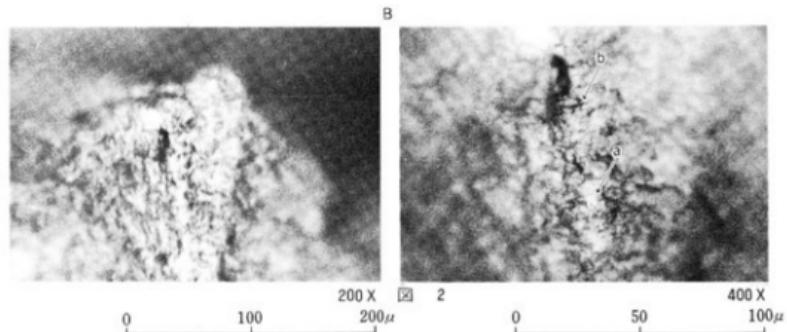
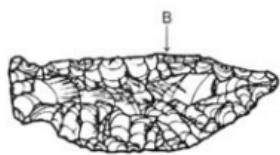
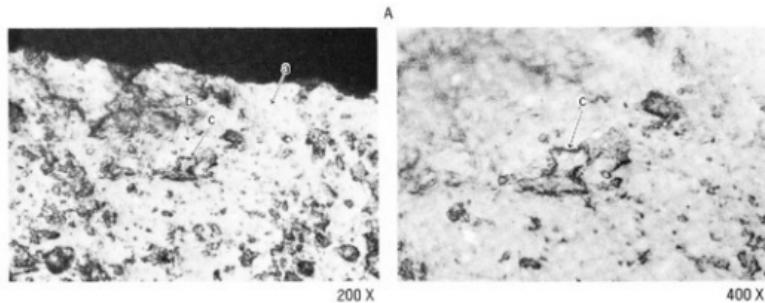
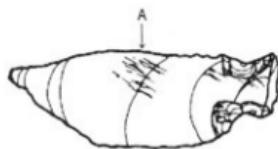


肉による光沢

6

第46図 実験による使用痕の例

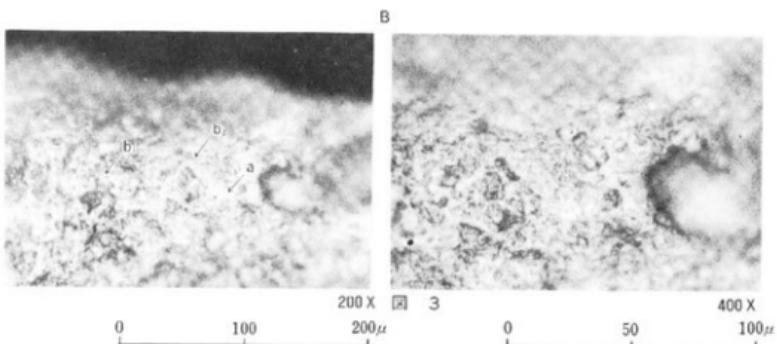
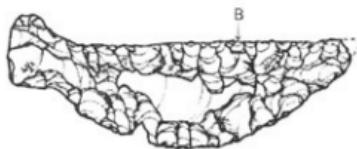
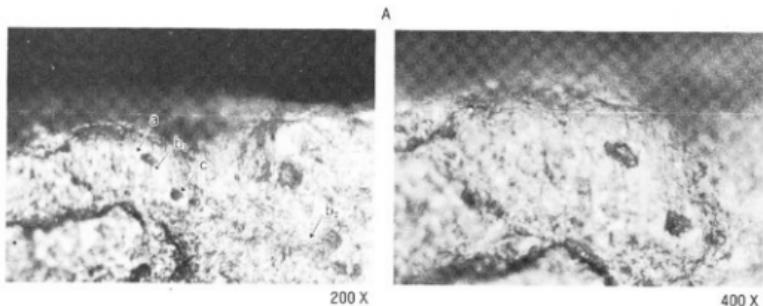
- a. 光沢
- b. 線状痕
- c. くぼみ



第47図 石匙に見られる使用痕

a. 光沢
b. 線状痕
c. すい星状のくぼみ

MK9



第48図 石匙に見られる使用痕

a. 光沢
b. 線状痕
c. くぼみ

写

真

図

版

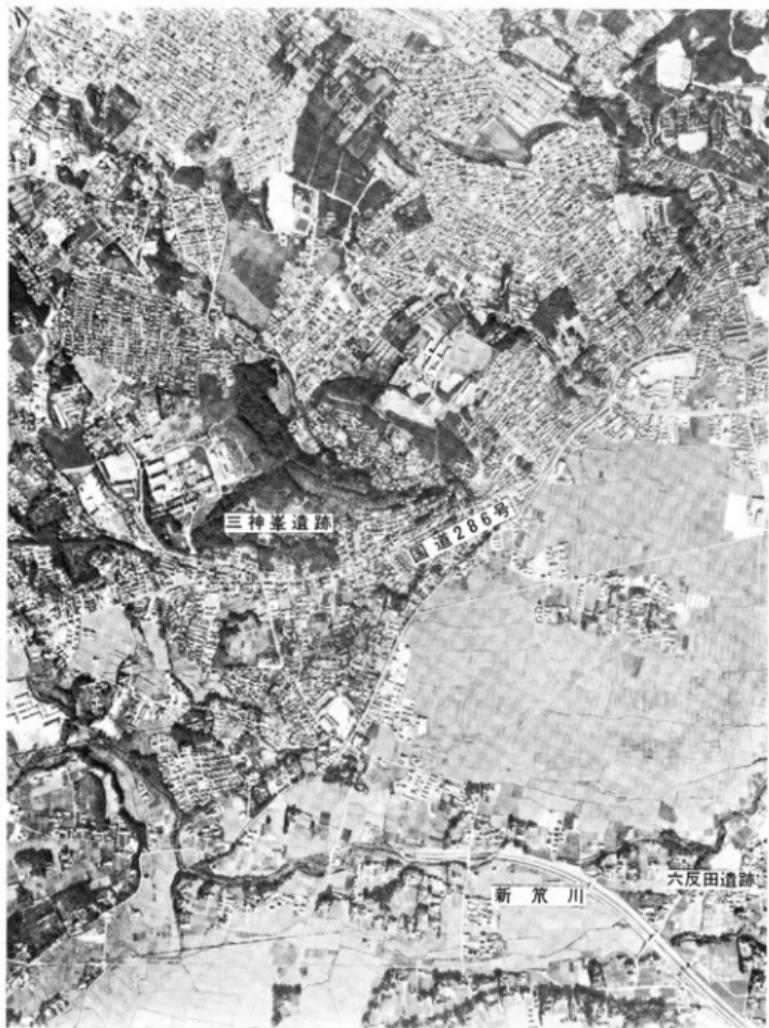


写真1 航空写真(1)〈昭和46年10月21日撮影、縮尺12,500分の1〉

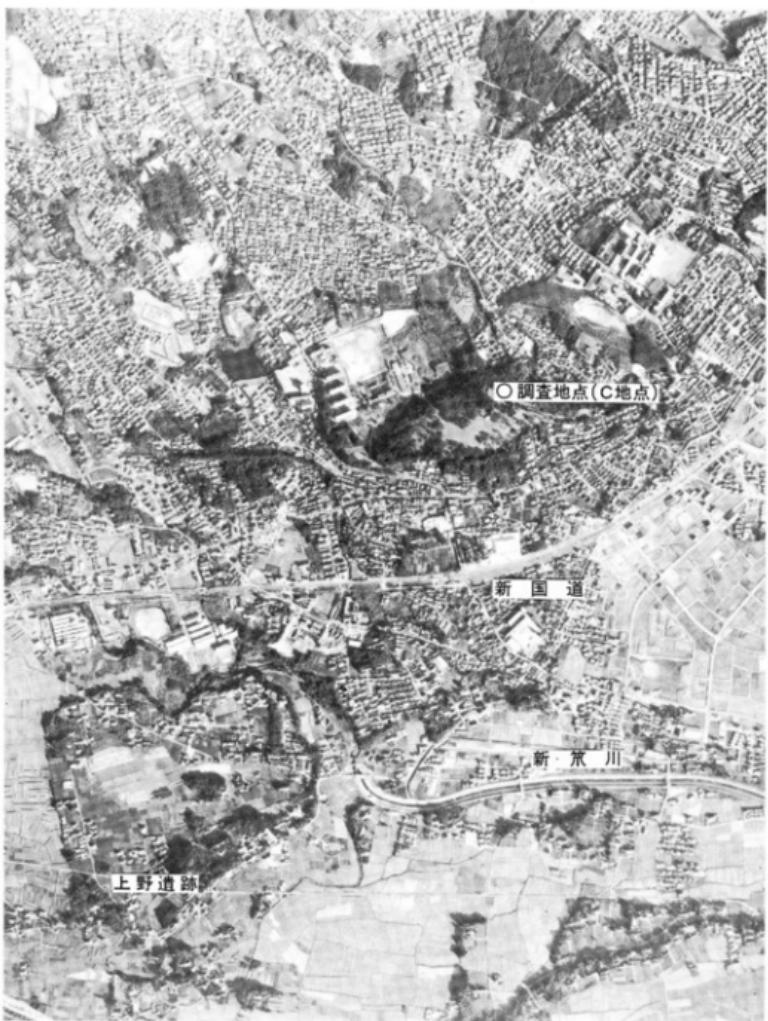


写真2 航空写真(2)



写真3 遠路速景

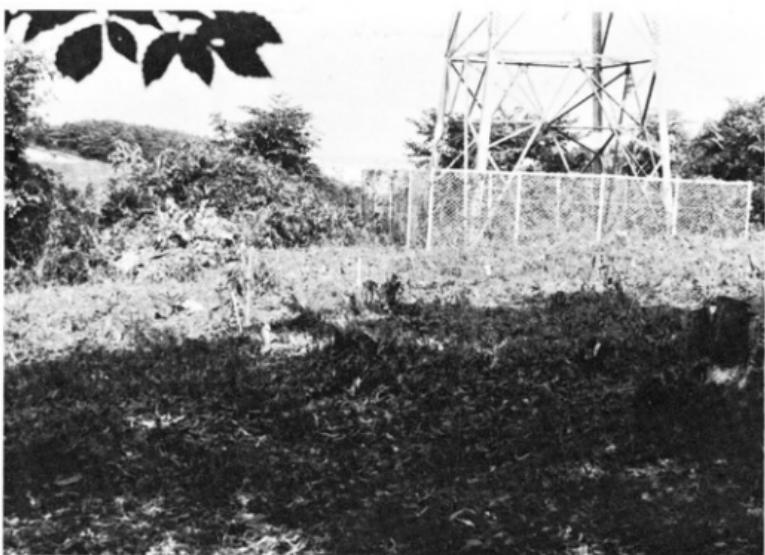


写真4 調査地點近景

写真5 調査風景(1)



写真6 調査風景(2)



写真7 調査風景(3)





写真8 トレンチ南壁セクション



写真9 中央アセクション

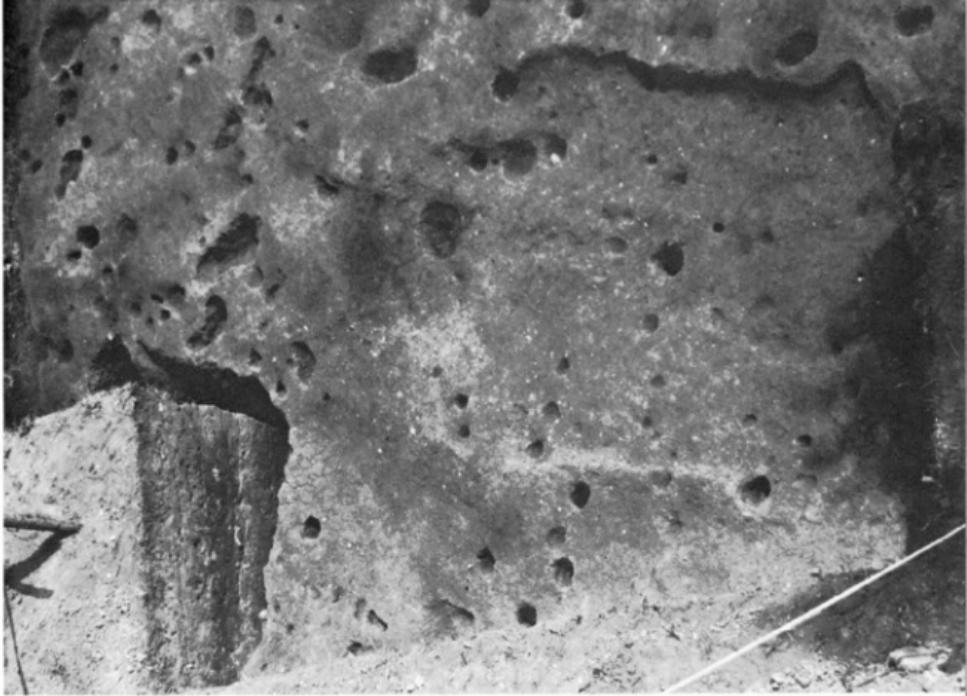


写真10 1号、2号住居跡全景

写真11 2号住居跡埋土セクション





写真12 2号住居跡環状

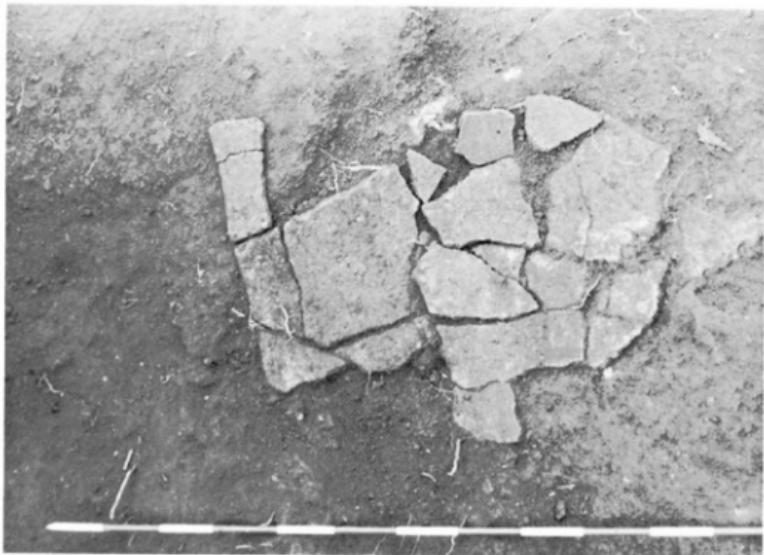


写真13 陶物出土状況

写真14

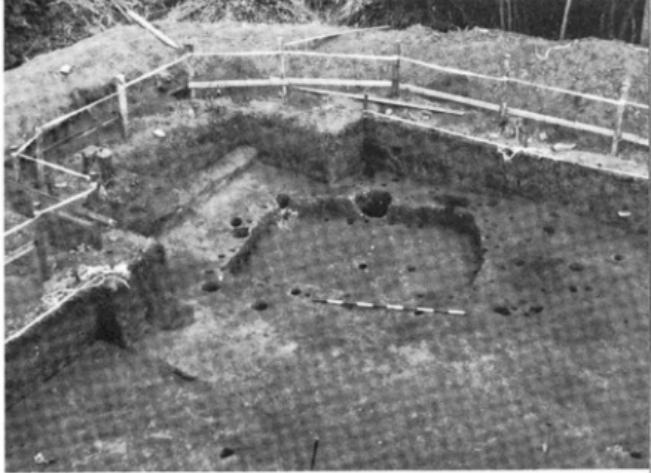
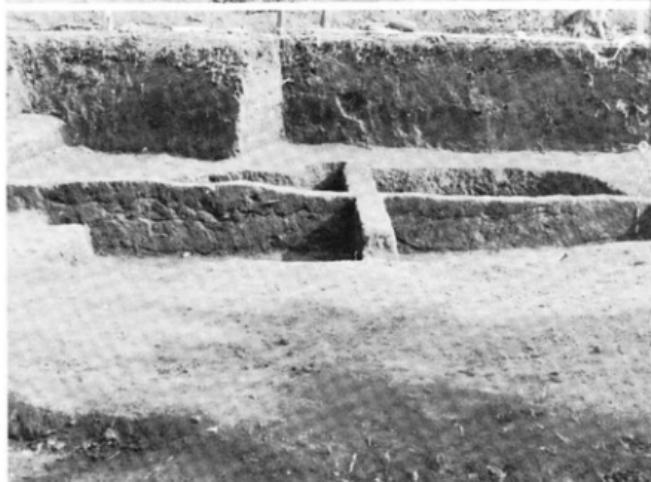


写真15



写真16



3号住居跡東西セクション
3号住居跡南北セクション

写真17

3号住居跡全景

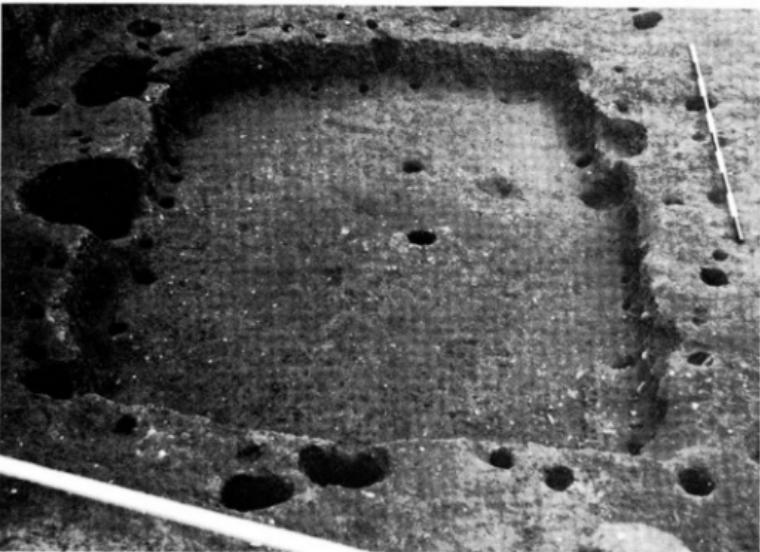


写真18

3号住居跡細部(1)



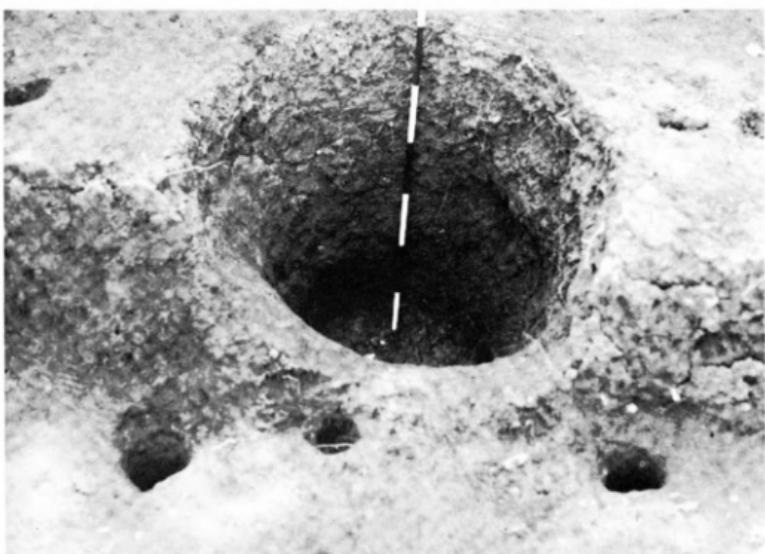


写真19 3号住居跡細部(2)一大型ピット

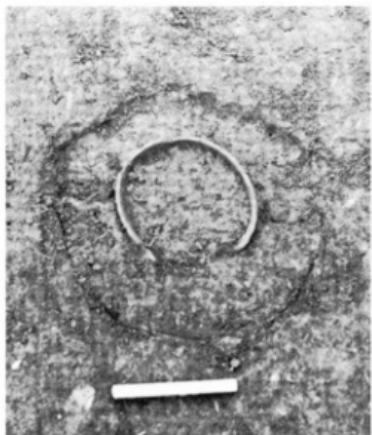


写真20 土器埋設遺構検出写真



写真21 埋設土器掘り上げ状況

写真22 昭和48年度調査(B)区遠景



写真23 昭和48年度調査区全景



写真24 昭和48年度住居跡埋土断面



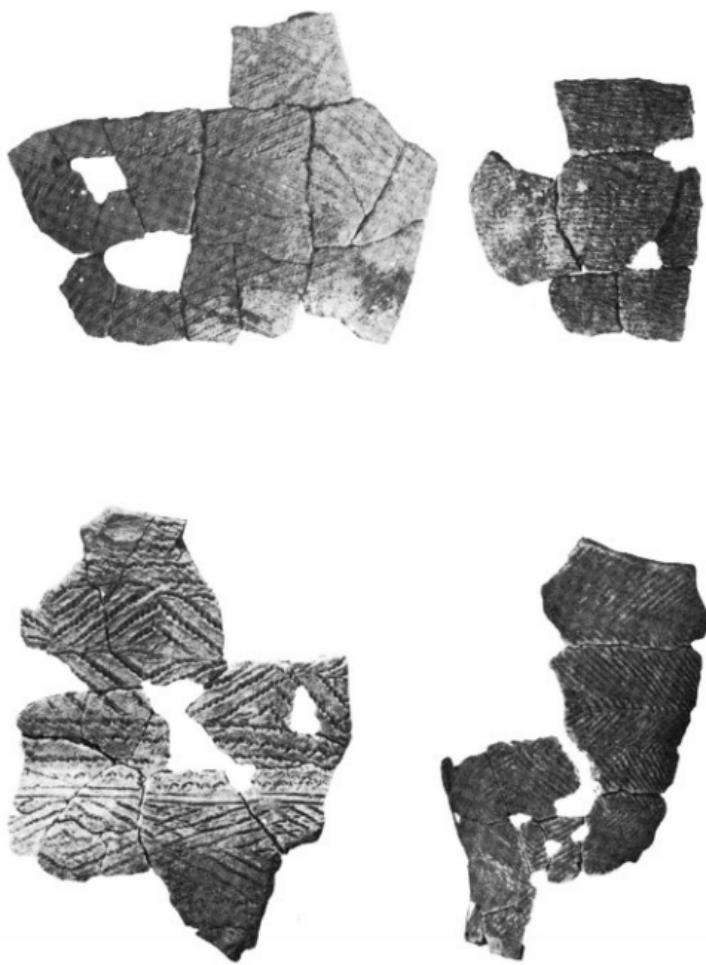


写真25 繩文土器(1)

上、第1層出土 下、第2層出土
縮尺 1/4



写真26 繩文土器(2)

上、第2層出土
中、第26層出土
下、第3層出土
縮尺 1/4

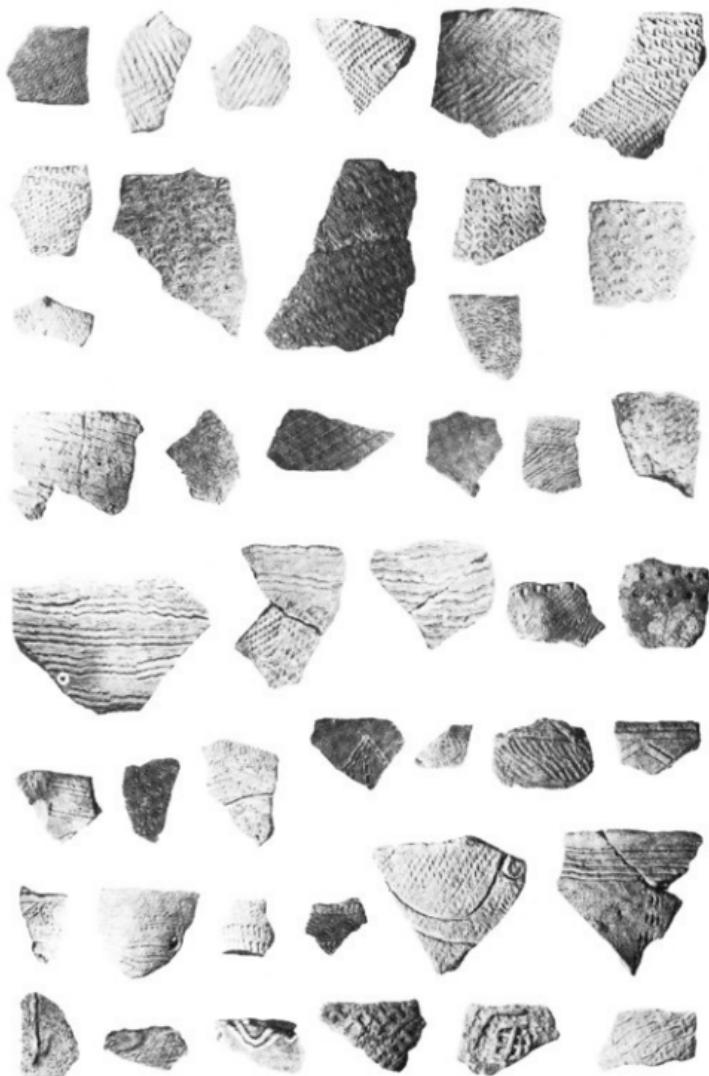


写真27 繩文土器(3) 第1層出土土器

縮尺 1/3

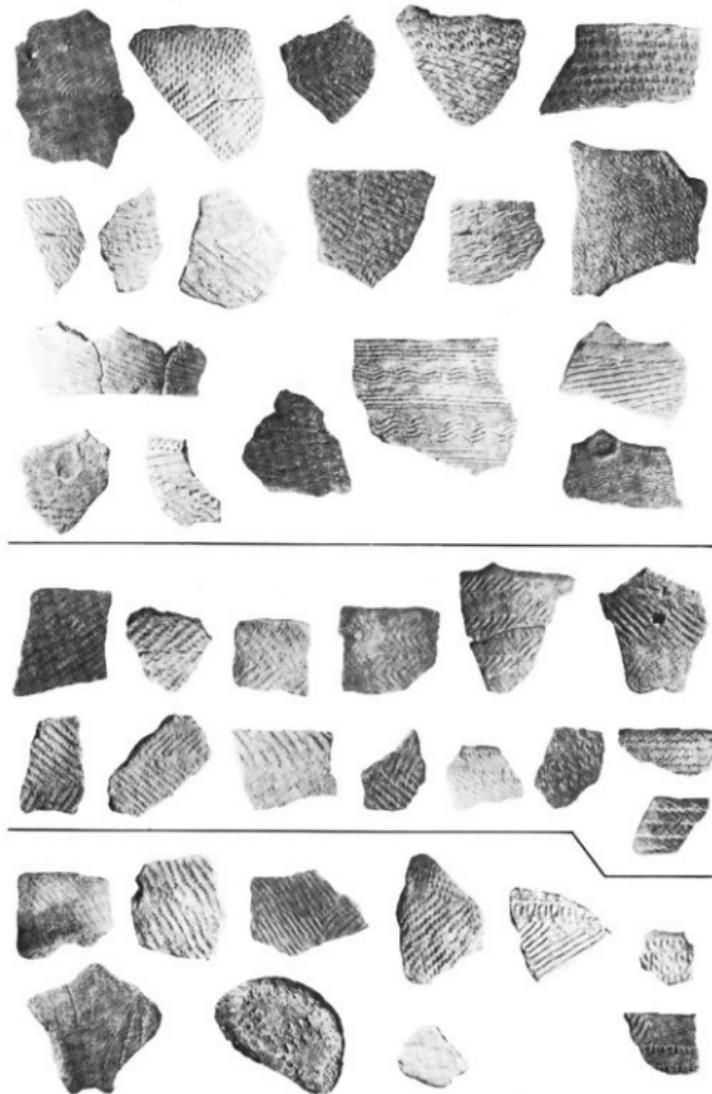


写真28 縄文土器(4) 第2a・2b・3層出土土器

縮尺 1/3



写真29 土器埋設ピット出土土器

縮尺 1/2

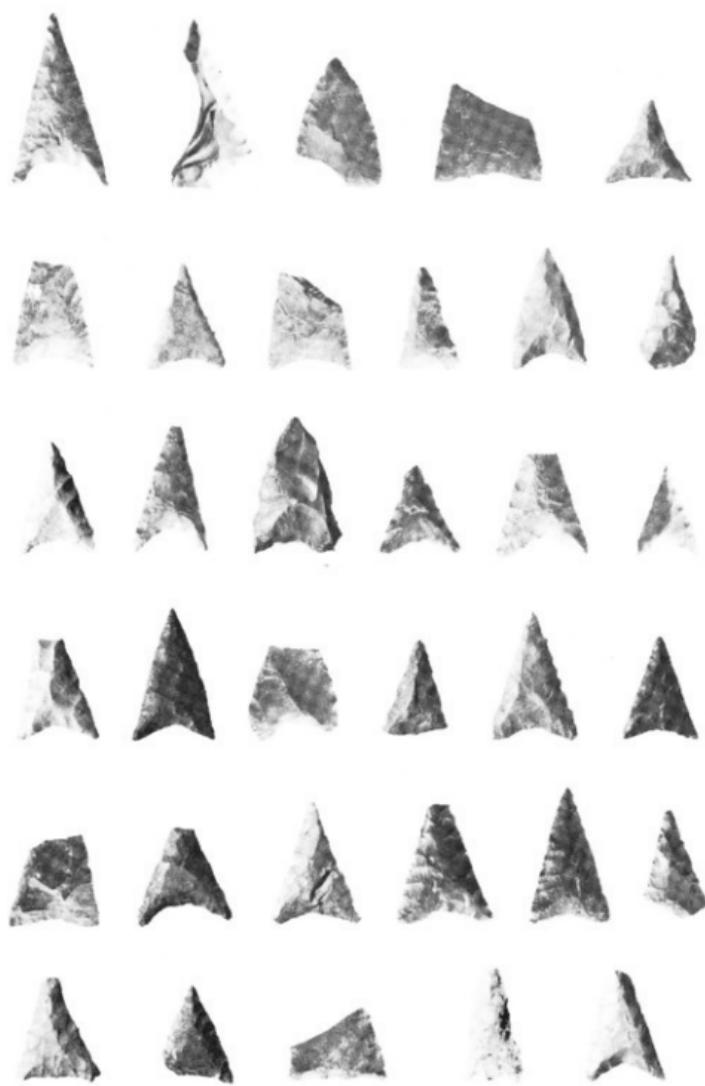


写真30 遺物写真一石器(1) (石 鏃)

実大



写真31 石器(2)〈石 起〉

縮尺 1/3



写真32 石器(3)〈石槍〉

縮尺 1/3

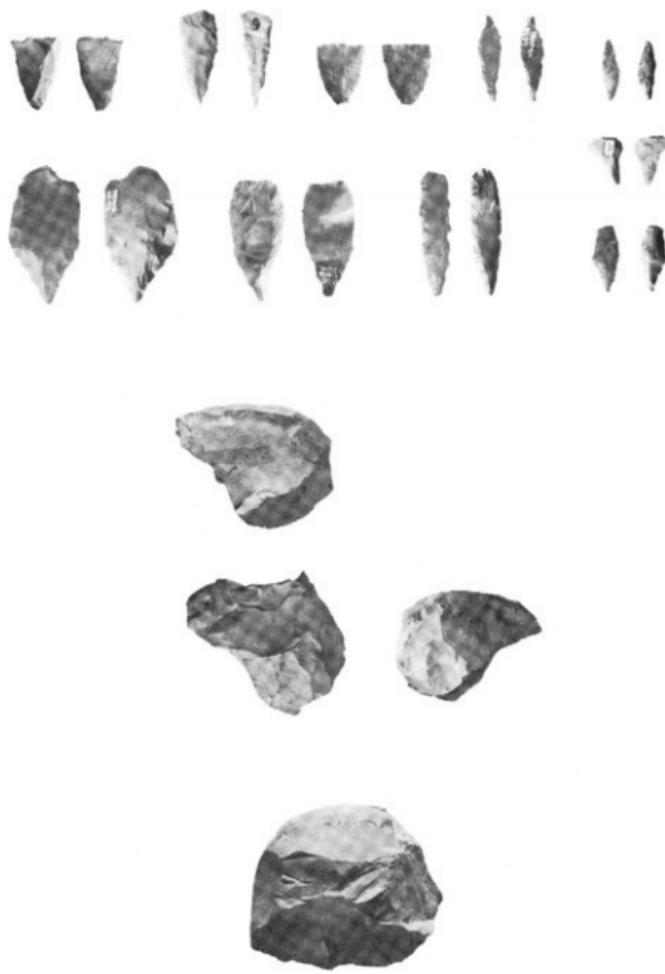


写真33 石錐・石核

縮尺 1/2



写真34 石 篦

縮尺 1/3



写真35 削 片 類

縮尺 1/3



写真36 石片類

縮尺 1/3

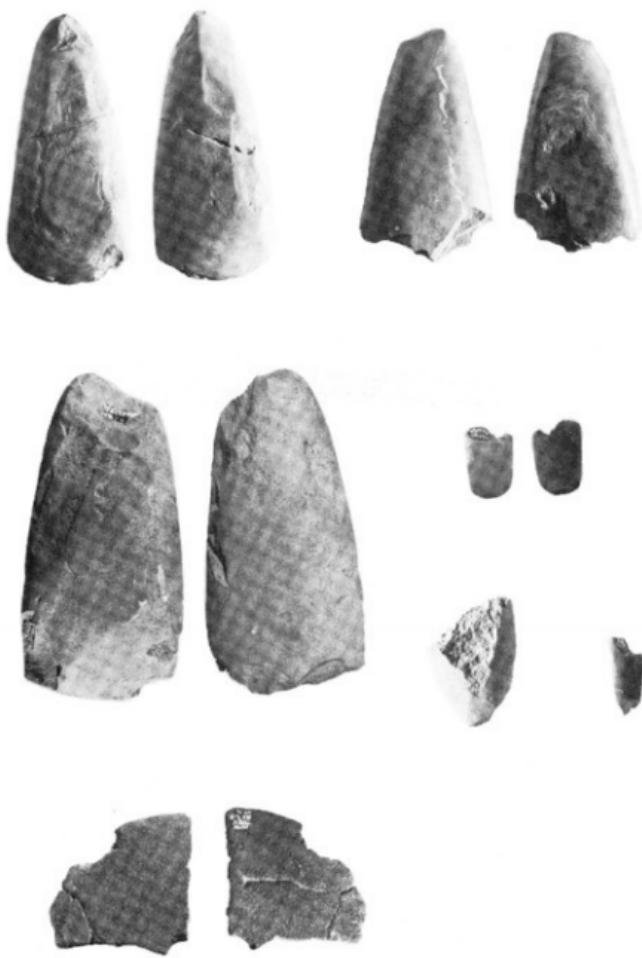


写真37 磨製石斧

縮尺 1/2



写真38 石 横 横尺 1/3 磨製石斧 横尺 1/2

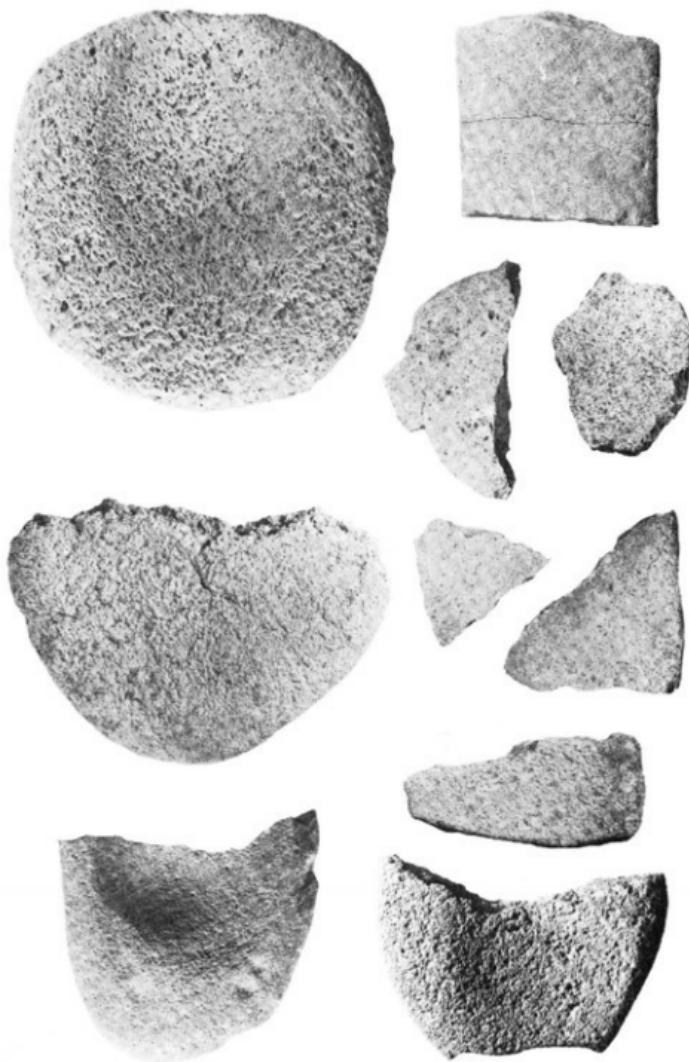


写真39 石皿

縮尺 1/5



写真40 凹 石

縮尺 1/3



写真41 凹 石・磨 石

縮尺 1/3



写真42 磨 石

縮尺 1/3

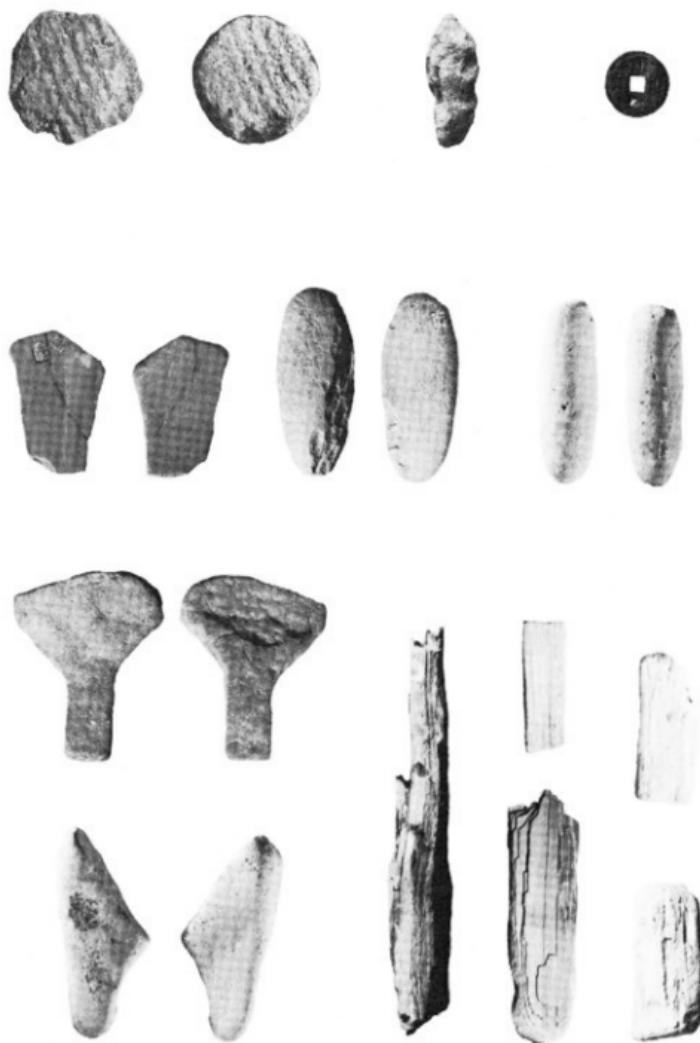


写真43 その他の出土遺物

縮尺 上 1/2
中・下 1/3



写真44 第1・2・3号住居跡出土遺物

縮尺 1/3



写真45 土偶 縮尺 1/2 袋状土器 縮尺 1/3

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物葦原下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳調査報告書（昭和35年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松塚跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山柄穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡－範囲確認調査報告書（昭和53年3月）
第14集 采道跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備課調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開発伴隨遺跡調査報告I（昭和55年3月）
第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集 年報1（昭和55年3月）
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
-

仙台市文化財調査報告書第25集

昭和55年度

三神峯遺跡発掘調査報告書

昭和55年12月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166
